福岡市埋蔵文化財調査報告書　第226集

IKI MATU DAI

生松台

― 西区野方土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の調査 ―

HIRO ISI
広石遺跡群Ｃ地点・広石古墳群Ⅵ群

広石遺跡群Ｄ地点・広石古墳群Ⅶ群

NA KIRI DANI
名切谷遺跡

KASA MA DANI
笠間谷古墳群

NO KATA
野方古墳群Ｄ群

O OTO
大音遺跡

１９９０

福岡市教育委員会

生松台　正誤表　NO.1

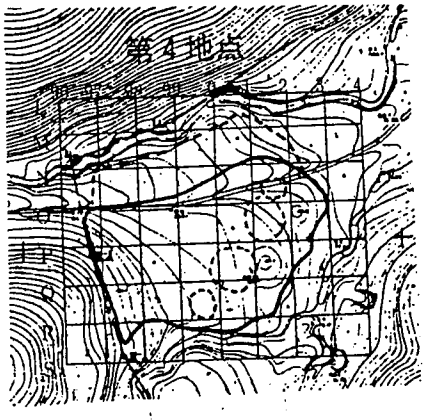
箇所	誤	正
例言 14行目	宮井 善郎	宮井 善朗
図版目次 PL.10 (8)	SX54 (北から)	SX32 (東から)
本文 P7 23行目	21棟	22棟
〃 24行目	86基	98基
〃 25行目	30基	34基
〃 26行目	7基	9基
P10 16行目	…139……	削除
〃	…(255) 1戸, Cタイプ…	…(255) 1戸, B'タイプ (139.208) 2戸, Cタイプ… 25～28 = SC52 29 = SC257 30～32 = SC91 33～35 = SC77 36～43 = SC139
P13 欄外		
P14 14行目	…87, Ⅵ期…	…87·51·61, Ⅵ期……
15行目	…49…	削除
17行目	…235…37…	…88…30…
〃	…186…	削除
18行目	226…4…263…	〃
19行目	…23)	〃
20行目	…63·157	…63·157·164
〃	…25·37	…25·37·45,
22行目	14基 1968g	13基 1951g
25行目	43649で66.9%…8遺構 528g	43479で66.4%…9遺構 545g
26行目	8.1%	8.3%
27行目	2基 (63.15)	5基 (63·15·93·164·192)
〃	5基	15基

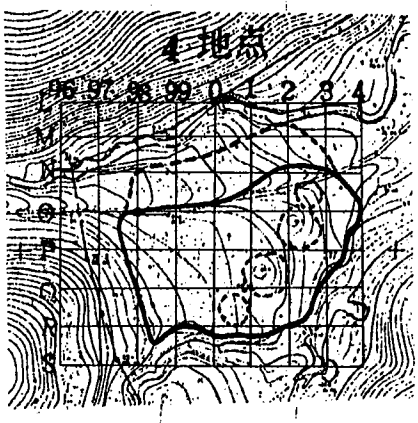
福岡市埋蔵文化財センター

生松台 正誤表 No2

箇所		誤	正
P17	1行目	…32・254)	…32・254・23・25・30・45・88・95・162・205・224・256)
	〃	3基(22・18・24)	5基(22・24・40・57・59)
	12～13行目	ここで鉄滓・製塩土器とも検出されない。	削除
	13行目	44～42	44～47
P19	2行目	南東	南西
	14行目	SB71・70…	SB69・71・70…
P20	1行目	SB72・98	SB76・265
	2行目	69・74・75・76・81・99	74・75・81・98・99
P22	14行目	鉄もしくは	製鉄もしくは
P23	1行目	43649	43479
	3行目	…4遺構…15基…	…8遺構…21基
P29	1行目	…29基…7基	…33基…9基
PL10	(8)	SX54(北から)	SX32(東から)

付図1





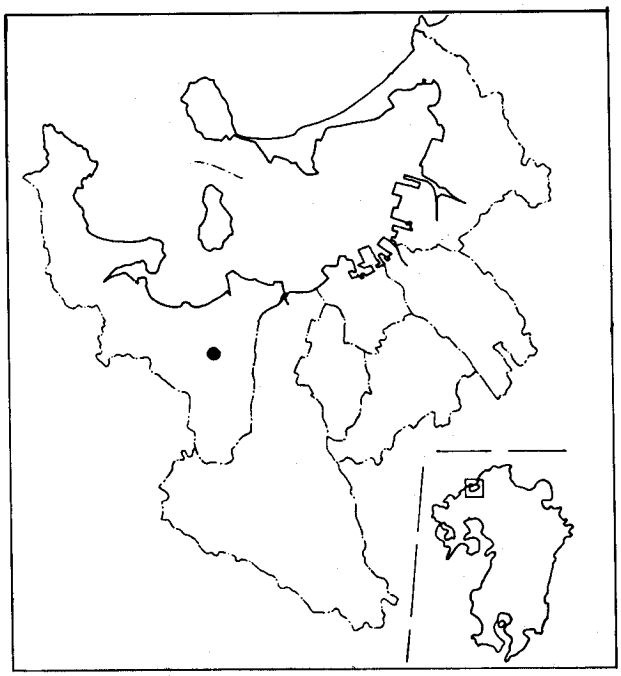
福岡市埋蔵文化財センター

IKI MATU DAI

生松台

— 西区野方土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第226集



1990

福岡市教育委員会

序

現在、九州の中枢都市として発展をつづける福岡都市圏人口は、増加の一途をたどっています。そして、これにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、やむなく失なわれていく遺跡の発掘調査を行なっています。

本書もそうしたなかのひとつで、西区野方地区区画整理事業に伴なって発掘調査を実施した広石遺跡群他の調査報告を収録したものであります。

調査の結果、おもに縄文時代から奈良時代にかけての重要な遺跡であることが確認されました。

調査に際しご協力をいただいた関係者各位、また地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝する次第であります。

平成2年3月

福岡市教育委員会
教育長　佐藤　善郎

例　言

1．本書は福岡市生松台土地区画整理組合が実施した西区野方の土地区画整理事業（生松台団地）にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が昭和62年～63年に実施した広石遺跡群C地点・広石古墳群VI群（第1地点）、広石遺跡群D地点・広石古墳群VII群（第2地点）、名切谷遺跡（第3地点）、笠間谷古墳群（第4地点）、野方古墳群D群（第5地点）、大音遺跡（第6地点）の調査報告書である。

2．本書で用いる方位は国土地理院座標第2系による座標北で、磁北はこれに6°2′西偏する。

3．調査区内のグリッド名称は10m方眼線の西北交点とした。

4．遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址→SC、掘立柱建物→SB、土壙→SK、溝→SD、ピット→SP、石棺→SQ、甕棺→ST、炉→SH、登窯→SI、その他→SXとし遺構番号は記号のあとに順番に続けた。

5．本書に使用した実測図の作成は、池崎譲二、山崎龍雄、下村　智、加藤良彦、荒牧宏行、宮井善郎、長家　伸、大内士郎、平川敬治、大橋隆司、黒田和生、英　豪之、溝口武司、大嶺佳之、土斐崎順子、汐崎美紀、岡根直美、西川　徹、西田　巌、五島昌浩による。

6．製図は山崎・下村・加藤・宮井・長家・平川・岡根による。

7．本書で用いた写真は池崎、山崎、下村、加藤による。

8．本書の執筆編集は第1～第5地点を下村・加藤が、第6地点を山崎が行なった。

9．本書にかかわる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに……1
　1．調査に到る経緯……1
　2．調査の組織……1
Ⅱ．調査区の立地と環境……3
Ⅲ．調査の記録……5
　1．広石遺跡群Ｃ地点・広石古墳群Ⅵ群（第１地点）……5
　2．広石遺跡群Ｄ地点・広石古墳群Ⅶ群（第２地点）……45
　3．名切谷遺跡（第３地点）……55
　4．笠間谷古墳群（第４地点）……61
　5．野方古墳群Ｄ群（第５地点）……71
　6．大音遺跡（第６地点）……79

第１地点　挿図目次

Fig.1　調査区位置図（1/50000）……4
Fig.2　調査地点位置図（1/5000）……折込１
Fig.3　Ⅰ区横断土層断面図（1/100）…折込２
Fig.4　縄文時代遺構分布図（1/2300）……折込２
Fig.5　古墳時代遺構分布図１（1/2300）折込２
Fig.6　古墳時代遺構分布図２（1/2300）…折込２
Fig.7　奈良時代遺構分布図（1/2300）…折込２
Fig.8　中世・近世遺物実測図（1/3）……折込２
Fig.9　SK142 実測図（1/40）……8
Fig.10　SK147 実測図（1/40）……8
Fig.11　縄文時代遺物実測図（1/3，1/2）…9
Fig.12　SC257 実測図（1/60）……10
Fig.13　SC52　実測図（1/60）……11
Fig.14　SC091 実測図（1/60）……11
Fig.15　SC168 実測図（1/60）……11
Fig.16　SC152 実測図（1/60）……12
Fig.17　SC139 実測図（1/60）……12
Fig.18　SC077 実測図（1/60）……12
Fig.19　SC 出土遺物実測図（1/4）……13
Fig.20　SK015 実測図（1/60）……14
Fig.21　SK019 実測図（1/60）……14
Fig.22　SK049 実測図（1/60）……15
Fig.23　SK192 実測図（1/60）……15
Fig.24　SK167 実測図（1/60）……15
Fig.25　SK 出土遺物実測図（1/4）……16
Fig.26　SQ218 実測図（1/30）……17
Fig.27　SQ006 実測図（1/30）……17
Fig.28　ST274 実測図（1/20）……17
Fig.29　SB073 実測図（1/100）……18
Fig.30　SB072 実測図（1/100）……18
Fig.31　SB070 実測図（1/100）……19
Fig.32　SB071 実測図（1/100）……19
Fig.33　SB074 実測図（1/100）……19
Fig.34　SB110 実測図（1/100）……19
Fig.35　SB200 実測図（1/100）……20
Fig.36　SB265 実測図（1/100）……21
Fig.37　SB206 実測図（1/100）……21
Fig.38　SB081 実測図（1/100）……21

Fig.39 SB099 実測図（1/100）……21
Fig.40 SB201 実測図（1/100）……22
Fig.41 SB202 実測図（1/100）……22
Fig.42 客土部出土遺物実測図（1/4）……23
Fig.43 SK004 実測図（1/30）……24
Fig.44 SK113 実測図（1/30）……24
Fig.45 SK116 実測図（1/30）……24
Fig.46 SX135 実測図（1/20）……25
Fig.47 SK001 実測図（1/30）……26
Fig.48 SX7 実測図（1/40）……26
Fig.49 SI003 実測図（1/40）……27
Fig.50 奈良時代遺構出土遺物実測図（1/4～1/2）……28
Fig.51 広石古墳群第Ⅵ群１号墳現況測量図（1/300） 30
Fig.52 広石古墳群第Ⅵ群２号～５号墳現況測量図（1/300）…30
Fig.53 広石古墳群第Ⅵ群１号墳墳丘測量図（1/300） 31
Fig.54 広石古墳群第Ⅵ群２号～５号墳墳丘測量図（1/300）…31
Fig.55 １号墳墳丘外護列石出土状況図（1/100）……32
Fig.56 １号墳周溝出土遺物実測図（1/4）……32
Fig.57 １号墳石室、周溝出土状況及び土層断面実測図（1/60）…33
FIg.58 ２号墳石室及びⒺⒻ土層断面実測図（1/60） 折込３
Fig.59 ２号墳ⒶⒷ土層断面、墳丘外護列石、供献土器出土状況実測図（1/20、1/60、1/100）折込４
Fig.60 ２号墳出土遺物実測図（1/4、2/3）……35
Fig.61 ３号墳墳丘及び外護列石出土状況実測図（1/100）…37
Fig.62 ３号墳出土遺物実測図１（2/3）……38
Fig.63 ３号墳石室及び墳丘土層断面図（1/60）…折込５
Fig.64 ３号墳出土遺物実測図２（1/4）……39
Fig.65 ４号墳墳丘及び外護列石実測図（1/100）……40
Fig.66 ４号墳石室及び土層断面実測図（1/60）……折込６
Fig.67 ４号墳出土遺物実測図（1/4）……41
Fig.68 ５号墳石室及び墳丘土層断面図（1/60）…42
Fig.69 ５号墳出土遺物実測図（1/4）……42

第２地点　挿図目次

Fig.1 SH20 実測図（1/20）……45
Fig.2 SK38 実測図（1/40）……45
Fig.3 遺構全体図（1/300）……46
Fig.4 SC28 実測図（1/60）……47
Fig.5 SC50 実測図（1/60）……47
Fig.6 SC52 実測図（1/60）……48
Fig.7 SB64 実測図（1/100）……49
Fig.8 SB68 実測図（1/100）……49
Fig.9 SB66 実測図（1/100）……49
Fig.10 SB67 実測図（1/100）……49
Fig.11 SB65 実測図（1/100）……49
Fig.12 SK10 実測図（1/30）……50
Fig.13 SK01 実測図（1/30）……50
Fig.14 ST03 実測図（1/20）……50
Fig.15 ST03 実測図（1/6）……50
Fig.16 SK13 実測図(1/30)……51
Fig.17 SK30 実測図(1/30)……51
Fig.18 Ⅶ群１号墳実測図(1/60)……52
Fig.19 出土遺物実測図（1/4）……54

第３地点　挿図目次

Fig.1 SH9 実測図(1/30)……57
Fig.2 遺構全体図(1/300)……58
Fig.3 SH-1 実測図（1/80）……59
Fig.4 SK-3 実測図（1/30）……59
Fig.5 SK08 実測図（1/20）……59
Fig.6 出土遺物実測図（1/4）……60

第４地点　挿図目次

Fig.1 笠間谷古墳群遺構配置図（1/300）…64
Fig.2 １号墳石室及び墳丘土層断面実測図（1/60）…折込７

Fig.3　1号墳外護列石実測図（1/60）…折込8
Fig.4　1号墳出土遺物実測図（1/4）……65
Fig.5　2号墳出土遺物実測図（1/4）……66
Fig.6　2号墳石室及び墳丘土層断面実測図（1/60）…折込9
Fig.7　3号墳石室実測図（1/60）……67
Fig.8　4号墳出土遺物実測図（1/4）……68
Fig.9　4号墳石室実測図（1/60）……68
Fig.10　SD-01土層断面図（1/40）……69
Fig.11　SK-05実測図（1/40）……69
Fig.12　SK-10実測図（1/30）……69
Fig.13　出土遺物実測図（1/3、1/1）……70

第5地点　挿図目次

Fig.1　野方古墳群D群墳丘出土状況図（1/300）　73
Fig.2　1号墳出土玉類実測図（1/2）……74
Fig.3　1号墳石室及び墳丘土層断面実測図（1/60）折込10
Fig.4　1号墳外護列石実測図（1/60）……折込11
Fig.5　1号墳出土遺物実測図（1/4）……75
Fig.6　2号墳石室実測図（1/60）……76
Fig.7　2号墳外護列石及び土層断面実測図（1/60）折込12
Fig.8　2号墳出土遺物実測図（1/4）……77
Fig.9　調査区出土土壙実測図（1/40）……78
Fig.10　SK09　土壙出土遺物実測図（1/4）……78

第6地点　挿図目次

Fig.1　第6地点遺構配置図（1/250）……80
Fig.2　SK01～04・06・1号土器群（1/30）……82
Fig.3　第6地点出土遺物（1/4）……84

図　版　目　次

PL.1　(1)1区全景（南東から）　(2)5区全景（南から）
PL.2　(1)4区全景（南から）　(2)3区全景（南東から）
PL.3　(1)1区全景（北東から）　(2)SK142（南から）　(3)SC90(下)・91(上)・92（右）(南東から)
(4)SC52（南東から）　(5)SC152（上）・153（下）(南東から)　(6)SC168（東から）
PL.4　(1)SC77（南東から）　(2)SC34竈（南から）　(3)SK167（東から）
(4)SQ218（北から）　(5)ST274（南東から）　(6)SB73（北東から）
PL.5　(1)SB73（南東から）　(2)SB71（上）・72（下）(南東から)
(3)SB201（上）・202（下）(東から)　(4)SB70（東から）　(5)SB200（東から）
PL.6　(1)SB76（南東から）　(2)SK113（南西から）　(3)SX135（北から）　(4)SI3（南東から）
(5)SX7検出状況（南東から）　(6)SX7完掘状況（南東から）　(7)SX7内部主体（南東から）
PL.7　(1)広石古墳群第VI群1号墳出土状況（南から）　(2)1号墳石室・外護列石出土状況（西から）
(3)2号～5号墳出土状況（南から）　(4)2号墳出土状況（南から）　(5)2号墳石室（南から）
PL.8　(6)3号墳出土状況（南から）　(7)3号墳奥壁（南から）　(8)3号墳羨道部遺物出土状況（西から）　(9)4号墳出土状況（南から）　(10)4号墳石室出土状況（敷石第2面）(西から）　(11)5号墳出土状況（南から）
PL.9　(1)調査区全景（北から）　(2)調査前風景（北から）　(3)調査区西半全景（南から）
(4)SH20（北西から）　(5)SK38（北から）

PL.10 (1) SC28（北から） (2) SC50・51（手前）(北から） (3) SK42（中央）・SC52（南から）
(4) SB64（手前）・SB65（北東から） (5) SB68（南から） (6) SB67（南から） (7) ST-03（北から） (8) SX54（北から）
PL.11 (1)Ⅶ－1号墳全景（北から） (2)Ⅶ－1号墳検出状況（南から） (3)Ⅶ－1号墳石室完掘状況（南から） (4)Ⅶ－1号墳石室完掘状況（北から） (5)Ⅶ－1号墳石室内（北から）
PL.12 (1)調査前風景（北東から） (2)調査区全景（東から） (3) SH01（中央）・SH02（手前）（南東から） (4) SH01 近景（南東から） (5) SH09（南から） (6) SK03 検出状況（北東から） (7) SK03 完掘状況（北東から）
PL.13 (1)笠間谷古墳群全景（南上空から） (2)笠間谷古墳群調査前全景（南から） (3)笠間谷古墳群1号墳調査状況（南から） (4) 1号墳外護列石出土状況（東から） (5) 1号墳羨道（玄室から外を望む） (6) 1号墳奥壁（南から）
PL.14 (7) 2号墳出土状況（南から） (8) 2号墳奥壁（南から） (9) 3号墳出土状況（南から）
(10) 4号墳出土状況（東から） (11)SK05（南から） (12)SK10（南東から）
PL.15 (1)野方古墳群D群出土状況（北から） (2) 1号墳墳丘・外護列石出土状況（東から） (3) 1号墳玄門部（北から） (4) 1号墳奥壁（南から） (5) 1号墳墳丘土層堆積状況（西側）（南から）
(6) 1号墳墳丘土層堆積状況（東側）（南から）
PL.16 (7) 2号墳墳丘・外護列石出土状況（南から） (8) 2号墳石室出土状況（南から） (9) 2号墳玄門部（北から） (10) 2号墳奥壁（南から） (11) 2号墳羨道西側墳丘出土供献土器（南から） (12) 野方古墳群D群調査状況（東から）
PL.17 (1)調査区全景（西から） (2)遺構検出状況（西から） (3) SK01（西から） (4) SK02（南西から） (5) SK03（東から） (6) SX01（西から） (7)土器群出土状況（南から）

付　図　目　次

付図1　調査区地形図・グリッド配置図（1/2000）
付図2　第1地点遺構全体図（1/300）

Ⅰ　は　じ　め　に

1　調査に至る経緯

今回の調査は福岡市生松台土地区画整理組合が計画実施した、1200区画60haにわたる区画整理事業にともなって実施された緊急発掘調査である。事業は昭和58年計画され本課に当該地の遺跡の有無が照会された(教埋58-2-204)。組合との協議を重ね昭和61年５月と６月の２回にわたり遺跡確認の試掘調査を行なった。結果、６箇所で古墳を含む遺跡の埋蔵が確認された。現状での保存が望まれたが計画変更は困難であり、更に協議を重ねた結果、組合が調査費全額を負担し、本課が緊急発掘調査を行なうこととなった。調査は昭和61年８月に第６地点が実施され、昭和62年５月～63年３月の予定で第１～第５地点の調査が実施された。しかし予想に反して丘陵斜面といった立地にかかわらず、遺構の分布が極めて濃厚である事が徐々に判明し、３月終了は明らかに不可能であると判断された。このため組合と再協議を行ない、組合の理解を得て期間・調査費の再契約がなされ、昭和63年９月に調査を完了した。

2　調査の組織

調査委託：福岡市生松台土地区画整理組合

調査主体：福岡市教育委員会　　教育長　佐藤善郎

調査総括：埋蔵文化財課長　柳田純孝　　埋蔵文化財第２係長（当時）飛高憲雄

調査庶務：埋蔵文化財第１係　岸田　隆（当時）

調査担当：埋蔵文化財第２係　池崎譲二(現市立博物館学芸主査)　山崎龍雄　下村　智　加藤良彦

調査協力：大橋隆司（現佐賀県神崎町職嘱）　長家　伸（現本課職員）　大嶺佳之（現前原町職嘱）　西川　徹・西田　巌・五島昌浩（山口大学）　黒田和生　英　豪之　溝口武司　汐崎美紀　土斐崎順子　脇坂レイコ　米嶋ハツネ　浜地冨男　藤　タケ　原ハナエ　山田トキエ　山下アヤコ　森山早苗　堀尾久美子　西嶋洋子　原　幸子　川口シゲノ　米嶋規久子　高田マサエ　松尾キミ子　松尾鈴子　舎川春江　柴田常人　坂田セイ子　百武義隆　津川真千代　栗木和子　渋谷友代　古賀美恵子　高木正代　窪田　慧　谷　吉美　松田純子　吉住シズ子　横田松ノ　藤崎久子　若狭睦代　近藤誠一　花田　篤　脇坂チカ　瀬戸啓治　脇坂マキノ　平田勇夫　平田千鶴子　吉岡トク　西島マツ子　西島ミチ子　網田美代野　脇坂武美　脇坂喜代子　井口菊太郎　有田吉太　青柳聖子　坂田美佐子　赤池春光　吉積ミエ子　野坂ミエ子　松本藤子　上原チヨ子　土斐崎孝子　津田和子　鳥巣良子

日高義人　中神元志　大内士郎（現今宿公民館長）　吉村哲美　田中英樹　石川憲喜　松尾　司　馬場寿生　本多育夫（九州大学）　野田純子・舛本亜希（熊本大学）　西尾たつよ　金子由利子　松尾玲子　松井フユ子　清原ユリ子　松井邦子　坂口フミ子　佐藤テル子

資料整理：平川敬治（九州大学）　池田初実　前田直子　国武真理子　小城信子　木村厚子　楢崎多佳子　能美須賀子　岡根なおみ

II　調査区の立地と環境

本調査区は福岡市の都心部より西へ10km、博多湾岸より南へ３kmの地点、室見川が貫流する早良平野の西を画する、背振山系から飯盛山・叶岳、長垂山へとつらなる山塊から東の平野部へいくつも延びる標高95m～33mの小支丘及び裾の中位段丘上に展開している。行政的には福岡市西区大字野方に所在する。

周辺の歴史環境を概観してみると、旧石器・縄文早期の遺跡は山麓部と洪積台地に点在しており、羽根戸原・吉武遺跡群・有田遺跡でナイフ形石器・細石器が、羽根戸遺跡で押型文・撚糸文土器が検出されている。前期は沖積地の微高地上まで進出し、四箇遺跡群・湯納遺跡・田村遺跡で轟Ｂ式土器・曽畑式土器・竪穴・ドングリピット等が検出されている。中・後期では吉武遺跡群でドングリピット50数基、有田遺跡で貯蔵穴様ピット60数基、四箇遺跡群で埋甕・竪穴・竪穴住居址、特殊泥炭層（竪果類果皮の多量堆積－ヒョウタン・リョクトウ出土）が出土。晩期では稲作開始期の突帯文の時期に増大し、有田七田前・十郎川・拾六町ツイジ・四箇・田村遺跡などで大陸系磨製石器・木製農耕具未製品・矢板列・埋甕等が検出されている。

弥生時代前期前半は前代と重なって海岸部の中・低位段丘上に多く分布している。有田遺跡には300×200mの大規模な環濠が出現し、藤崎遺跡では土壙墓群が見られる。前期後半からは内陸平野部にも集落が展開し、吉武遺跡群では「早良王墓」として賑わした木棺・甕棺墓群とともに４×５間の掘立柱建物が検出されている。中期はさらに面的な広がりを見せ四箇長峰遺跡のように内陸奥部まで広がる。吉武遺跡群は拠点として更に発展した様で甕棺墓は1000基以上、墳丘墓も検出された。

弥生終末から古墳時代前期にかけては野方中原・野方塚原、野方勧進原・野方柳原・飯盛谷・宮ノ前Ｃ地点・重留・五島山・藤崎・西新町・有田遺跡で石棺墓・方形周溝墓・墳丘墓・住居などが検出され後漢鏡・三角縁鏡などが出土している。中期では吉武で円墳20数基・帆立貝式墳（樋渡古墳）・方墳（樋渡２号墳）、掘立柱建物・住居址多数が検出され、重留では70m級の前方後円墳（灰塚－重留１号墳）、方墳（重留２号墳）がある。後期になると山麓部の丘陵上に古墳群は移り６世紀前半～中頃にかけ羽根戸、羽根戸南古墳群で群集墳の形成が始まり、６世紀後半以降金武古墳群（147基）、羽根戸南古墳群（20基）、羽根戸古墳群（146基）、野方古墳群（18基）、広石古墳群（19基）等金武～長垂山麓にかけ、にわかに増大する。鉄滓供献が見受けられるのも共通する。

歴史時代では奈良～平安時代の城ノ原廃寺・有田・吉武・石丸古川・下山門敷町遺跡で掘立柱建物群等が検出され、下山門・吉武・牟多田遺跡で製鉄址が確認されている。本調査区の地名「野方」は古代の「額田郷」・「額田駅」に由来しており、野方から本調査区北を通って今宿青木へぬける「広石越」は古代の官道に比定されている。

1．区画整理域　2．羽根戸遺跡　3．吉武遺跡群　4．有田遺跡
5．四箇遺跡群　6．湯納遺跡　7．田村遺跡群　8．拾六町ツイジ遺跡
9．藤崎遺跡群　10．野方中原遺跡　11．野方塚原遺跡　12．野方勧進原遺跡
13．野方柳原遺跡　14．飯盛谷遺跡　15．宮の前C地点　16．重留遺跡群
17．拝(灰)塚古墳　18．五島山古墳　19．西新町遺跡　20．羽根戸南古墳群
21．羽根戸古墳群　22．金武古墳群　23．野方古墳群　24．広石古墳群
25．城の原廃寺　26．石丸・古川遺跡　27．下山門敷町遺跡　28．牟多田遺跡

Fig.1　調査区位置図（1/50000）

遺跡分布地図
西部Ⅰ　104
Ａ－７　コノリＢ遺跡
Ａ－８　広石遺跡Ａ地点
Ａ－９　〃　Ｂ地点
Ａ－10　野方岩名隈遺跡
Ａ－13　野方中原遺跡
（国指定・史跡）
Ａ－14　野方中原Ｂ遺跡
Ｂ－４　広石古墳群Ⅰ群
Ｂ－５　〃　Ⅰ群
Ｂ－６　〃　Ⅱ群
Ｂ－７　〃　Ⅲ群
Ｂ－８　〃　Ⅳ群
Ｂ－９　〃　Ⅴ群
Ｂ－10　岩名隈古墳
Ｂ－13　コノリ古墳群　Ｂ群
Ｃ－３　コノリ製鉄遺跡Ｂ
Ｃ－４　コノリ製鉄遺跡Ｂ
第１地点
Ｂ－14　広石古墳群Ⅵ群
Ａ－15　広石遺跡群Ｃ地点
第２地点
Ａ－16　広石遺跡群Ｄ地点
Ｂ－15　広石古墳群Ⅶ群
第３地点
Ａ－17　名切谷遺跡

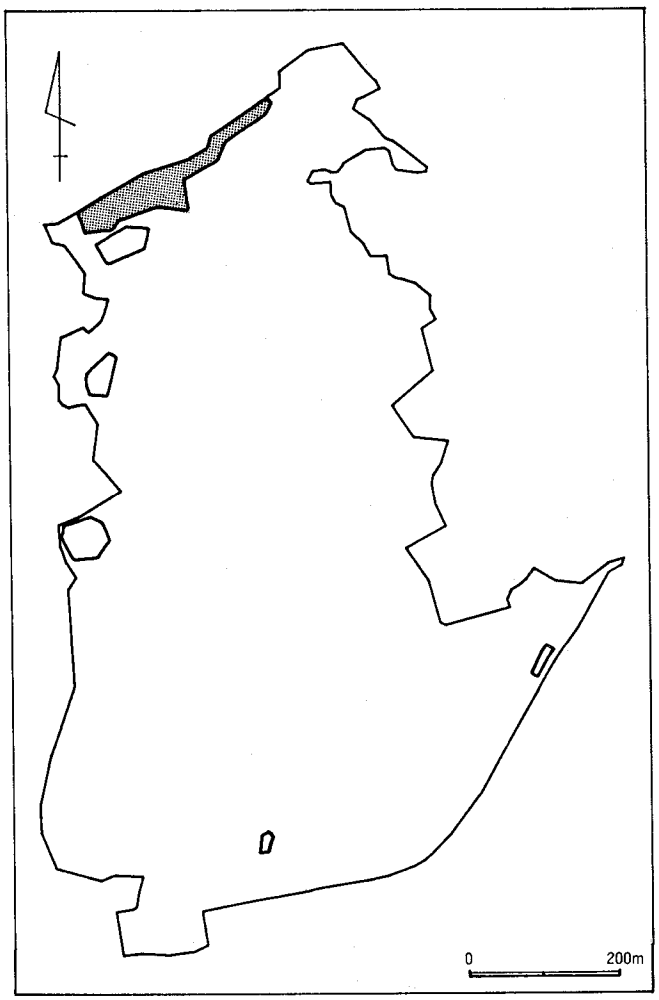
Ｂ－16　広石古墳群Ⅷ群
Ａ－18　広石遺跡群Ｅ地点

遺跡分布図
西部Ⅰ　105
Ａ－１　野方中原遺跡（国史跡）
Ａ－２　野方平原Ｂ遺跡
Ａ－４　野方塚原遺跡
Ｂ－１　野方大音石棺墓
Ｂ－３　野方古墳群Ａ群
Ｂ－４　〃　Ｂ群
Ｃ－１　野方新池遺跡
Ｃ－２　野方カサネ池遺跡
第４地点
Ｂ－25　笠間谷古墳群
第５地点
Ｂ－26　野方古墳群Ｄ群
第６地点
Ａ－10　大音遺跡

Fig.2　調査地点位置図（1/5000）

III 調 査 の 記 録

1．広石遺跡群C地点・広石古墳群VI群
（第１地点）



遺跡調査番号	８７３４		遺跡略号	ＨＲＣ－１・ＨＩＫ－６	
調査地地籍	西区野方地内		分布地図番号	１０４	
開発面積	60ha	調査対象面積	10,200m²	調査実施面積	8,383m²
調査期間	1987年９月22日～1988年３月31日		事前審査番号	58－１－170	

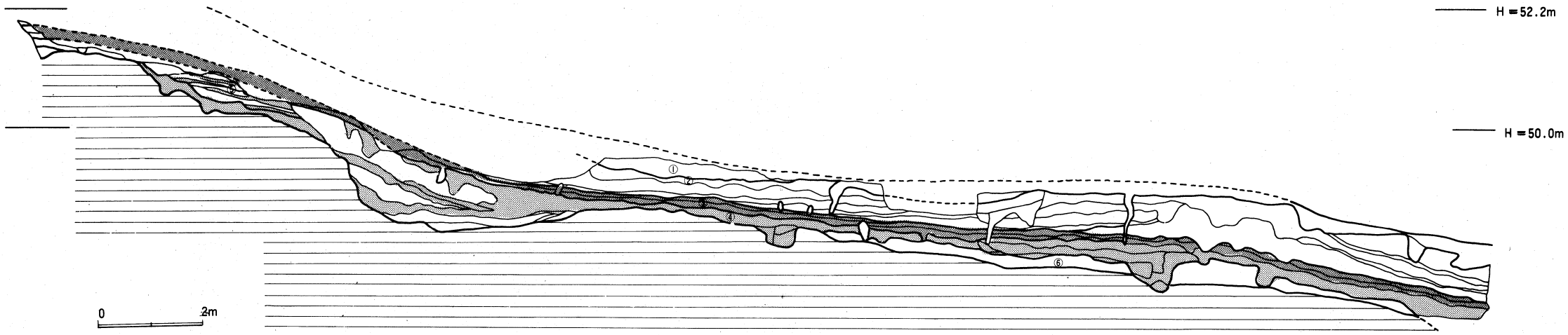


Fig.3　Ⅰ区横断土層断面図（1/100）

土層名称　①表土
②黄灰色～赤褐色シルト～砂礫層
③暗灰～黒灰色土→包含層上層
④暗灰褐色土
⑤赤褐色粘土と暗灰褐色土の互層→客土層
⑥黄灰色シルト質土
→包含層下層

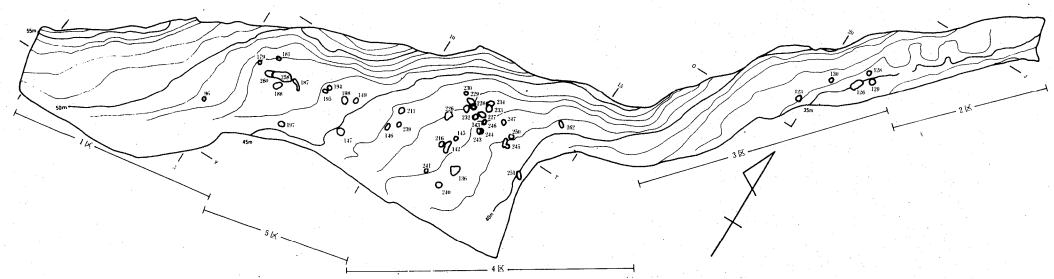


Fig.4　縄文時代遺構分布図（1/2300）

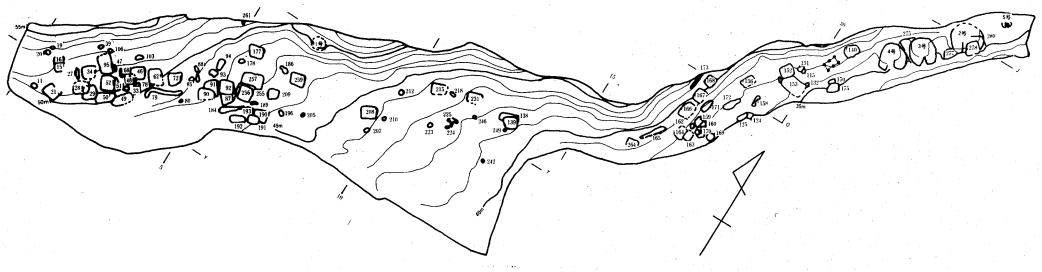


Fig.5　古墳時代遺構分布図Ⅰ（6C後半～7C前半）（1/2300）

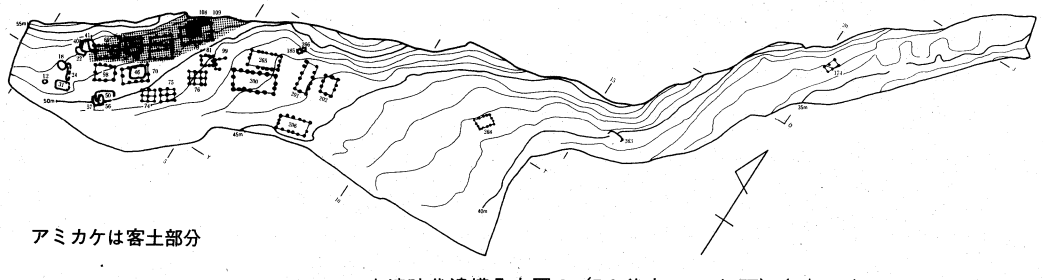


Fig.6　古墳時代遺構分布図2（7C後半～8C初頭）（1/2300）

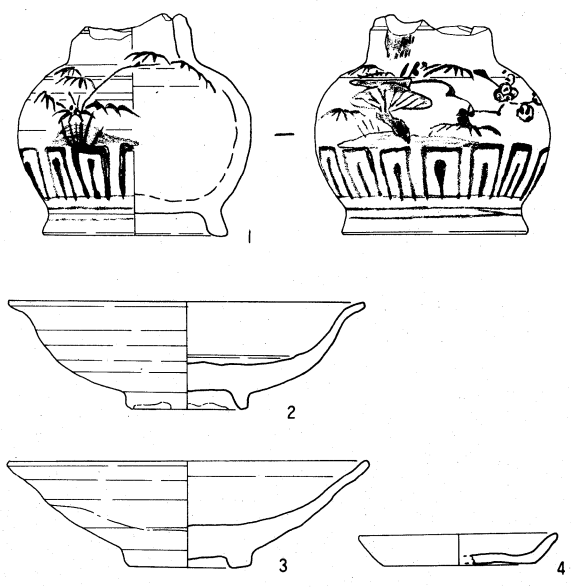


Fig.8　中世・近世遺物実測図（1/3）

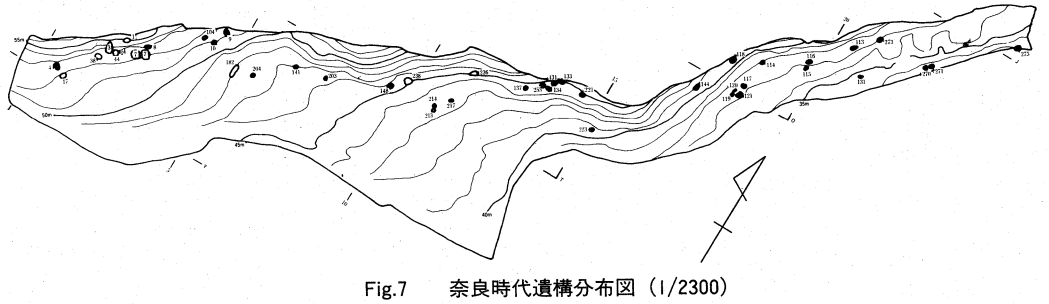


Fig.7　奈良時代遺構分布図（1/2300）

1　広石遺跡群C地点・広石古墳群VI群

調査の概要

本調査区は野方川の支流・名切谷川によって開析された標高33～57mの北東に延びる低丘陵の南東側に位置し、斜度16～35°の急斜面と5～10°の中位段丘上に立地している。周囲では昭和50・51年行なわれた広石古墳群Ⅰ～Ⅴ群[註1]が、昭和62年にⅤ群1号墳[註2]が、昭和63年には河川改修事業に伴なってⅧ群1号墳と広石遺跡群E地点[註3]が調査されている。

本調査区は団地内の集合排水路と公園建設予定地に当たっており、東西330m・南北60m・調査対象面積10200m²の狭長な調査区となっている。防災の必要性から早急に着工せねばならない部分という事も有り、全体を2000m²見当の小区（1～5区・Fig.4）に分割し、調査終了次第工事に引き渡す方法を取った。

基本層位は(Fig.3)、表土下に30～200cm程黄灰色～赤褐色のシルト～砂礫の水成層が調査区全域を厚く覆っている。3区でこの層上面で砂目を持つ肥前系の端反りの皿（Fig.8－2）・胎土目で蛇ノ目カキ取りの端反りの皿（同－3）・柱穴内より染村の花瓶（同－1）・土師質の埋甕、同層下の黒灰色土より径7cm・器高1.2cmの糸切土師器皿(同－4)を検出しており、15世紀～17世紀前半間の大雨による山崩れの堆積土と考えている。この水成層下に10～20cm程の厚みで暗灰～黒灰色土の堆積層が有り、奈良時代の遺物を中心に包含している。これを包含層上層として遺物を取り上げている。奈良時代の遺構はこの上層中から下面にかけて検出される。調査はこの下面近くから下層の下位ぐらいまで重機によって除去し行なっている。この下に20～40cm程の暗灰褐色土の包含層が有り、古墳時代の遺物を中心に出土する。さらに黄灰色のシルト質土が段丘面に部分的に広がっており、縄文早期の遺物・遺構が検出されるが、層は薄く暗灰褐色土の下面では漸移層になっている部分が多く分離は困難であった。調査時は上の暗灰褐色土とともに包含層下層として遺物の取り上げを行なっている。

検出した遺構は縄文時代早期の不整形土壙45基、古墳時代前期と思われる箱式石棺1・組合せ式木棺墓らしきもの1基（SR 219)、古墳時代後期の竪穴住居址38戸・掘立柱建物21棟・土壙86基・地山整形部11・溝12条・円墳5基・甕棺墓1基・小石室墓1基、古墳時代後期～奈良時代の周壁の焼けた方形土壙（以降、焼土壙と略称）30基、奈良時代の方形石組基壇状遺構2・火葬墓1基・須恵器登窯1基・土壙7基・溝1条を検出している。

縄文時代の土壙は4・5区の緩傾斜部分に多く分布する。竪穴住居址は丘陵斜面や裾のやや高い所に分布し、ことに1・5区に多く分布し重複した掘立柱建物に多く切られている。掘立柱建物は6×3間を最大に、桁行4間以上が9棟と大規模なものが目立つ。この期では住居址・土壙内から「玄海灘式[註4]」土器に連なる製塩土器と鉄滓が検出され、漁具の検出も見られる。

（註1）「広石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集　1977年
（註2）「広石古墳群Ⅴ－1古墳」福岡県文化財調査報告書第81集　1988年
（註3）「広石遺跡群」福岡市埋蔵文化財調査報告書　第195集　1989年
（註4）　横山浩一　「玄海灘式製塩土器（上）・(中)」九州文化史研究紀要29・30　1984・1985年

(1) 広石遺跡群C地点

縄文時代の調査

遺構　縄文時代の遺構は主に4・5区の標高40～43mの平坦な中位段丘面と5区の44～47mの段丘面、3区の標高35～36mのラインに沿っての3ケ所に分布する(Fig.4)。不整形のものが多く、長径80～190cm・短径60～140cmに集中する。中にはSK258のように5.5×2.6mの長大なものも有る。内部からは早期押型文土器・条痕文土器・無文土器・黒耀石やサヌカイト製の石鏃・チップなどが少量出土する。集中する分布の有り方から落とし穴とも考えられ、石鏃は25本中19本が1区・5区に集中しており、川上から鹿などの獲物を追い、落とし穴群へ追い込んだのかもしれない。総数では柏原遺跡群に遠く及ばないが、市域では2番目の検出数である。

SK142 (Fig.9) はT11グリッドに位置し、長径392cm短径168cm深さ108cmを測かる。不整形で

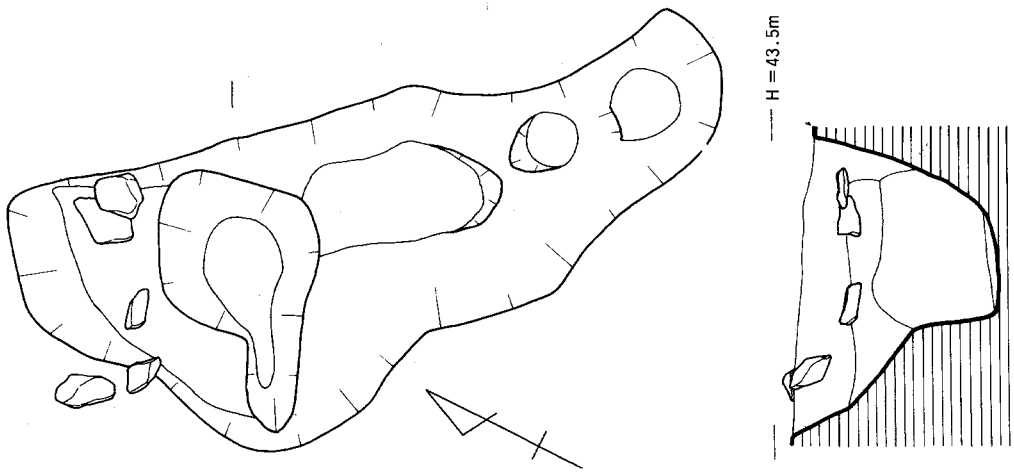


Fig.9　SK142 実測図 (1/40)

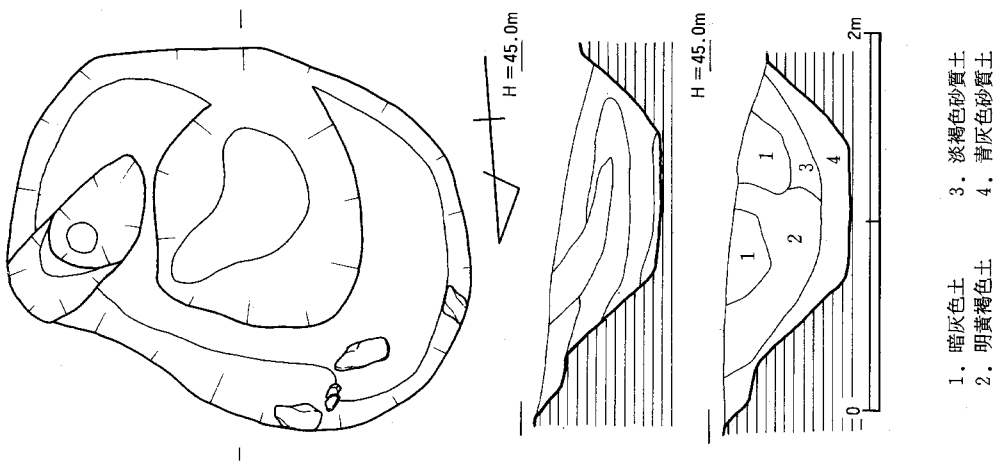


Fig.10　SK147 実測図 (1/40)

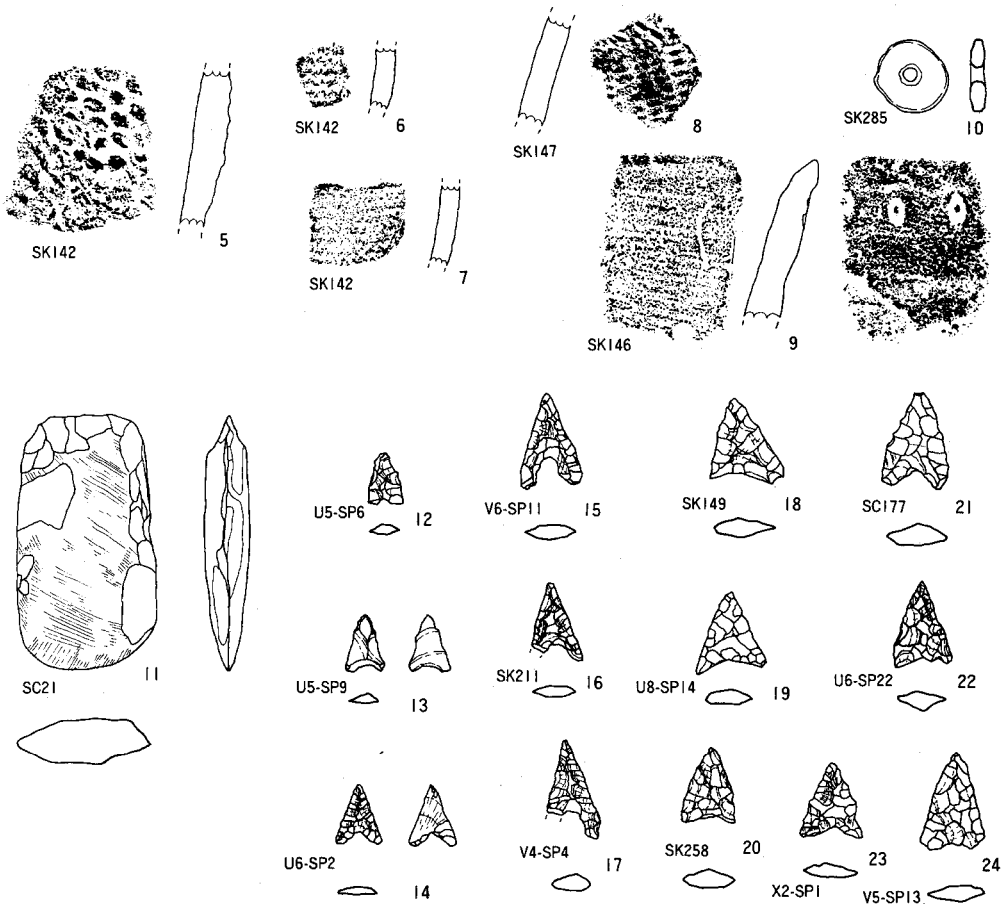


Fig.11　縄文時代遺物実測図（1/3, 1/2）

床面も整わない。覆土は暗黄灰色の砂質土で、遺物は上部に散発的に見受けられる。SK147(Fig. 10) はW8グリッドに位置し、長径250cm・短径188cm・深さ65cmを測かる。楕円形の形状を呈するが、これも床面は整わない。大部分は平・断面とも不整形である。

遺物 (Fig.11)　5・6・7はSK142出土の深鉢土器である。5は外面に粒の大きな楕円押型文を斜位に施し内面には指頭圧痕が残る。6・7は外面に小さな山形押型文を横位に施す。内面は同様に指頭圧が見られる。8はSK147出土の小粒の楕円押型文で左上がりの斜位に施文後、さらに横位に施文されている。9はSK146から出土。若干開く口縁で内外面に横位の条痕文を施し、外面口縁下に径1.3cm程の縦長の刺突文が施行される。瀬戸内系の影響であろう。10は緑泥片岩製の円形石製品で径2.9cm厚さ6㎜を測かる。周縁は平坦に面取りがなされる。11は蛇文岩製の磨製石斧で、全長6.8cm刃幅3.1cm刃厚1.2cmを測かる。石鏃は1.4～1.5cmの小型品と1.5～1.7cmの鍬型・2.0～2.6cmの大ぶりのものの3タイプが有る。石材は13が姫島産黒耀石、12がチャート、19がサヌカイト、21・24が貢岩製、他は黒耀石製である。

弥生時代の調査　該期の確かな遺構はなく、中期中頃と後期後半の甕が2片と他に今山産玄武岩製の太形蛤刃石斧の使用痕を有する半折品9点を検出しており、建築材や木器の原材の伐截が行なわれていたと考えられる。

古墳時代の調査

竪穴住居址（SC）　方形のプランを持ち内部に柱穴もしくは炉・竈を持つものを竪穴住居址として取り扱かった。標高34m～52mの急斜面から中位段丘面まで全面にわたって分布しているが、比較的に高い位置に分布している。1区・5区・4区・3区でまとまる傾向がある。規模は長軸で2.9～6.4m短軸で2.1～4.5mの長方形のプランを呈し、長軸で3.8～5.4m短軸で3.1～4.3mの中型のグループと長軸2.9～3.3m短軸2.1～2.6mの小型のグループに分割できる。大部分は長軸が丘陵尾根と並行する。

時期はⅢB期（小田編年）で16戸、Ⅳ～Ⅴ期で19戸、掘立柱建物の直前もしくは並行するⅥ期のもの3戸に分けられる。

柱・竈の有無でタイプ分けしてみると、Aタイプ－4本柱で竈を有するもの、Bタイプ－4本柱のみのもの、A′・B′タイプ－上記で柱が1～数本の変則柱のもの、Cタイプ－竈のみ有するものに分類すると、ⅢB期でAタイプ（SC62・90・153・280・257・52）は6戸、A′タイプ（SC48・231・276・278・77・139）6戸、Bタイプ（255）1戸、Cタイプ（277・177）2戸と定形化されたものが37.5%を占める。Ⅳ～Ⅴ期でAタイプ（SC34・259・159・140）4戸、A′

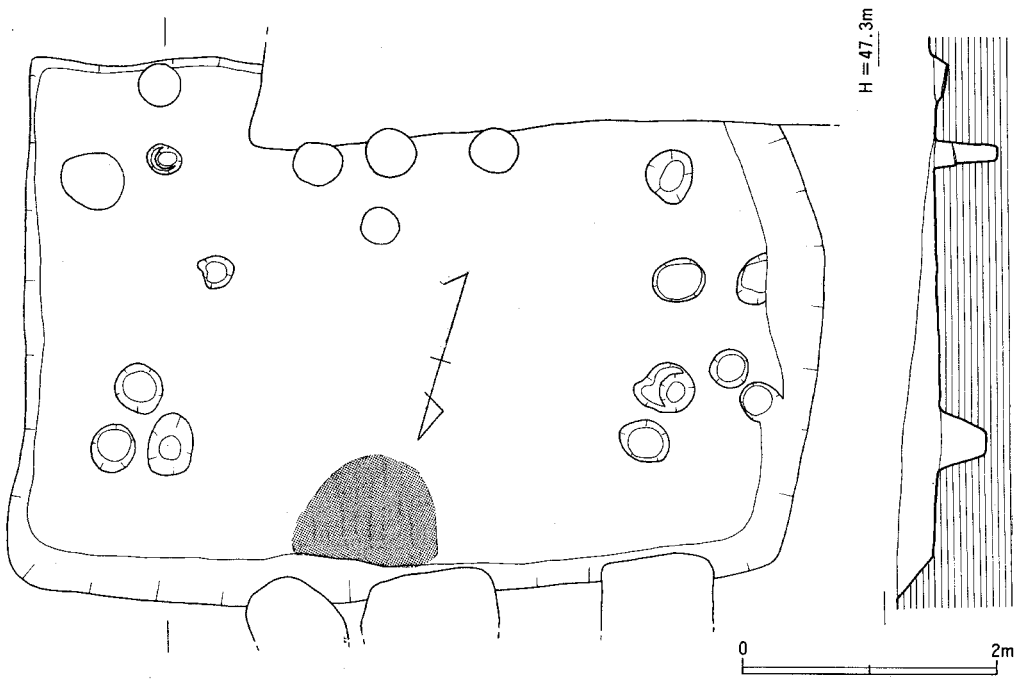


Fig.12　SC257 実測図（1/60）

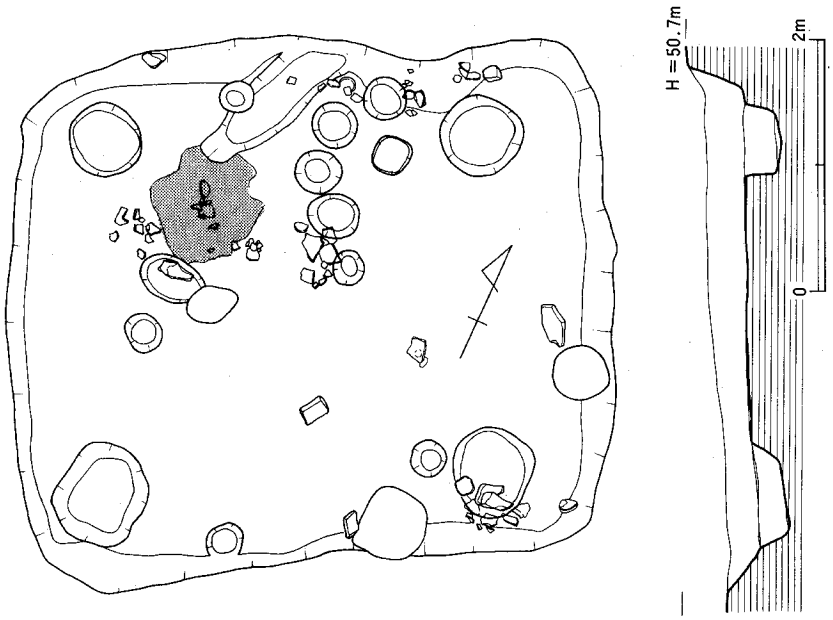


Fig.13　SC52 実測図（1/60）

タイプ　（SC28・29・168・91）4戸、Bタイプ（SC166・138・190・171・172）5戸、B′タイプ（SC175）、Cタイプ（SC209・92・21・215・152）5戸とCタイプが増える傾向に有り、VI期はA′タイプ（SC46）1戸、Bタイプ（SC18）1戸、Cタイプ（SC31）1戸と、定形化したものはなくなっている。以上のように時期を下るに従って変則・簡略化が見受けられる。

またこの時期で特徴的なのは、鉄滓と製塩土器を検出する住居、土壙が多い事で、鉄滓は

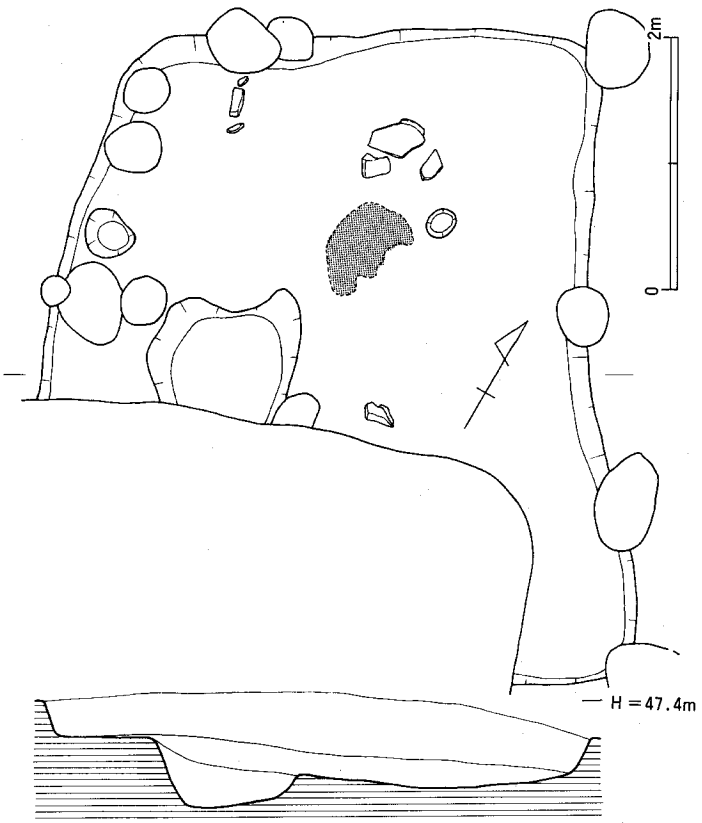


Fig.14　SC91 実測図（1/60）

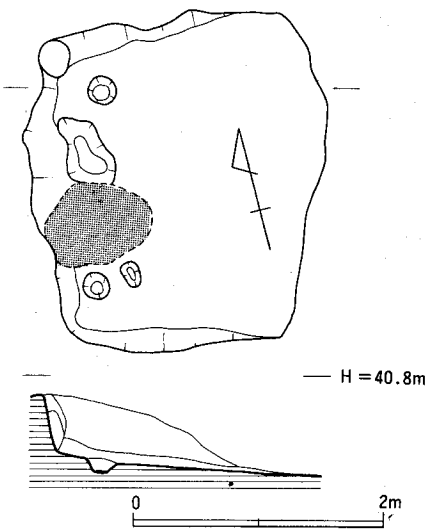


Fig.15　SC168 実測図（1/60）

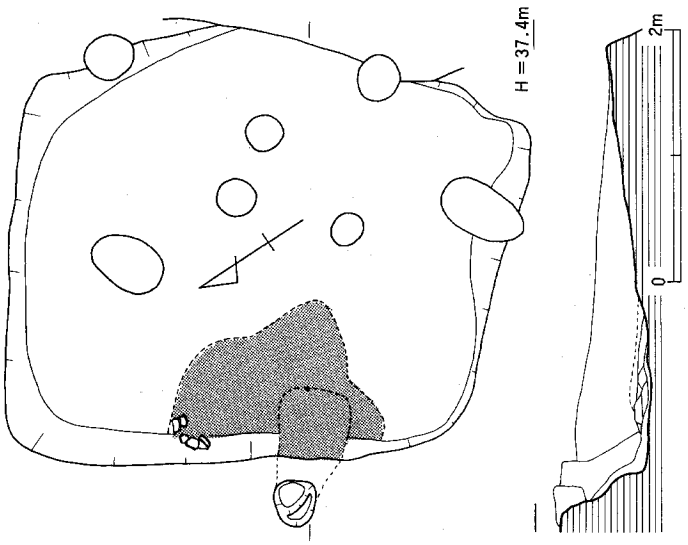


Fig.16　SC152 実測図（1/60）

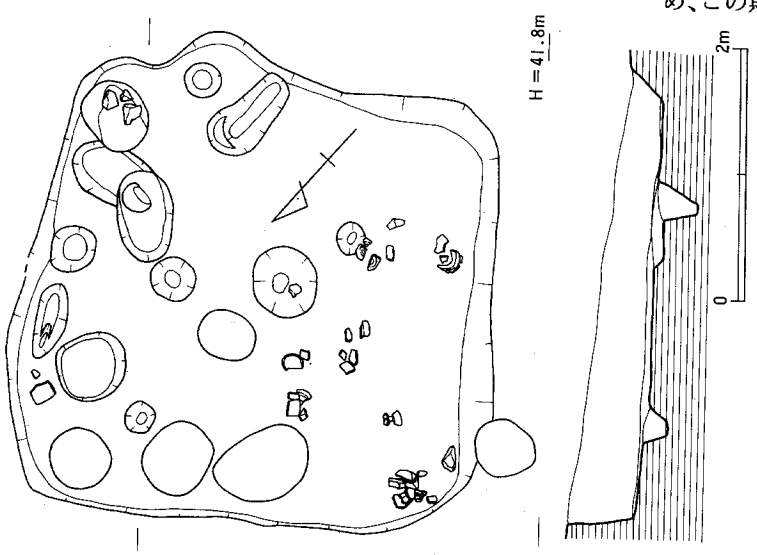


Fig.17　SC139 実測図（1/60）

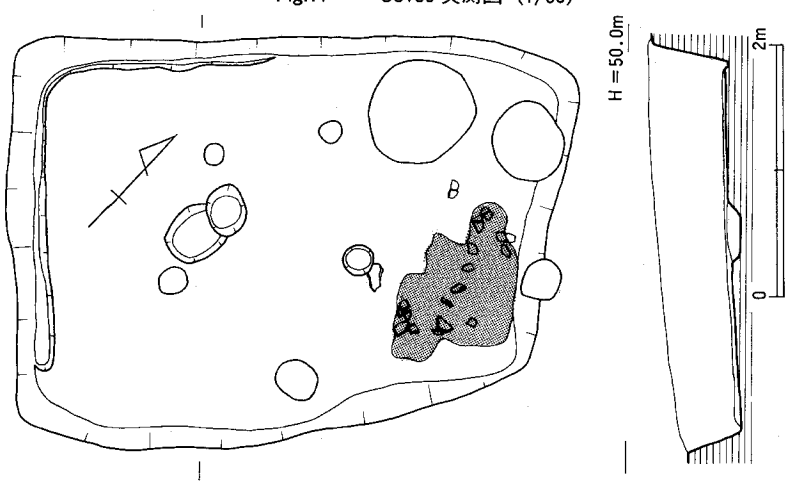


Fig.18　SC77 実測図（1/60）

ⅢB期でSC153・255・277・278・77・177の6戸で1046g、同期の住居の37.5%、全体の15.8%を占める。重量では31.7%を占める。Ⅳ～Ⅴ期でSC138・29・92・21・190・91の6戸で299g、同期の住居の31.6%、全体の15.8%、重量では8.9%。Ⅵ期ではSC18・31・46の全てで検出され、全体の6.3%ながら重量は2018gで全体の60%を占め、この期でピークに達している。

製塩土器と思われるものはⅢB期でSC208・48・231・139・257の5戸、Ⅳ～Ⅴ期でSC166・21・28・159・91の5戸、Ⅵ期でSC46の1戸で検出されている。

SC257 (Fig.12) は6.36×4.5mを測かり、Aタイプ、柱間は3.8×2.3mを測かる。ⅢB期。SC52 (Fig.13) は4.74×4.18mでAタイプ、ⅢB期。柱間は3.1×2.6mを測かる。SC91 (Fig.14) は5.05×3.95mを測かり、A′タイプ。3本柱である。竈内の支

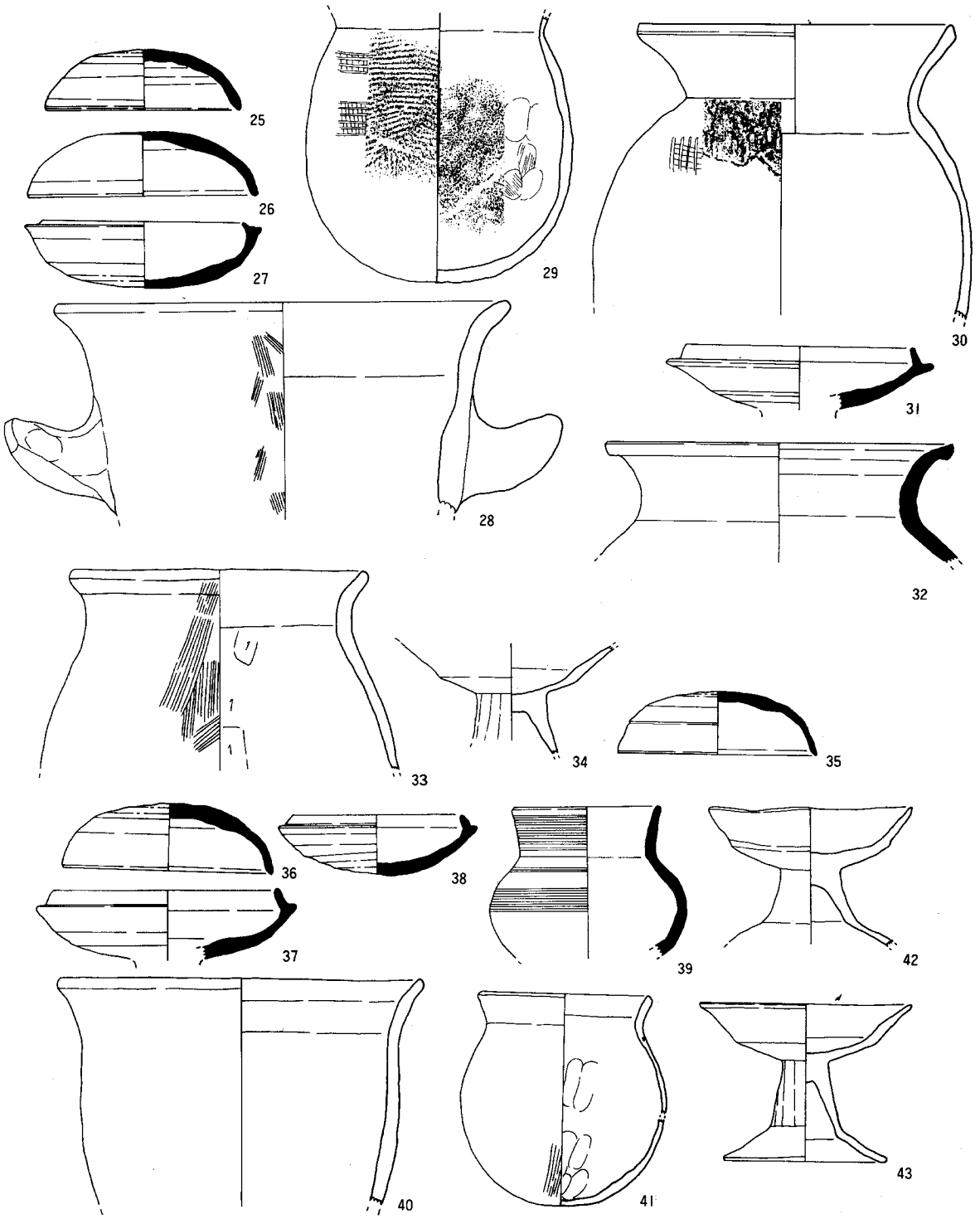


Fig.19　　SC 出土遺物実測図（1/14）

柱に長方形自然礫を用いているが、この他に高坏を倒置して用いる住居も多い。SC168 (Fig.15) は最小のタイプで3区急斜面上に有る。2.8m×2.4mを測り柱間は1.5mⅣ期。SC152 (Fig.16) はCタイプでトンネル状の煙出し部が残っている。3.8×3.42mを測かるⅣ期。SC139 はⅢB期。B′タイプ。4.02×3.8mを測かる。SC77 (Fig.18) はA′タイプ2本柱で一部に壁溝が残る。4.51×3.1mを測かり、柱間は1.3m、ⅢB期。Fig.19 はこれら住居址内の出土遺物である。29は製塩土器と思われるもので、ⅢB期 SC257 からの出土である。胴径13.4cm測かり、外面に木目直交横位の平行叩きを施し、内面には若干太目の平行弧線叩が残る。色調は製塩土器特有の桃褐色～桃色を呈し、外面に煤が付着する。口縁部を欠くが、第2地点 Fig.19の4と同様の短く外反し、口縁端部が凹線状を呈するものと思われる。30は口径20.2cmで大きく外反する口縁部端を調整で凹線気味に仕上げる。胴部外面には木目直口の縦位の叩きを施す。内面は摩滅が著しく不明、外面は桃黄色を呈し製塩の可能性も考えれるが通常の煮沸に使用した公算が高い。ⅢB期。

土壙 (SK)　土壙は住居址の可能性も考えられる方形竪穴土壙（Aタイプ、ⅢB期191・156・15、Ⅳ～Ⅴ期－95、163・256・82・87、Ⅵ期－24）廃棄物処理用の不整形土壙（Bタイプ、ⅢB期－SK11・58・78・93・49・178、Ⅳ～Ⅴ期－16・20・39・83・85・94・103・125・124・151・154・84・162・161・170・169・160・183・186・193・196・199・205・207・210・212・223・225・242・246・249・252・261・264・127・253・235・19・37・32・254、Ⅵ期－122・185・186・226・101・102・65・66・56・57・42・43・41・36・35・22・12・4・40・50・59・263・23・266）、炉・竈を有する長形土壙（Cタイプ、ⅢB期49・192、Ⅳ～Ⅴ期－167・106・23）地山整形部（Dタイプ、ⅢB期－63・157、Ⅳ～Ⅴ期－54・25・37、Ⅵ期－263）と焼土壙（Eタイプ、ⅢB～Ⅳ期・SK224）の4タイプが考えられる。竪穴住居同様、鉄滓と製塩土器の検出が目立ち、鉄滓はⅢB期で2基63g、Ⅳ～Ⅴ期で5基205g、Ⅵ期で14基1968gを検出、竪穴住居その他遺構分全ての総計で、ⅢB期9遺構1109gで17%、Ⅳ～Ⅴ期で12遺構525gで8%、Ⅵ期で22遺構4364gで66.9%、Ⅶ期で8遺構528gで8.1%でⅥ期にピークを向かえる。製塩土器はⅢB期で2基（63・15）、Ⅳ～Ⅴ期で5基

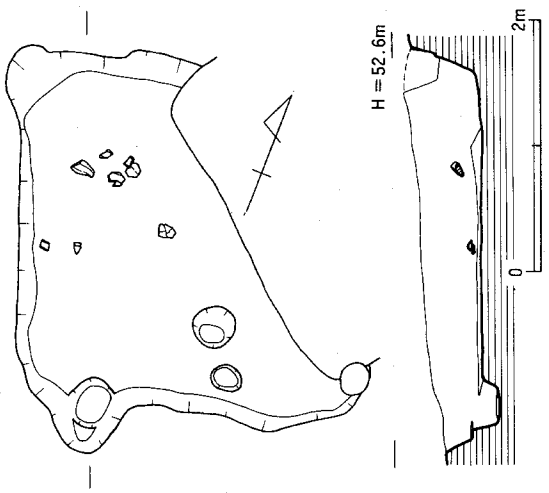


Fig.20　SK15 実測図（1/60）

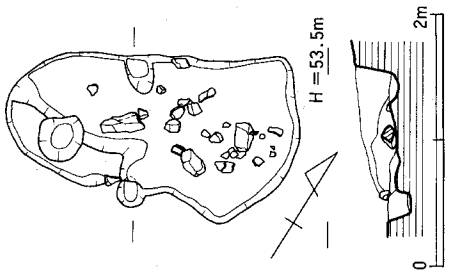


Fig.21　SK19 実測図（1/60）

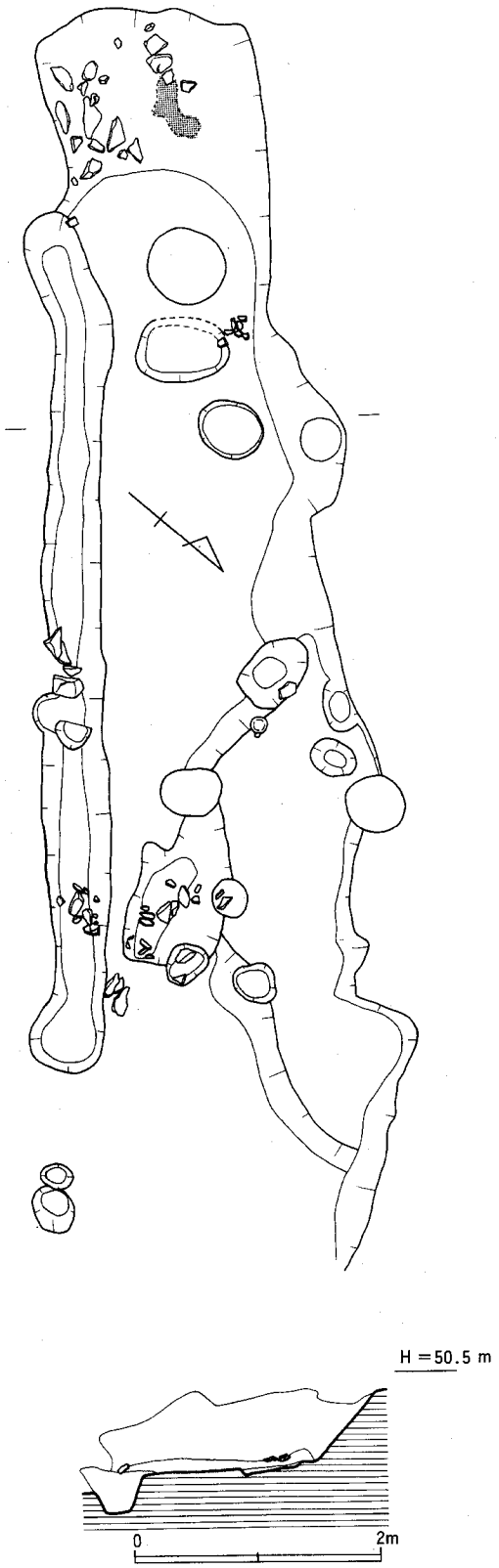


Fig.22　SK49 実測図（1/60）

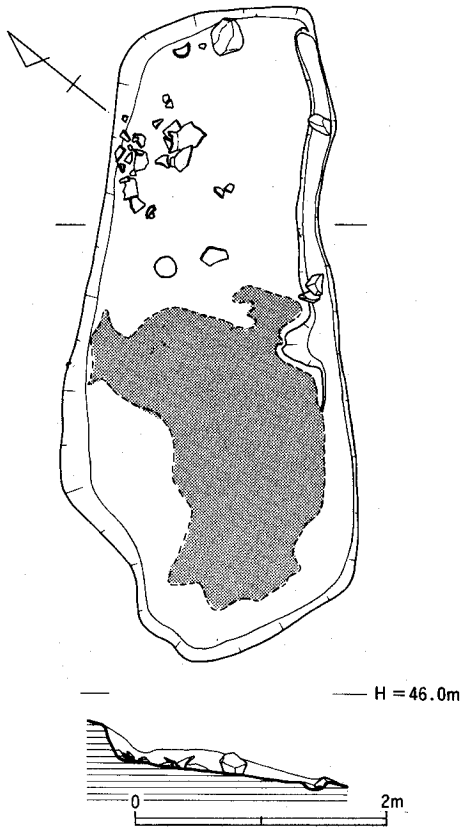


Fig.23　SK192 実測図（1/60）

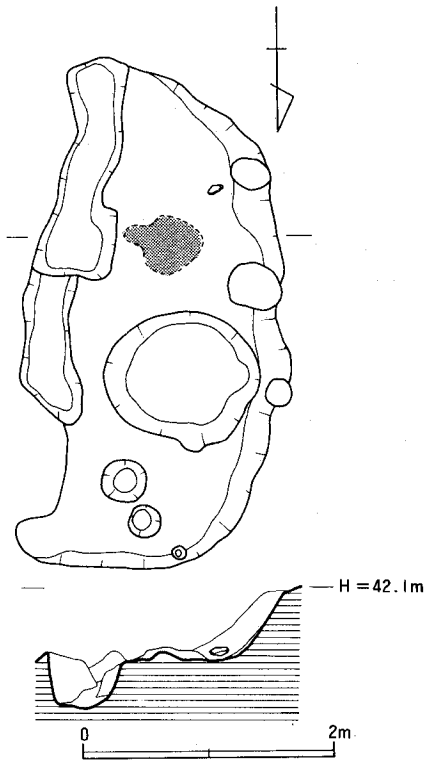


Fig.24　SK167 実測図（1/60）

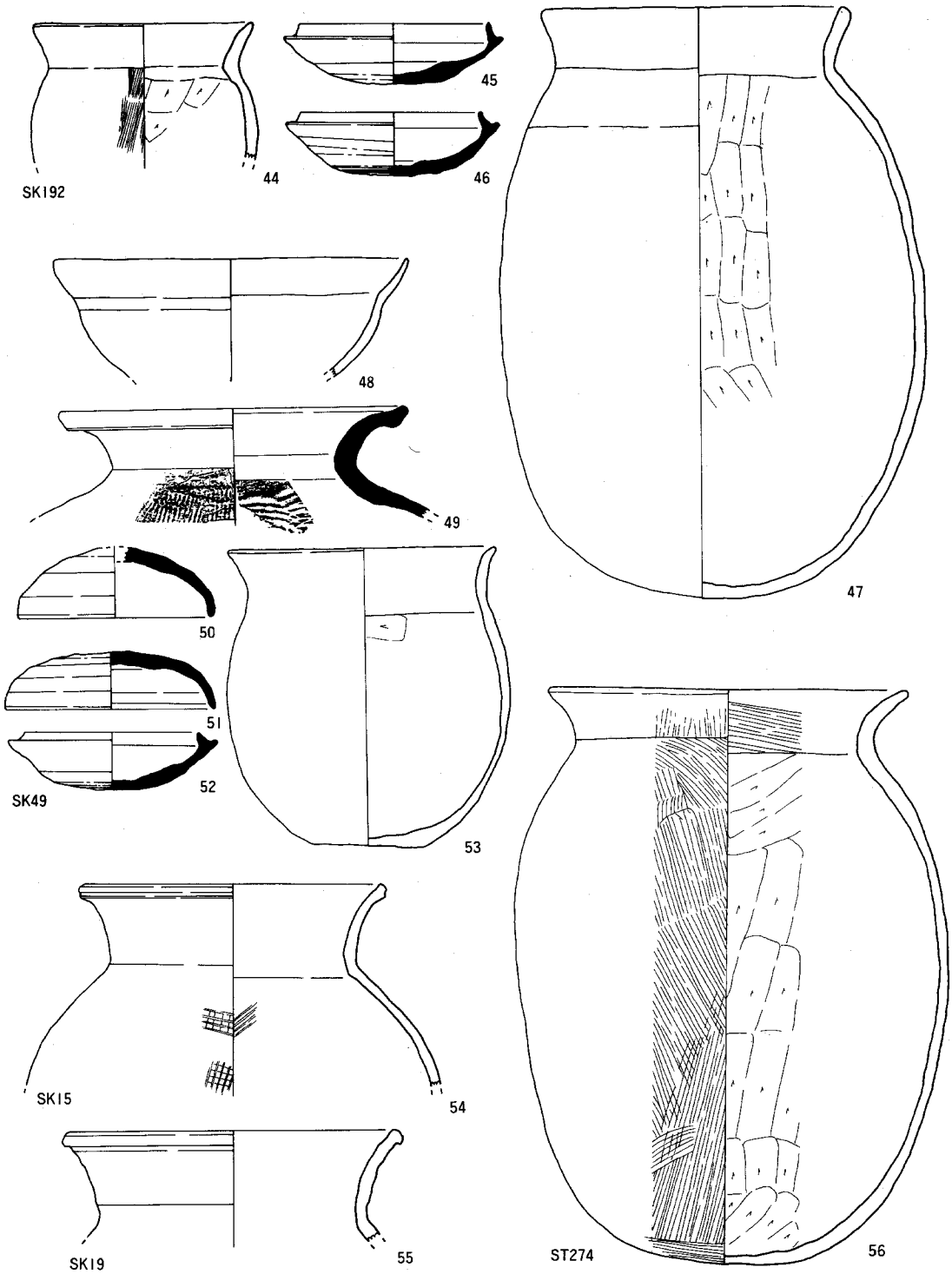


Fig.25　　SK 出土遺物実測図（1/4）

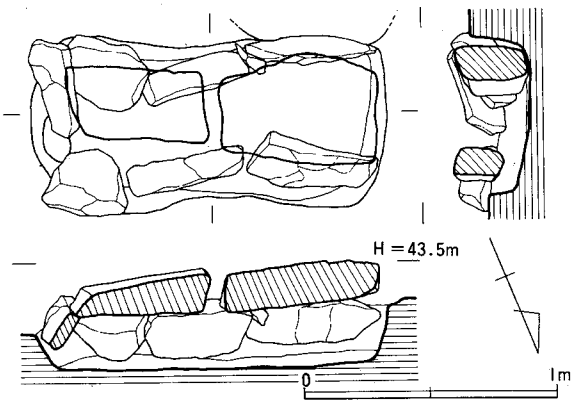


Fig.26　SQ218 実測図（1/30）

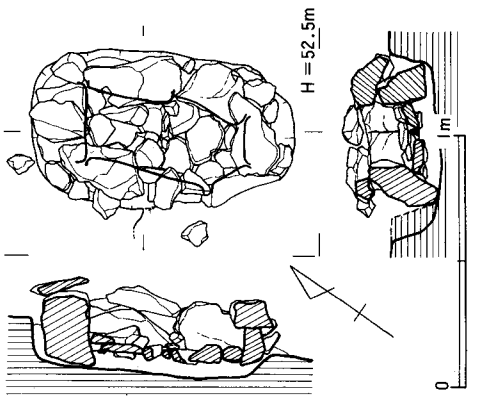


Fig.27　SQ6 実測図（1/30）

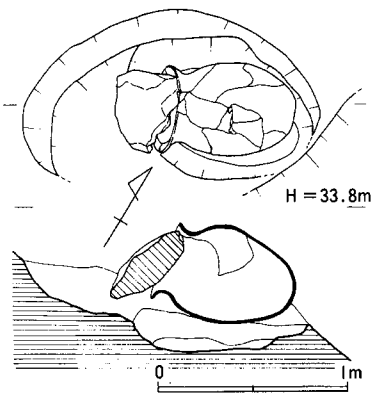


Fig.28　ST274 実測図（1/20）

（20・19・37・32・254）、VI期で3基（22・18・24）確認している。小片まで含めるとかなりの量にのぼる。SK15 (Fig.20) はAタイプでIIIB期、2.8×2.7mと測かる。製塩土器を検出しており、竪穴住居址の可能性も考えられる。小石室墓SQ6に切られる。SK19 (Fig.21) はBタイプでIV期。1.2×0.65mを測かる。内部より製塩土器を検出している。SK49 (Fig.22)・192（Fig.23）・167（Fig.24）はCタイプで、いずれも丘陵尾根線に沿って長径の長軸を取り、斜面下側に壁溝を切り、内部に焼土部分を有する事を特徴とする。SK49は10.3m×2.7mを測かり、南西隅に焼土が広がる。SK192は2.6×1.2mを測かり、同じく南西隅に焼土が広がる。SK167は3区の急斜面上に位置し、2.0×1.1mを測かる。焼土は中央部分に位置する。ともに出土遺物は多く、生活関連の遺構と考える。ここでは鉄滓・製塩土器とも検出されない。Fig.25は土壙からの出土遺物である。44～42はSK192から出土。45・46は須恵器坏で45は口径11.6cm46は口径10.5cm。44・47は土師器甕で44は口径13.2cm、頸部以下に縦方向のハケ調整、内面はヘラケズリが施される。47は口径18.8cm器高36.1cmを測かり、調整は44と同様である。ともに器壁の粗れが著しい。48～53はSK49出土。50～52は須恵器蓋坏で50は口径12cm・51は12.8cm・52は10.6cmを測かる。48は土師器鉢で口径21.6cm。桃褐色を呈し、内面は5㎜前後の円形に器壁が多くはじけとんでおり、煮沸に供された様である。高坏とともに日常の厨事に使用される特色が有る。54・55は製塩土器の可能性が有り、須恵器甕に似た口頸部の造作と木目直行の平行叩き、内面の平行弧線の当て具痕が特徴である。

箱式石棺（SQ218－Fig.26）　T11グリットで検出され2枚の板石を縦位に用いて蓋としている。40×20cm程の板石を小口に、これをはさむ様に40×20cm程の板石3枚で側壁をなす。

小石室墓（SQ6－Fig.27）　X0グリッドに所在し、30×20cm程の方柱状の花崗岩で四隅を接

して立て四壁を構築し、これに厚さ10cm程の板石を小口に積み、10cm程の角礫で床を敷く。

甕棺墓（ST274－Fig.28, Fig.25－56）　2号墳の裾に位置し、80×50cmの2段の浅い掘方に土師器甕を横位にすえ、20cm四方程の花崗岩の板石で蓋をしている。主体は口径22cm、器高35.2cmの土師器甕で、外面と口縁内面は刷毛調整、内部は右上がりのヘラケズリが施される。

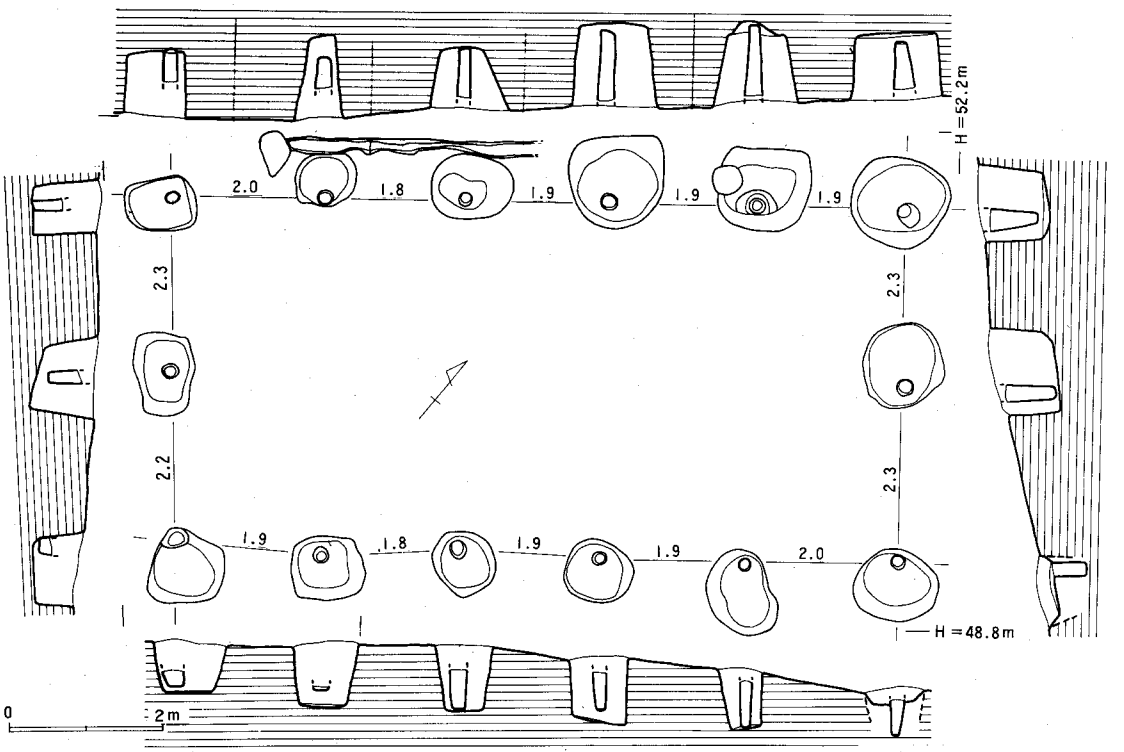


Fig.29　SB73 実測図（1/100）

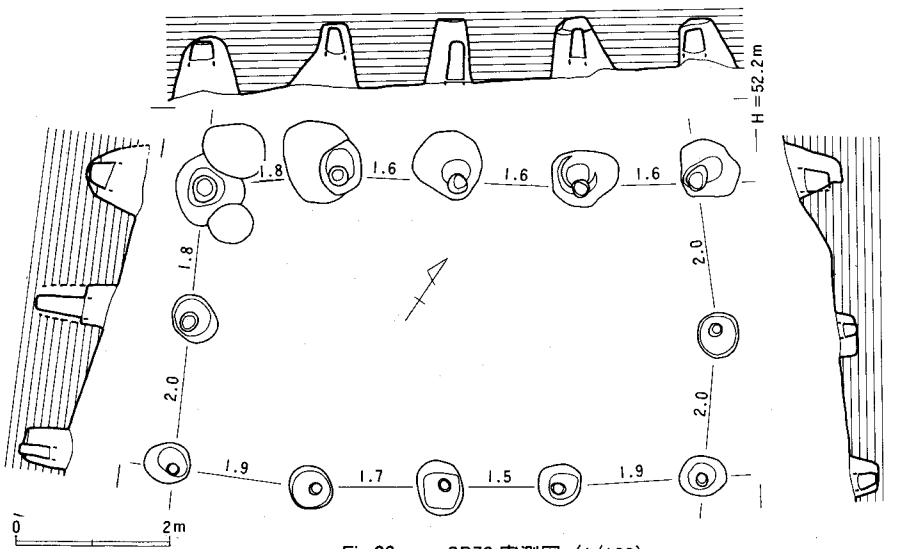


Fig.30　SB72 実測図（1/100）

掘立柱建物（SB）　掘立柱建物は22棟検出している。資料の検討が不充分であるためさらに数棟建つ可能

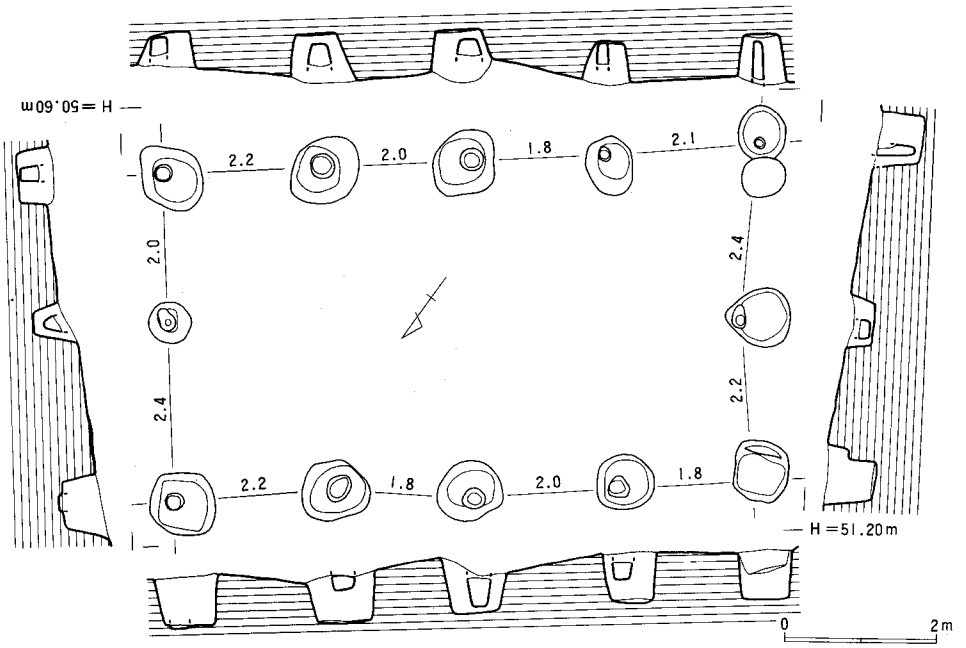


Fig.31　SB70 実測図（1/100）

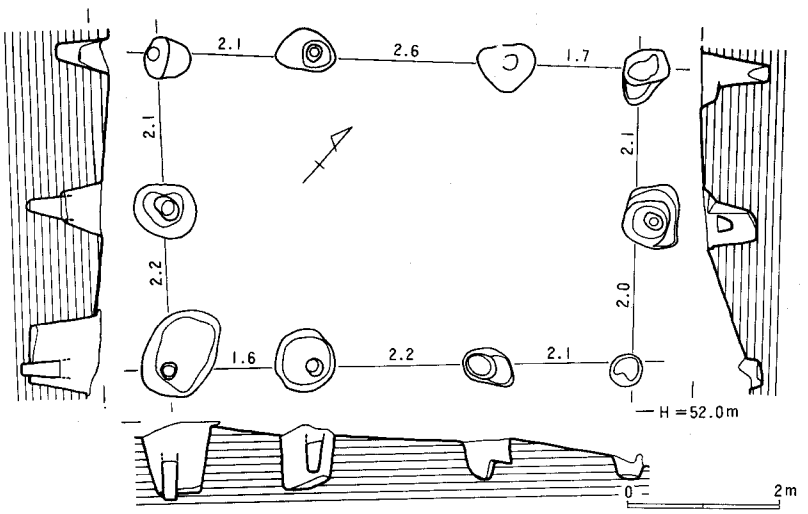


Fig.32　SB71 実測図（1/100）

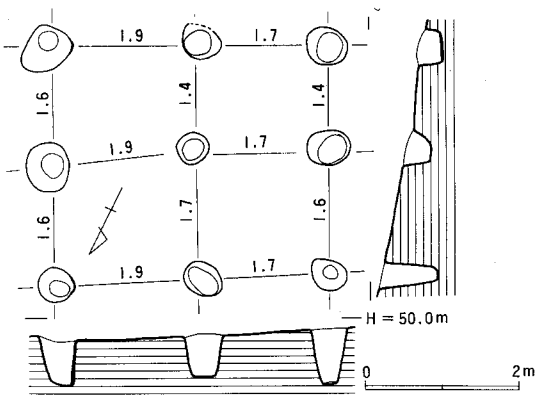


Fig.33　SB74 実測図（1/100）

性は高いが、その分布は南東の1区・5区に集中している。大型の側柱の建物が多く、桁行4間以上のものが22棟中9棟も占める。その方向性と柱穴の切り合いから大きく5つのグループに分けられる様である。1区の2×5間で主軸をN－52°－Eにとる SB73を中心とした SB71•70•100と5区の3×6間で主軸

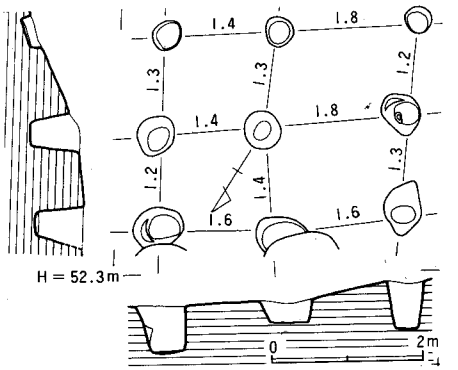


Fig.34　SB110 実測図（1/100）

をN－68°－Eにとる SB200 を中心とした SB72・98、その中間をとる 2 × 4 間で N－59°－E に主軸をとる SB72 を中心として 69・74・75・76・81・99、5 区で 3 × 5 間で主軸を N－78°－E にとる SB206 を中心とする SB201・202、J12 グリッドにあり軸を N－35°－E にとる SB268 である。L20 グリッドの SB172 は 3 区の竪穴住居に伴う可能性が高い。時期の決め手は、1 区でVI

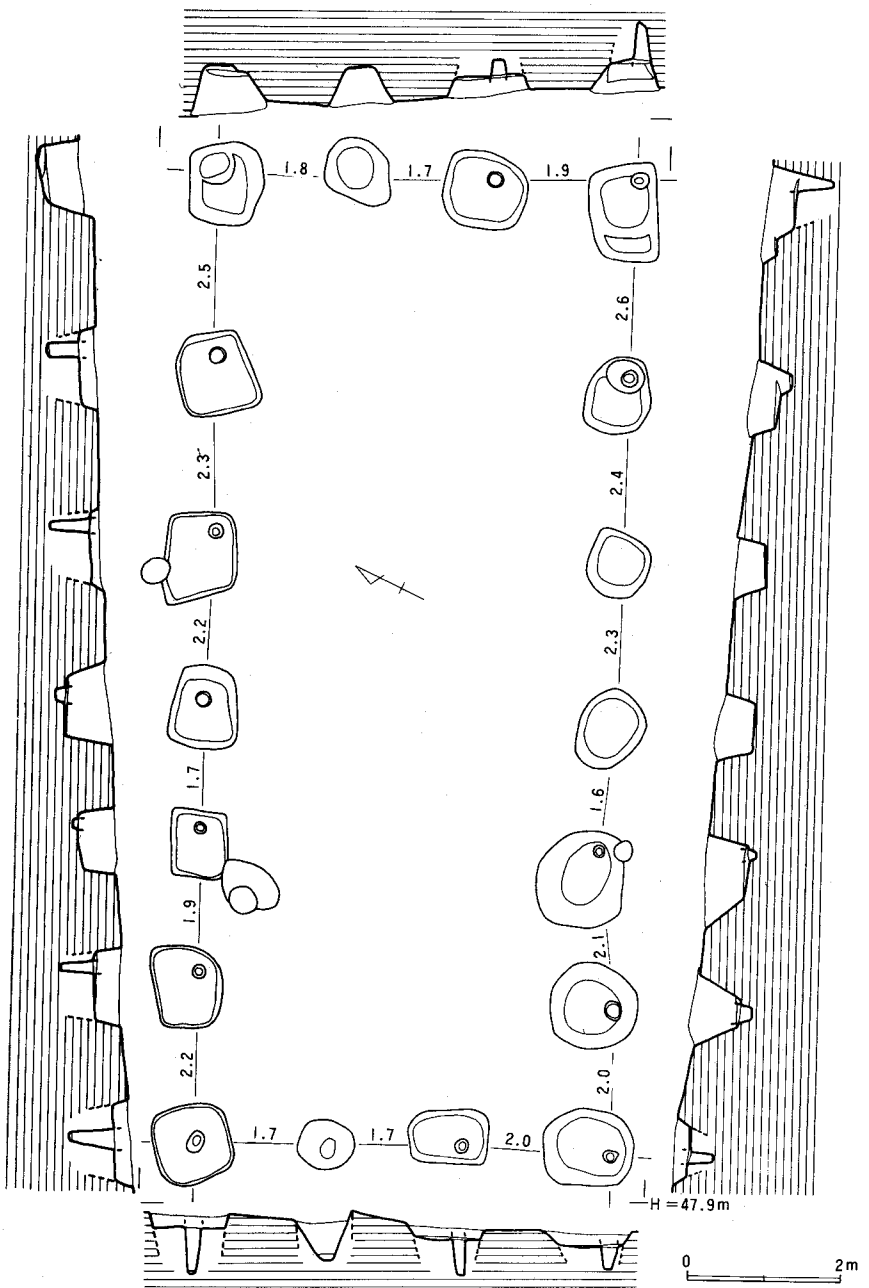


Fig.35　　SB200 実測図（1/100）

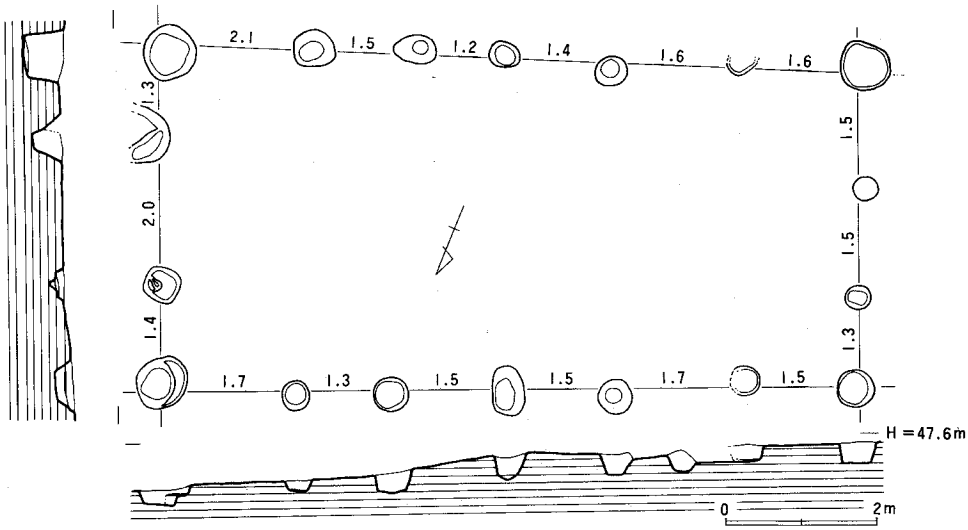


Fig.36　　SB265 実測図（1/100）

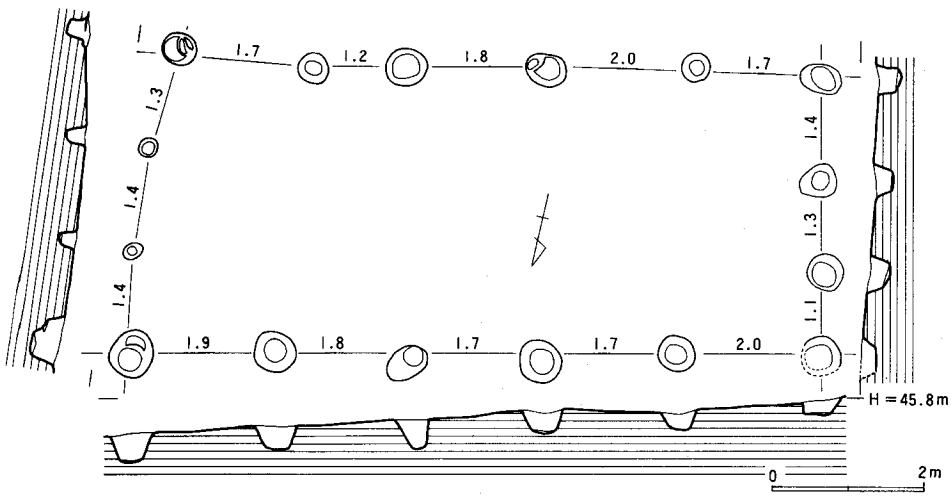


Fig.37　　SB206 実測図（1/100）

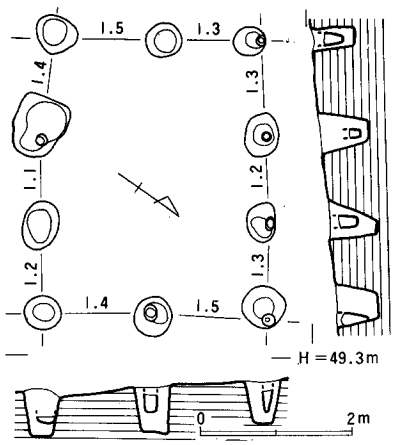


Fig.38　　SB81 実測図（1/100）

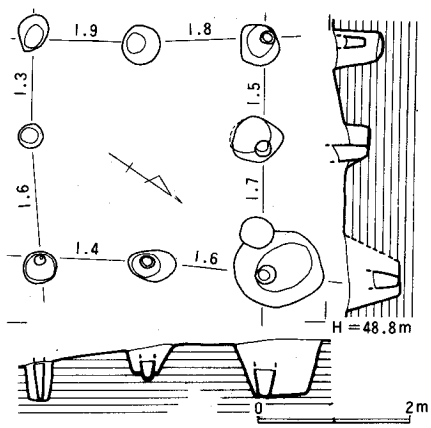


Fig.39　　SB99 実測図（1/100）

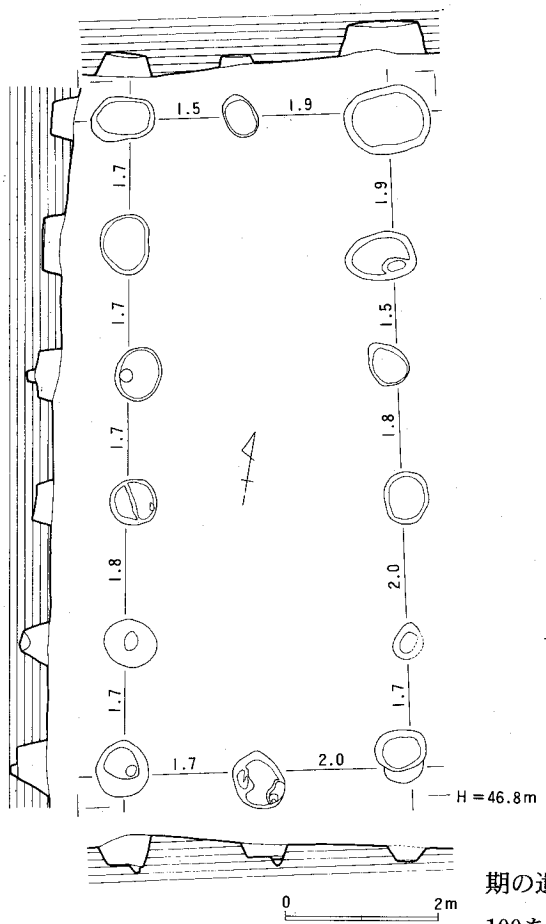


Fig.40　SB201 実測図（1/100）

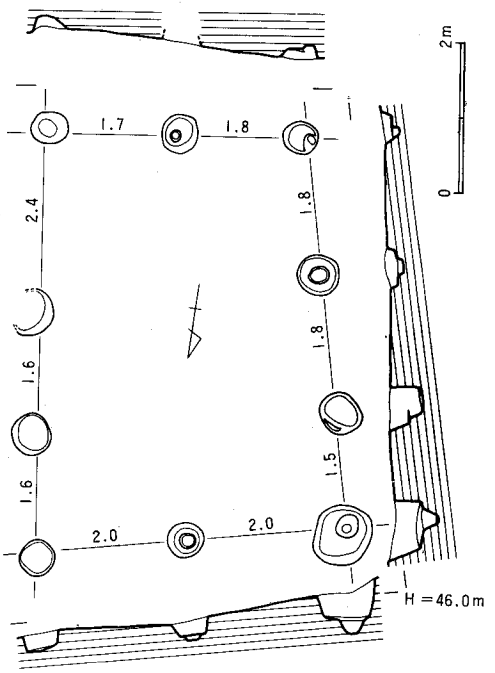


Fig.41　SB202 実測図（1/100）

期の遺物を包含する客土上にSB69・100・71～73・100を設置する事、奈良時代の遺物を含む包含層上層中にもうけられたSX7と奈良時代の遺物を検出したSK5にSB100が切られる事、またIIIB～IVの遺物を包含する竪穴住居址SC51・256・177など多数の竪穴住居を柱穴が切り込んでいる事などからVI期の7世紀後半～8世紀初頭にかけ存在したと考えられる。またSB72を71が切っており、1区に集中する同期のSC46・18・31を切っている事から、まず、5区のSB200を中心とした建物群が構築され、同期には少数だが1区に竪穴住居が併存し、後1区斜面に客土がなされ（Fig.3－⑤層）敷地を造成する段になって竪穴住居は放棄され、SB72など建物群が広がったものと考えられる。さらにここではSB71や73など増・改築がなされている。偶然かどうか判断が難しいが、最初に建てられたと思われるSB200や265の方位は早良平野に律令期になされた条理の西へ10°偏ずる事に符号している。(註) 初期の政治的な規定が時代が下がるに従って人為的な規定から自然要件の規制に対応する様に変化していった事のあらわれかも知れない。豪族の居館であろうと思われるが、これらを支えた経済基盤は鉄もしくは鉄器生産と考えられる。竪穴住居・土壙の頃でも述べたが、古墳時代後

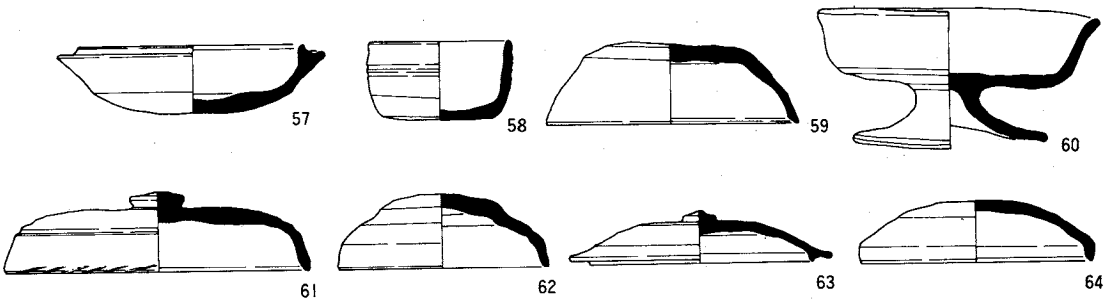


Fig.42　客土部出土遺物実測図(1/4)

期から奈良時代までの全遺構から検出した鉄滓総量6577gのうち4364g、何と7割近くまでを、鉄滓を検出した遺構総数57のうち22基までを該期が占めており、集中の度合いが著しい。製塩土器の検出は4遺構と前段の15基と比べると格段の差が有る。

SB73 (Fig.29) は1区客土部分の中心を成す建物で2間×5間の大型のものである。梁間4.8m・桁行9.3mを測かる。桁行は丘陵線に沿っており N－52°－E の方位をとる。柱穴掘方も大きく、方形に近い0.8～1.2m深さ0.8～1.0m。柱穴は径20～30cm、深さ1m前後有る。総柱のSB110、側柱のSB108・109を切っている。柱間内に焼土壙(SK104)が有り前後関係が明らかである。SB72 (Fig.30) はSB73の南西側に有り、SB71に切られている。2間×4間の規模で、梁間4.1m、桁行6.9mを測かる。方位はSB200に近く N－59°－E にとる。柱穴掘方は27～40cmの円形で深さ15～40cm程で、底面は斜面と対応している。柱穴は8～15cmで深さ10～45cmを測かり、床面もほぼ平行している。SB70 (Fig.31) はSB72の南側に位置し、竪穴住居址2戸を切っている。2間×4間の規模で梁間4.4m・桁行7.8mを測かる。方位は N－53°－E にとる。掘方は方形に近く60～80cm、深さ30～70cmを測かる。柱穴は径14～18cm深さ35～50cmを測かる。SB71 (Fig.32) はSB72を切って建てられており、方位をSB73に近い N－56°－E にとる。規模は2間×3間、梁間3.9m、桁行6.9mを測かる。掘方はばらつきが大きく、40～120cm・深さ30～90cm・柱穴は径18～20cm・深さ30～100cmを測かる。SB74 (Fig.33) は2間×2間の総柱の建物で、X3グリッドに有る。方位は N－61°－E にとる。掘方は小さく35～60cmを測かる。深さは33～70cmとほぼ水平になっている。梁間3.15m、桁行3.7mを測かる。SB110 (Fig.34) は2間×2間の総柱の建物で梁間3.25m、桁行4.6mを測かる。方位は N－54°－E にとり、SB73に近い。SB73建造前の建物で、SB109にも切られている。柱穴掘方は小さく、径40～60cm、深さ15～60cmを測るが、斜面にかかわらず、底面はほぼ水平である。SB200 (Fig.35) は5区の中心を成す建物で1区のものに先行すると考えられる。規模は3間×6間で最大であり、梁間5.25m、桁行間12.3mを測かる。掘方はほとんどが隅丸方形を呈しており、85～130cm、深さ40～60cmを測かる。柱穴は18～20cmを測かり深さは80cm前後、方位は N－68°－E をとる。SB265 (Fig.36) はSB200

の北側1.5m程の所に東側の梁をこれにそろえ、並んでいる。方位はN－69°－Eにとる。規模は3×6間で梁間4.3m、桁行9.2mを測かる。柱数はSB200と同数であるが、柱間が狭まく、120～140cm程しかない。掘方も小さく径30～75cm程の円形で深さ10～50cm程である。SB206 (Fig.37) はSB200の南東側、段丘の落ち際に位置する東西棟で、規模は3間×5間。梁間4.15m、桁行9.15mでSB265に極めて近い。方位はN－79°－Eにとり、早良平野の条理方向と一致し、SB201・203もこれに極めて近い。しかし5区の東端、SB202のN－82°－Eから西側のSB70のN－53°－Eと徐々に西偏する傾向に有り、B8グリッドがあたりを中心として大きく円湾する地形の稜線に沿っている可能性も高い。掘方もSB265同様小さく30～60cm程の円形で深さは20～40cm程である。SB202とともに南北棟である。SB81 (Fig.38) は総柱のSB76の北に位置し、2間×3間の規模で小さなものである。梁間3.0m×桁行3.6m、柱間も狭く1.15×1.35mである。掘方は40～90cmの円形で深さ55～65cmを測かる。柱穴も小さく径10～12cmを測かる。方位はN－57°－Eにとる。SB99 (Fig.39) も同様に小さく2間×2間、梁間3.05m、桁行3.1m

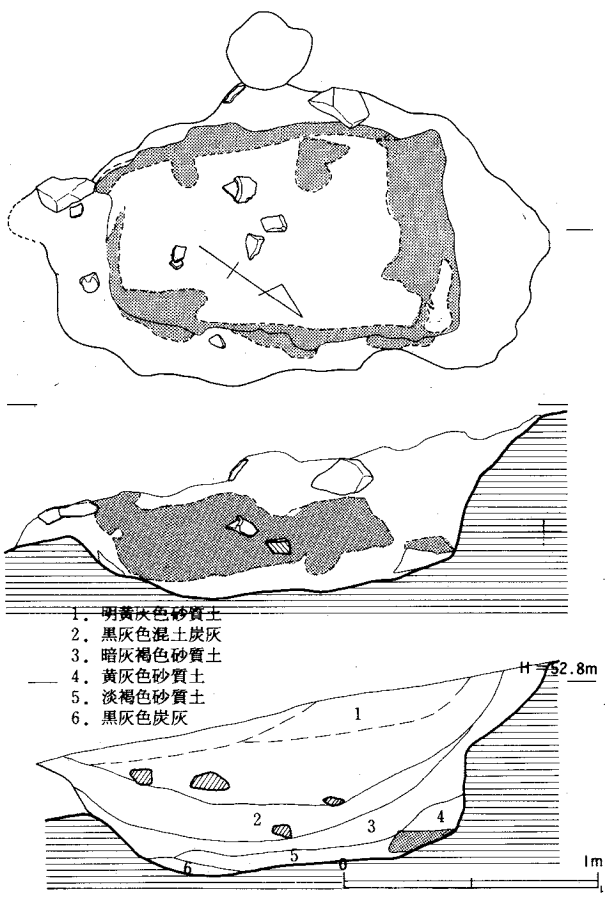


Fig.43　SK4 実測図（1/30）

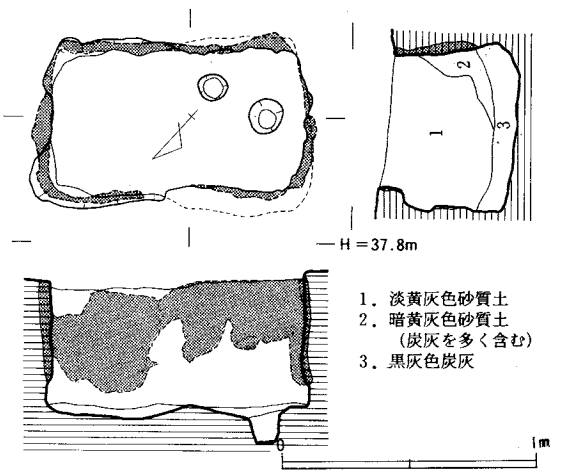


Fig.44　SK113 実測図（1/30）

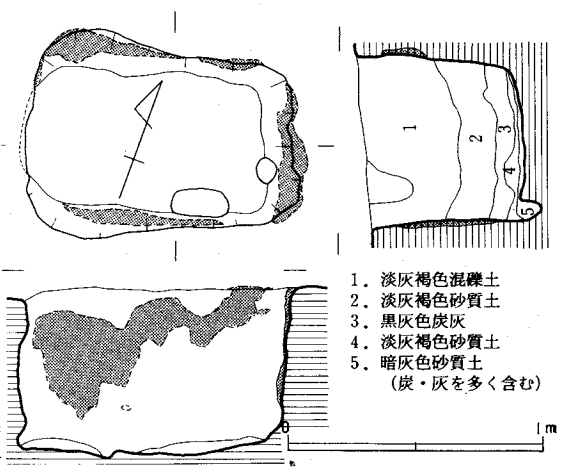


Fig.45　SK116 実測図（1/30）

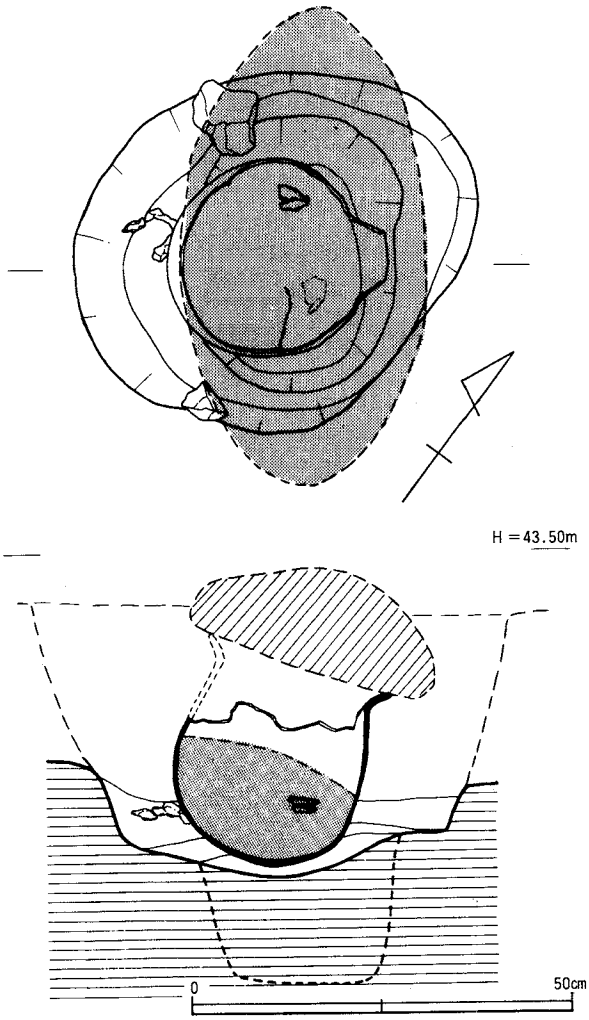


Fig.46　SX135 実測図（1/20）

のほぼ正方形を呈する。V4グリッドに所在し、SB81のすぐ隣である。方位もN－56°－Eとこれに近い。掘方にもバラつきが有り径35～120cmを測かる。深さ38～75cm。柱穴は細く12cm前後。SB201(Fig.40)はSB206・202と同一のグループと考えられ、方位をN－11°－Wにとる南北棟である。2間×5間の細長い棟で梁間3.75m、桁行8.4mを測かる。掘方は40～110cmの円形で、柱穴は径15cm前後を測かる。SC259を切っている。SB202(Fig.41)はSB201の棟ぞろいでN－7°～14°－Wに方位をとる。規模は2間×3間で梁間4.2m、桁行5.2m掘方は48～80cmの円形で深さは15～40cmと残りは悪い。柱穴は径18cm前後である。

鉄滓はこの柱穴からも検出されており、SB69－43g・SB70－6g・SB73－20g・SB75－46g・SB76－253g・SB81－10gが出土している。少量のものは前代の遺物の混入とも思われるが、SB76は5個の柱穴から最大110gの検出を見ており、意図的に埋納されたものとも考えられる。

Fig.42はV～W－1～4グリッド、1区の上部に行なわれている客土による地山整形部分から出土したものである。図示したものは全て須恵器で、特にSB71～73下で多く検出している。57は坏で口径11.6cm、器高3.6cmを測かる。58も坏で口径7.3cm、器高4.1cmを測かる。59は坏蓋で口径13.3cm器高4.2cm、口唇内側に若干段が残る。60はSB73柱間の客土上面で検出されたもので、口径14.7cm、器高7.5cm、焼成がわるく灰白色を呈し、もろくなっている。VI期の高坏である。61はIIIA期の高坏蓋、口径15.8cm、62～64は坏蓋で62が口径10.8cm、63が11.6cm64が12.2cmを測かる。この様にIII～VI期までの遺物が検出されるが遺物包含層を客土に用いた結果である。

この他、古墳時代後期を特徴づけるのは漁具の出土が目立つことで、IIIB～IV期でSK16・186

で管状土錘1、SK49で軽石製の浮子2点、SC52で同1点、鉄製鈎1点、VI期でSK4で管状土錘3点SC31で同2点、鉄製鈎1点、SC46で鉄製薄刃鎌1点、SC56で軽石浮子1点、SC36で鉄製鈎1点SK238で鉄製薄刃鎌1点を検出しており、VI期が目立つ。

（註）日野尚志「筑前国早良群野条里」『史学研究』第99号

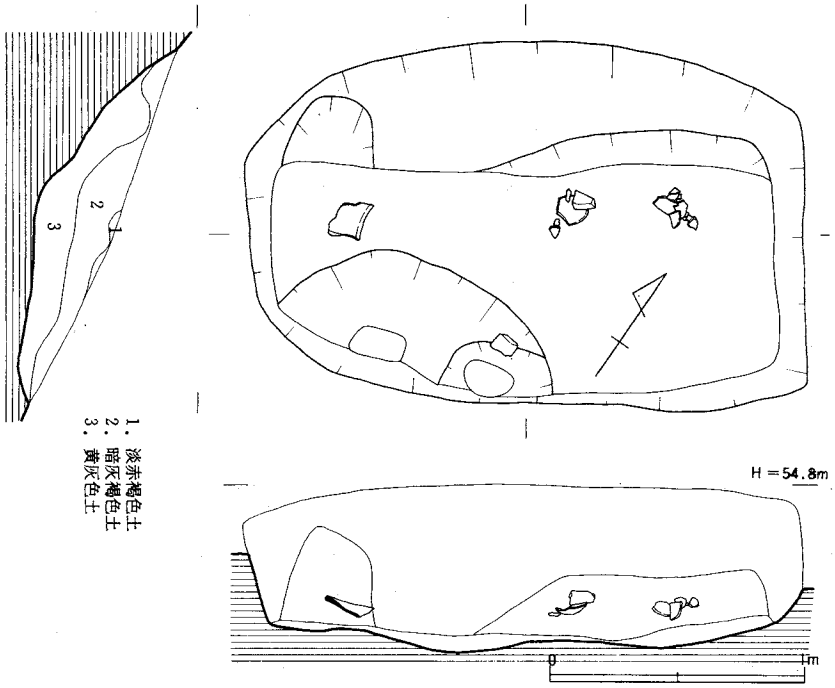


Fig.47　SKI 実測図（1/30）

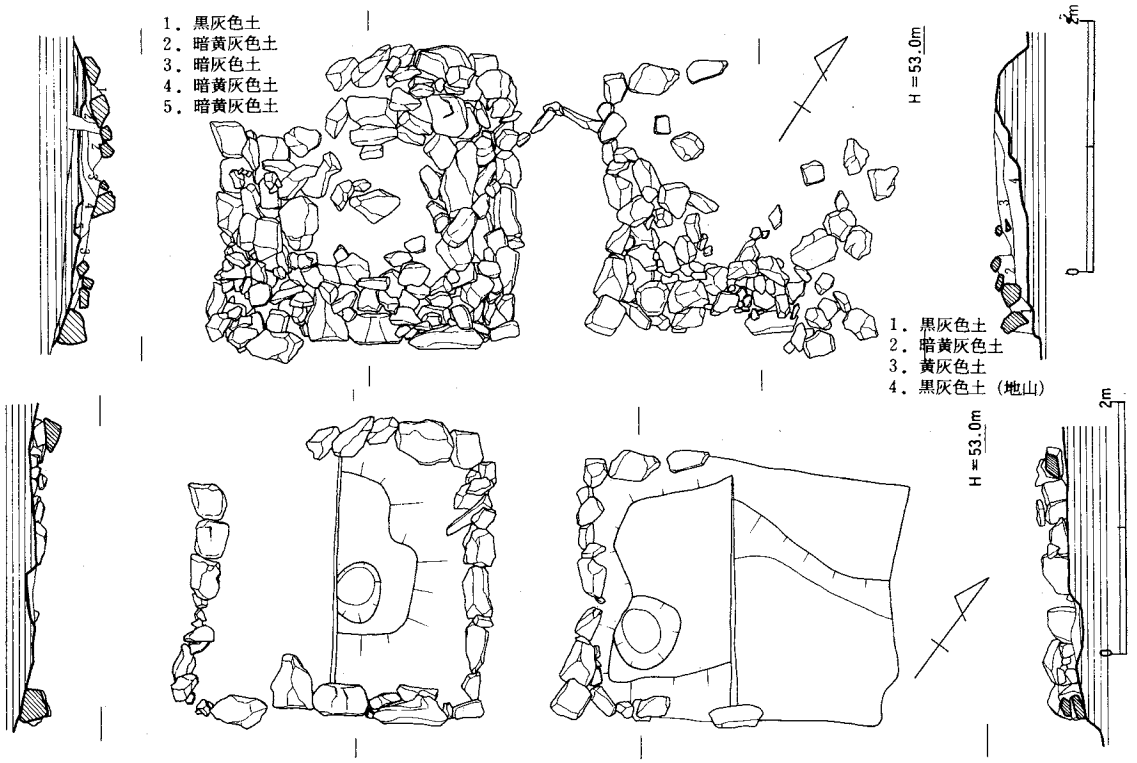


Fig.48　SX7 実測図（1/40）

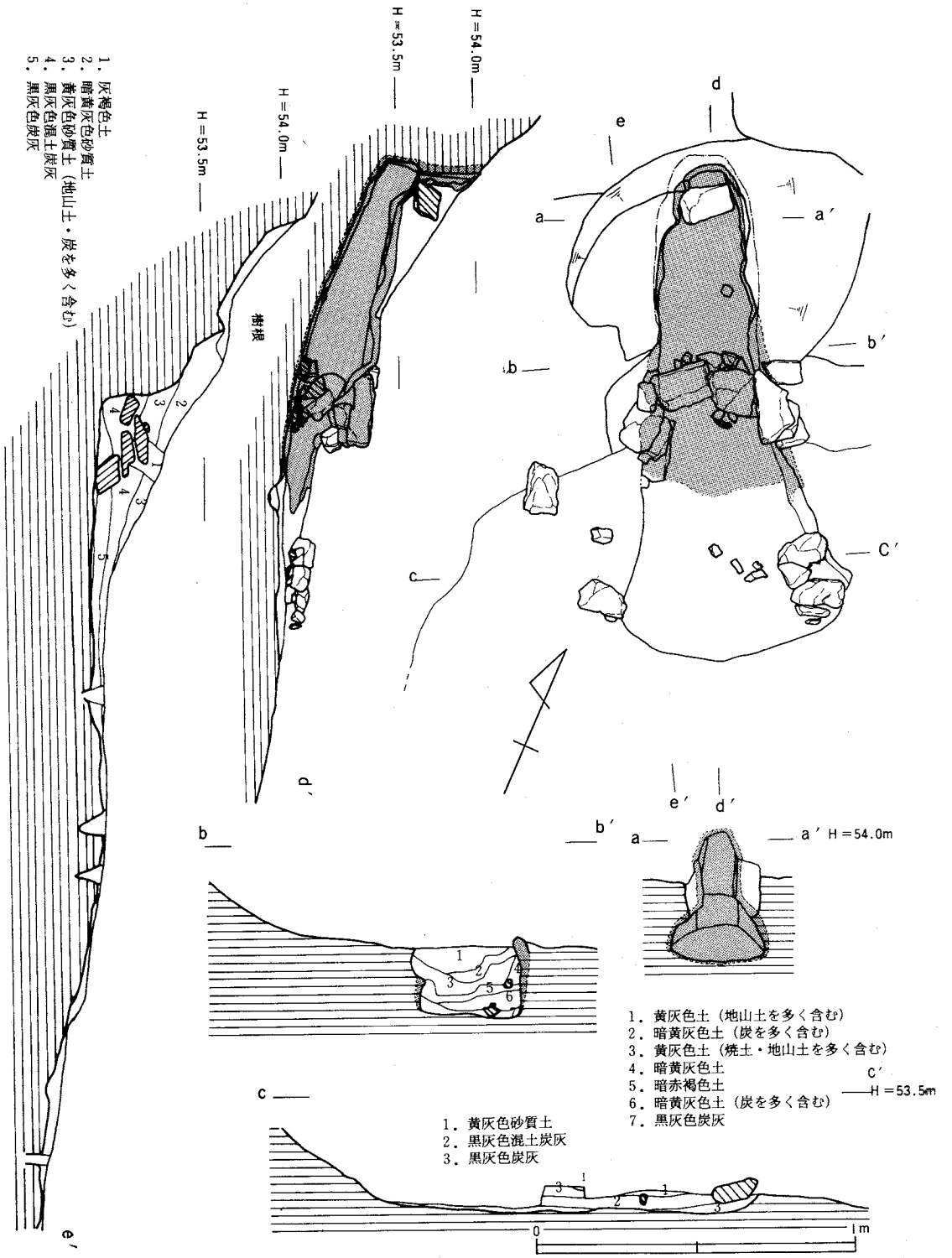


Fig.49　SI-3実測図（1/40）

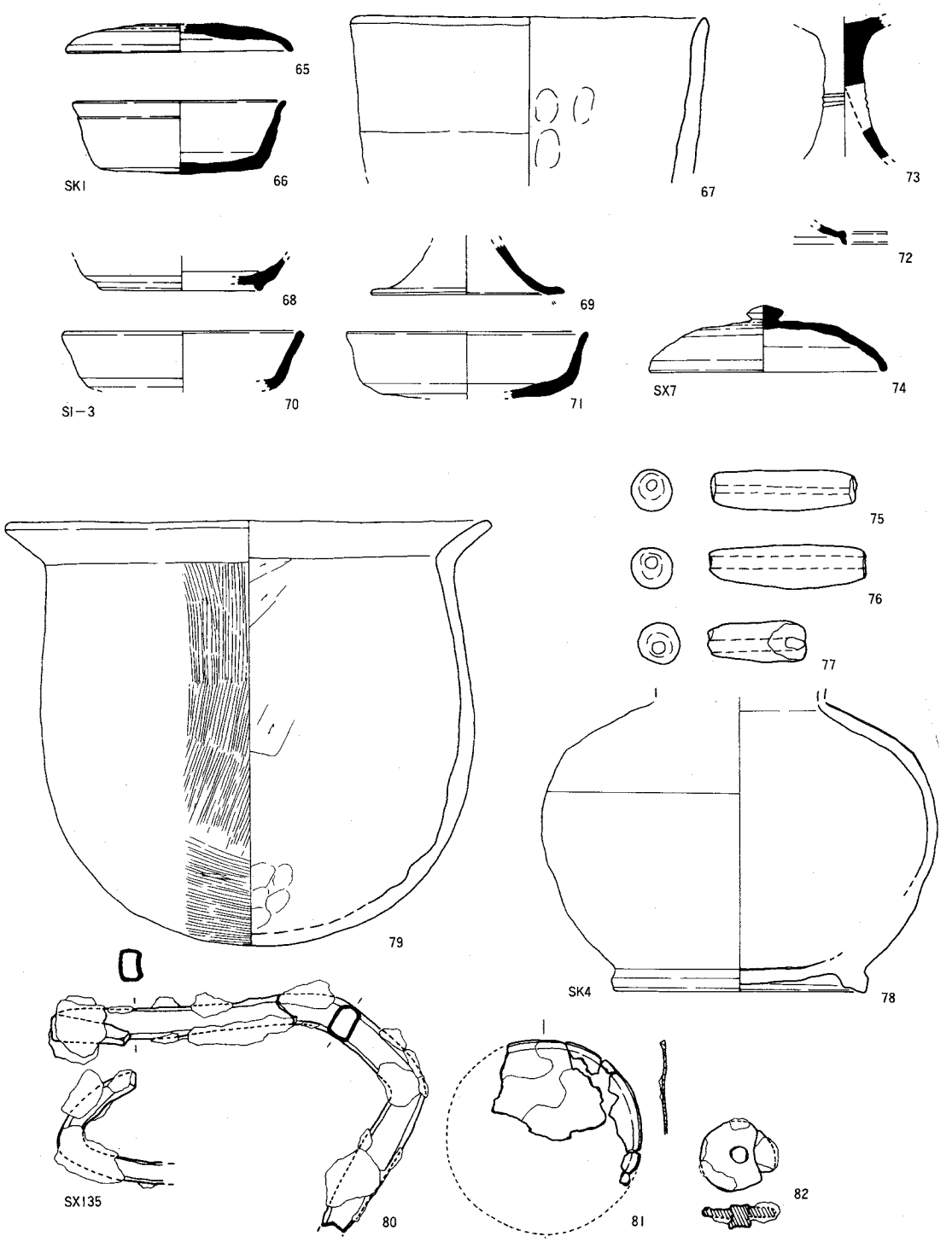


Fig.50　奈良時代遺構出土遺物実測図（1/4～1/2）

奈良時代の調査

土壙（SK）　調査区全域に分布しており、29基は焼土壙、７基は廃棄物処理の土壙である。

焼土壙SK4 (Fig.43) は138×88cmの長方形のプランを持ち深さ50cmを測かる。四壁は厚く焼け部分的に床上に崩落している。底には５cm程炭粒、灰が堆積する。遺物が少ないのが焼土壙の特色の一つであるが、これは登窯の横に有って使用後、廃棄物の処理に使われた様で時期の決め手となる遺物を得られた。Fig.50－75～77は、管状土錘でそれぞれ4.4×1.3cm、4.8×1.3cm、３×1.3cmとほぼ規格化されている。78は灰釉の壺で口縁を欠くが、胴径24.5残高17.8cmを測かる。球形の胴部に外に若干張り出し気味の台形の高台がつく。畳付の内側は若干凹線気味になる。釉は外全面と内面底部にかかり、特に肩部に厚くかかる。淡緑灰色を呈し、胎土は灰白色。多々良込田遺跡から同様の短頸壺が検出されている。プロポーションは良く似ているが、バチ高台であり、本例より先行すると思われる。猿投窯産であろう。SK113 (Fig.44), SK116 (Fig.45) はともに残りが良く、それぞれ100×55cm、108×67cmの長方形で55cm・65cmとかなり深い。他の検出例は深さ30cm程が多く浅い印象を受けていたが、本来はこの様に深いものであった様である。SK1 (Fig.47) は廃棄物処理用と考えられ、登窯SI ３の北側に位置し、同窯製の須恵器を検出している。220×150cmの楕円形で斜面であるため半分は流失している。遺物(Fig.50－65～67）は全て須恵器で、焼きあがりは悪く軟質で淡灰～黒灰色を呈する。

火葬墓（SX135 Fig.25）　T13グリッドの包含層上層中より検出され、検出時、自然礫の蓋石が乗っていた様で、重機稼動中に捨ててしまっており確認できていない。破線部は作業員の証言より復原した。径50cm程の円形の土壙の底面に破鏡（Fig.50－81）と鉄器（同－80・82）を入れ、その上に口径30cm・器高26.4cmの土師器甕（同－79）を置き容積の半分程焼骨を納め、70×30cm程の長い自然礫で蓋をしていた様である。

石組基壇状遺構（SX7 Fig.48）　SB100・71上の包含層上層中で検出しており、この黒灰色土が地山となっている。西側が2.4m四方、東側2.1m四方を測かる。地山を台形に削り出し、自然礫の面を外側にそろえて正方形に組み、主体はその内側に径50～60cm深さ10cm程の坏状の穴を掘り黄灰色土で埋め戻している。内部は何も検出できなかった。上面を自然礫ですき間なく覆っているが、中央部に礫の空白部が有り、石塔などの上部構造が乗っていた可能性が有る。

登窯(SI3 Fig.49)　Ｘ１グリッドに有り、風を集束させるためか斜面を４m程舟底状に削り、その底に窯を開いている。焼成部1.6m燃焼部1.7m、焼成部幅60cm高さ32cmの極めて小さな登窯で、主軸をＮ－30°－Ｗにとる。一度壁が落ちたのか、煙出し部と焼成・燃焼部の境、燃焼部の一部を自然礫を積み上げ補強している。窯体内の焼成・燃焼部の境に１段積み障壁としている。灰原も３m四方程しか広がっておらず、操業は２回程しか行なわれていない様である。出土遺物（Fig.50）は68が須恵器碗で底径9.8cm、69が高坏脚部で径12cm、70・71は坏でそれぞれ口径14.9・15.0cm器高4.2cm程で規格性がうかがえる。色調は緑灰色で焼成は悪い。

(2) 広石古墳群Ⅵ地点

概要

小形の箱式石棺、壺棺を除いて5基の古墳が出土した。全て叶岳から伸びる丘陵の南斜面に位置するが、1号墳と2～5号墳は小さな尾根によって区切られている。本来は支群として区別した方がよかったかも知れないが、ここでは広石古墳群の第Ⅵ群として

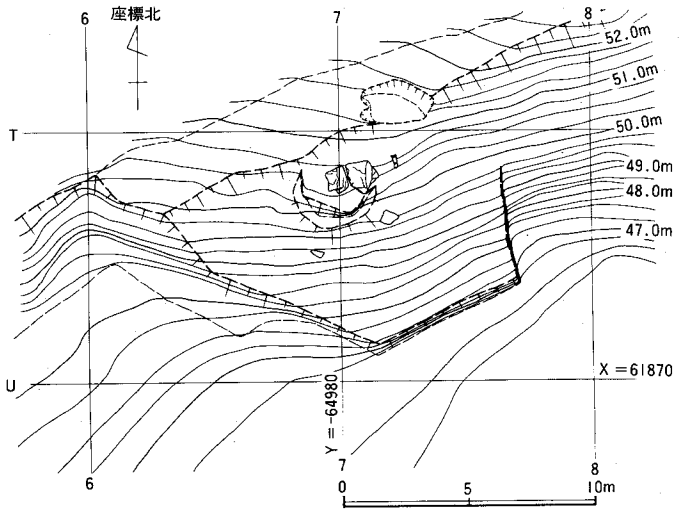


Fig.51　広石古墳群第Ⅵ群1号墳現況測量図（1/300）

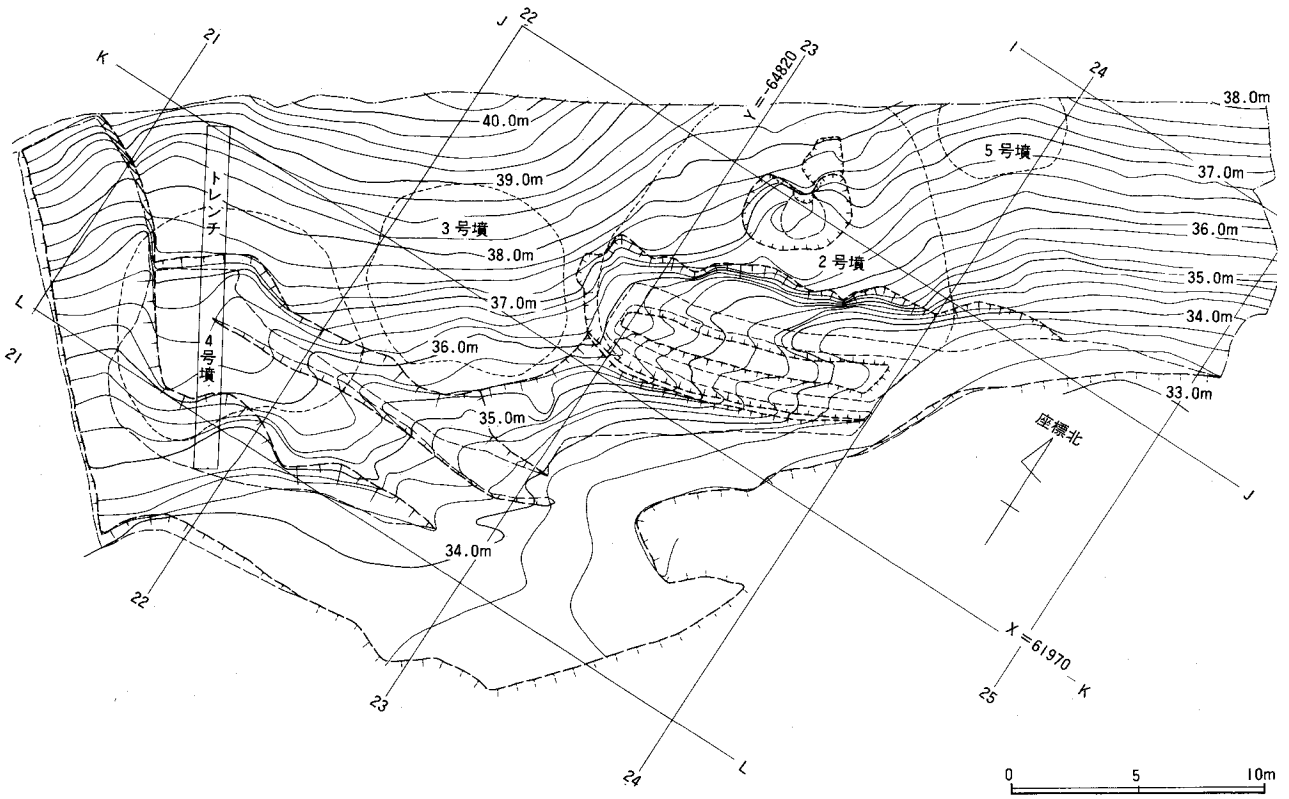


Fig.52　広石古墳群第Ⅵ群2号～5号墳現況測量図（1/300）

まとめておきたい。第VI群の北側には第Ⅰ群から第IV群までの古墳群が分布しており、1977年西陵高校建設に伴って発掘調査が行なわれている。周辺には4～5基単位の古墳群が多く分布する。今回調査した第VI群5号墳のすぐ北斜面にもう一基古墳が存在したが、範囲外であったので調査から除外した。第VI群の数はさらに増加するものと考えられる。

1号墳 (Fig. 51～57, PL. 7)

T7区を中心として位置し、かなり急な南斜面のやや窪んだ場所に造営されている。標高は50mで、調査前は天井石以外ほとんど墳丘を確認することができなかった。1基のみで、周辺には他に古墳は見受けられない。

墳丘は、先ず花崗岩バイラン土の地山を「L」字状に整形し、1段深く掘り窪めて石室を設け、盛土を行なっている。墳形は東西に長い楕円形

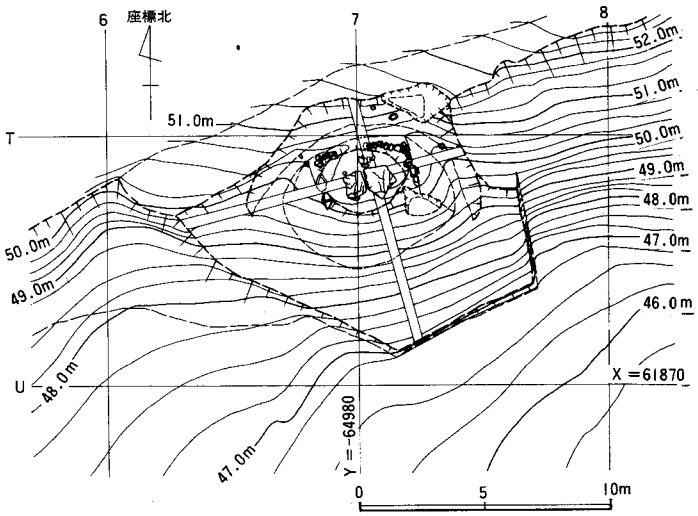


Fig.53　広石古墳群第VI群Ⅰ号墳墳丘測量図 (1/300)

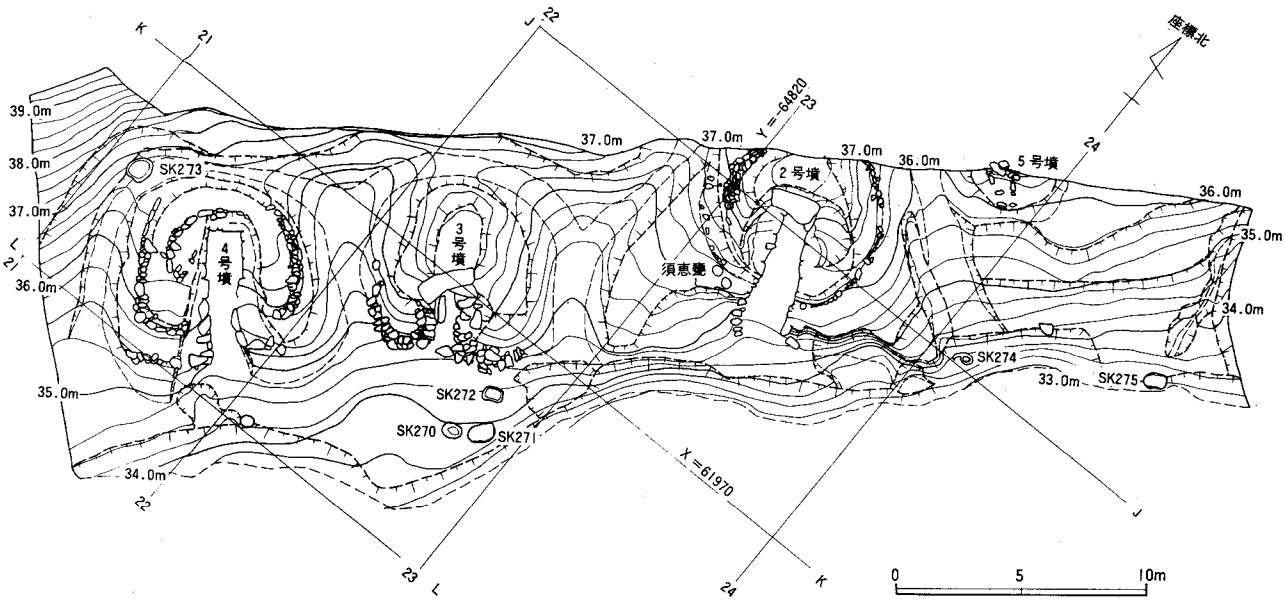


Fig.54　広石古墳群第VI群2号～5号墳墳丘測量図 (1/300)

を呈し、周溝底面で東西6.2m、南北4.0mになるものとみられる。南側は墳丘が流出してはっきりしない。墳丘上には20～30cmの花崗岩礫による列石が隅丸長方形に巡る。墳丘外護のために並べられたものであろう。

石室は、竪穴状の小石室である。横穴式石室と同じ技法で作られているが、横口は取り付かない。墳丘と同じく東西方向に主軸を取り、内法で1.45m、南北0.8mを測る。側壁は、北側が2石、両小口及び南側側壁は1石で構成され、さらにそれぞれ1石積んで天井石を架構する。天井石は、2枚のり、東側が厚くて大きく、西側の方はやや小振りである。床面には敷石が施され、10～30cmの平たい石が並べられている。南側は盗掘によって敷石が除去されている。

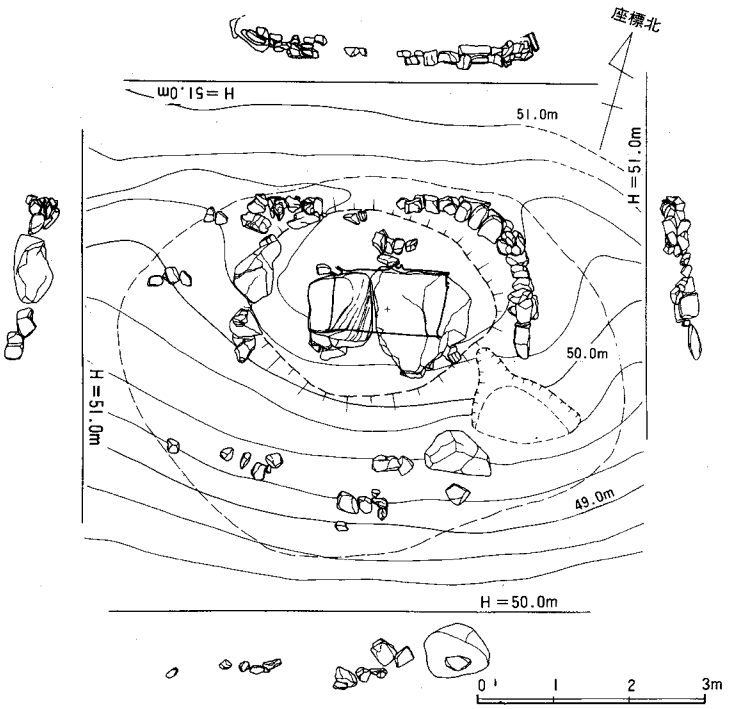


Fig.55　1号墳墳丘外護列石出土状況図（1/100）

遺物は、既に盗掘に会っており、石室内からは鉄鏃の破片以外殆ど出土をみなかった。墳丘周辺からも若干須恵器を採集したが、1号墳に伴うものかはっきりしない。1号墳の築造年代を知るのには、周溝底から出土した須恵器がある。

Fig.56－83は坏蓋である。口径11.1cm、器高3.7cmを測り、厚味のある作りである。灰白色を呈し、焼成が悪い。84・85は坏身で、84が口径10.5cm、器高3.9cm、85が口径9.7cm、器高3.4cmを測り、85がやや小さい。共に蓋受けの立ち上がりは内傾し短かい。厚ぼったい作りで、底部に3分の1程度の回転ヘラ削りが認められる。85はヘラ記号が付く。86は無蓋高

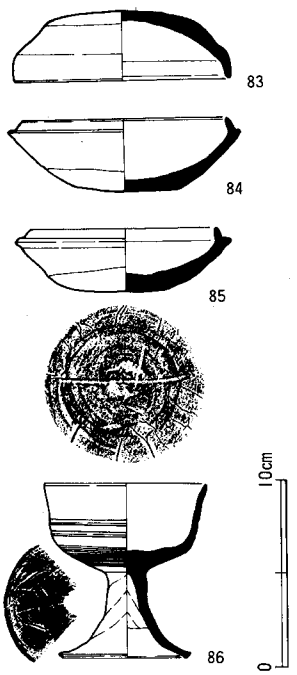


Fig.56　1号墳周溝出土遺物実測図（1/4）

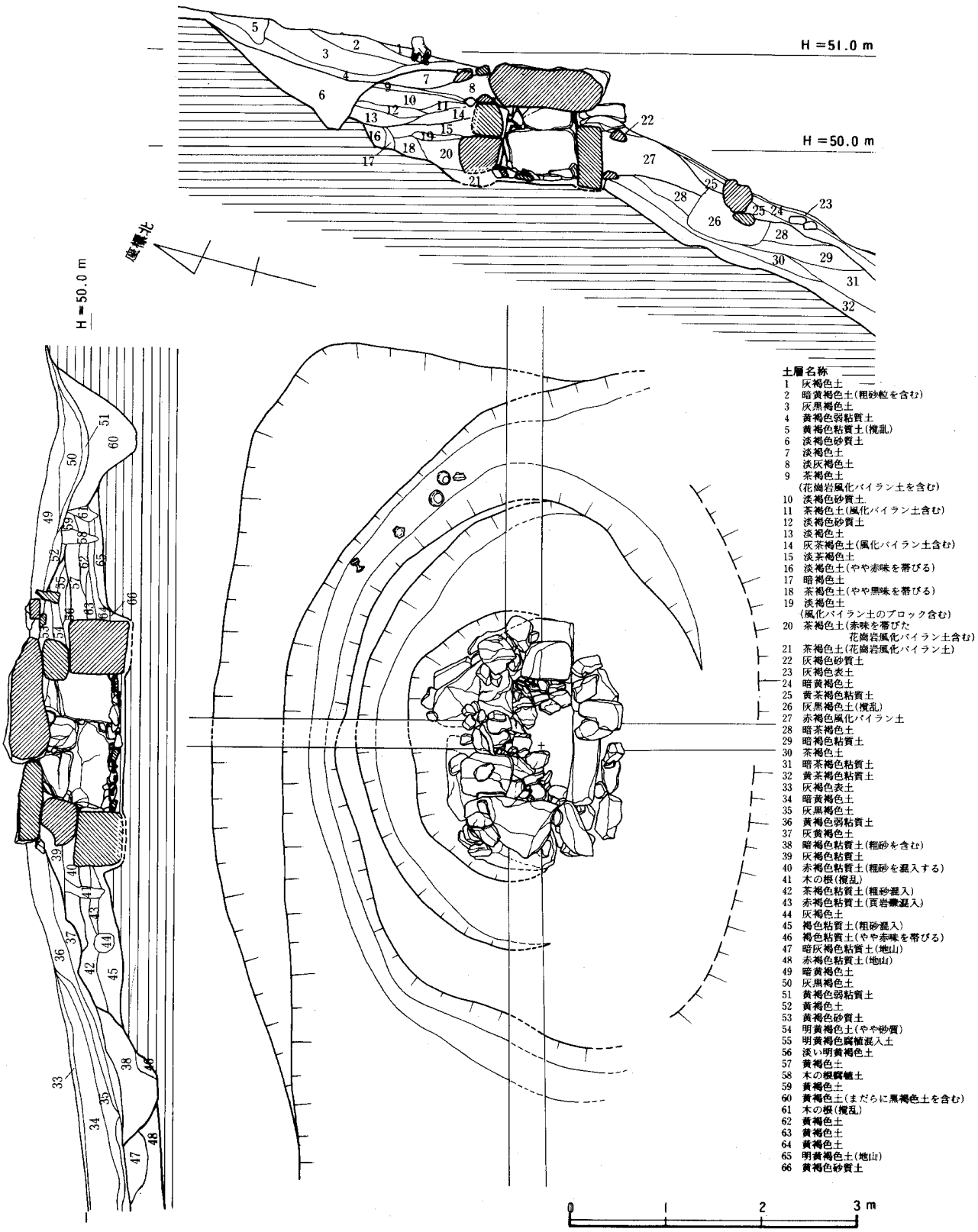


Fig.57　I 号墳石室，周溝出土状況及び土層断面実測図（1/60）

坏である。器高9.3cm、口径8.3cmで、暗灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。坏部には沈線が2条はいり、下半部はカキ目が施される。

1号墳出土の須恵器は、須恵IVaに属すると考えられ、築造年代は、6世紀末から7世紀初めとみられる。追葬については、西側の天井石に小振りの石が選ばれており不可能ではないが物証に乏しく、はっきりしない。

2号墳（Fig.58～60, PL.7）

第1調査地点の東端部、丘陵南側斜面に位置し、4基の古墳が並んで造営されている。2号墳はこの中でも中心部にあって、最も大きな古墳である。調査前は、楣石が抜き取られて玄室上部が開口していた。現況で確認できた古墳は2号墳1基のみで、あとは後世の土砂に厚く埋もれていた。

墳丘は、下方が馬蹄形状、上方が円形を呈する。墳丘の一部は未調査区へ伸びており、また、前面は最近の撹乱で破壊され、全体の規模がはっきりしないが、下方の最大幅は東西14.0m、南北も14.0m程度になるものと考えられる。羨道中央部から2段の列石が玄室を取り囲むように巡り、径7.0mで急に円丘状に盛り上がる。羨道部左側の平坦部と円丘状に盛り上がる境には須恵器の甕が2個供献されていた。列石は下段を第1列石、上段を第2列石とすると、第1列石は1段ないし2段残存し、第2例石は6段程残っている。第1列石の西側及び第2列石の東側は墳丘下に流出していた。使用石材は20～30cm大の花崗岩礫である。

石室は、単室両袖形の横穴式石室で、岩盤の花崗岩風化土を掘り窪めて設置されている。石室平面形は、ほぼ方形の玄室に幅広の羨道が接続する。石室全長は6.4mで、主軸はN－21°－Eにとる。玄室は幅、長さ共に2.1mの方形で、両側壁及び奥壁は1枚の巨石を腰石にしている。腰石の上にはさらに60～80cmの礫を2～3段持ち送り気味に積み重ね、一枚石の天井石を架構する。床面から天井石までは1.9mを測るが、盗掘によって床面敷石が剝ぎ取られているので、本来はもう少し短かかったものと思われる。玄門部は幅1.4mで玄室に対して幅広く、締りのない形態になっている。右袖石は1石の縦位置、左袖石は2石の積み重ねで構成されている。羨道部は袖石から殆どそのままの幅で接続し、両側壁とも1m前後の巨石を3石横位にすえ腰石としている。腰石の上にはやや内傾して転石が1～2段積まれる。天井石は既に抜き取られていて存在しなかった。羨道床面には梱石が2箇所設けられる。それぞれ平たい石を2石づつ組み合わせており、梱石間には敷石が認められる。入口側の梱石（第1梱石）の上には閉塞石が5～6段残存している。10～30cm大の平たい石を中心に石室側に面を揃えて長さ1.5mにわたって整然と積まれている。入口側に広がっている石は崩れたものである。

墳丘土層堆積状況を見ると、4群から5群の層群に分けることができる。最下部は腰石を設置して埋め込まれた土層群で、基盤の花崗岩バイラン土を中心に、硬くタタキ締められており、裏込めに栗石が詰め込まれている。次に側壁の積みあげと盛土が交互に行なわれ、層群の変り

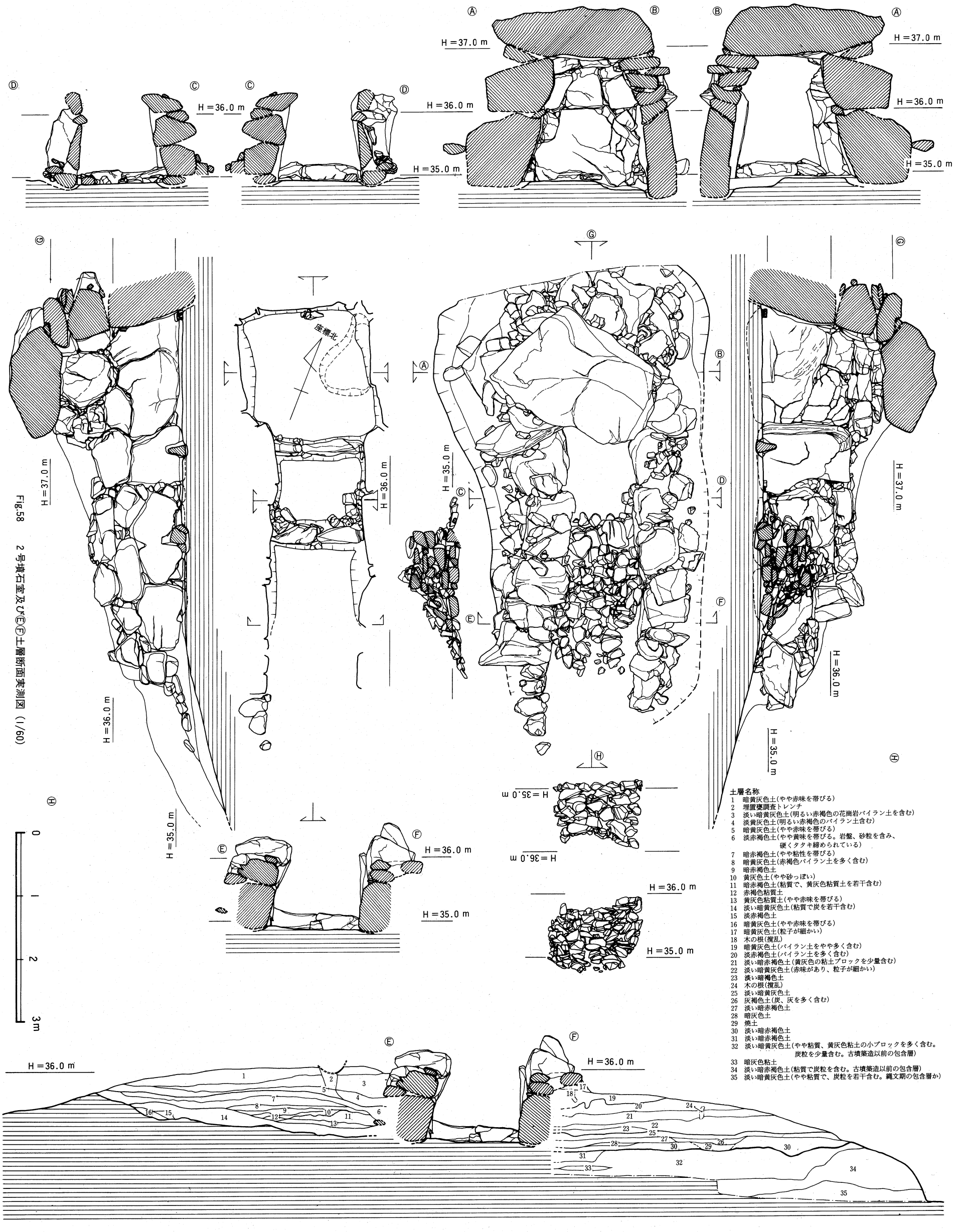
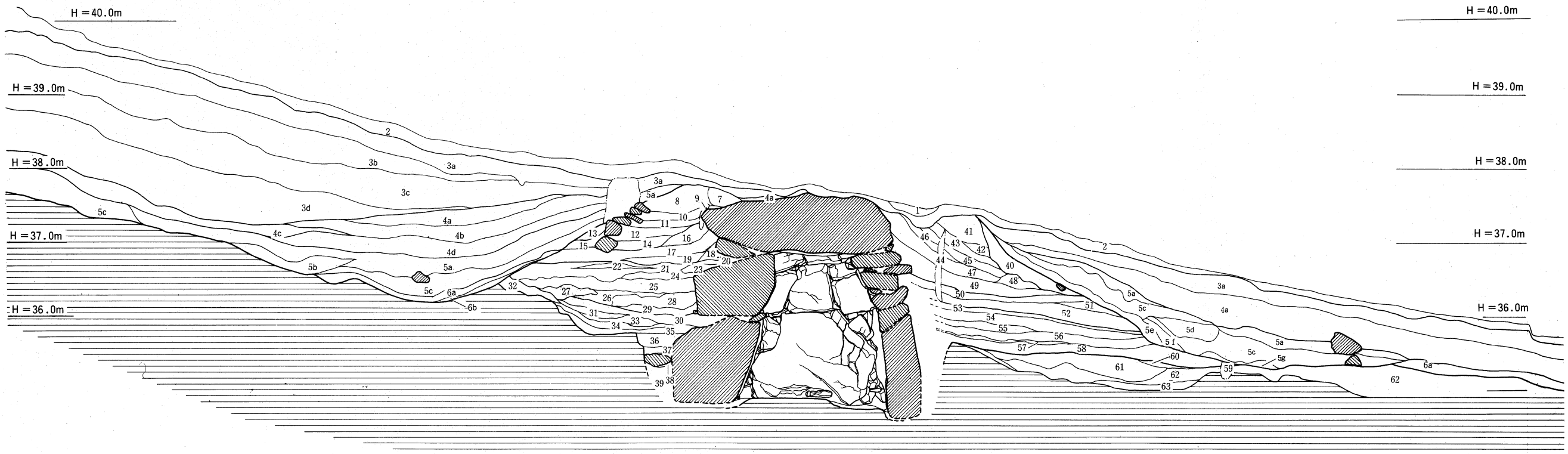
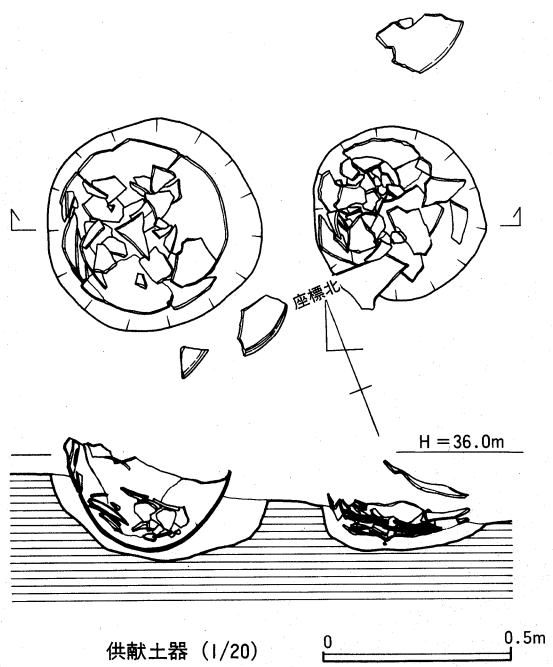


Fig.58　2号墳石室及び Ⓔ Ⓕ 土層断面実測図





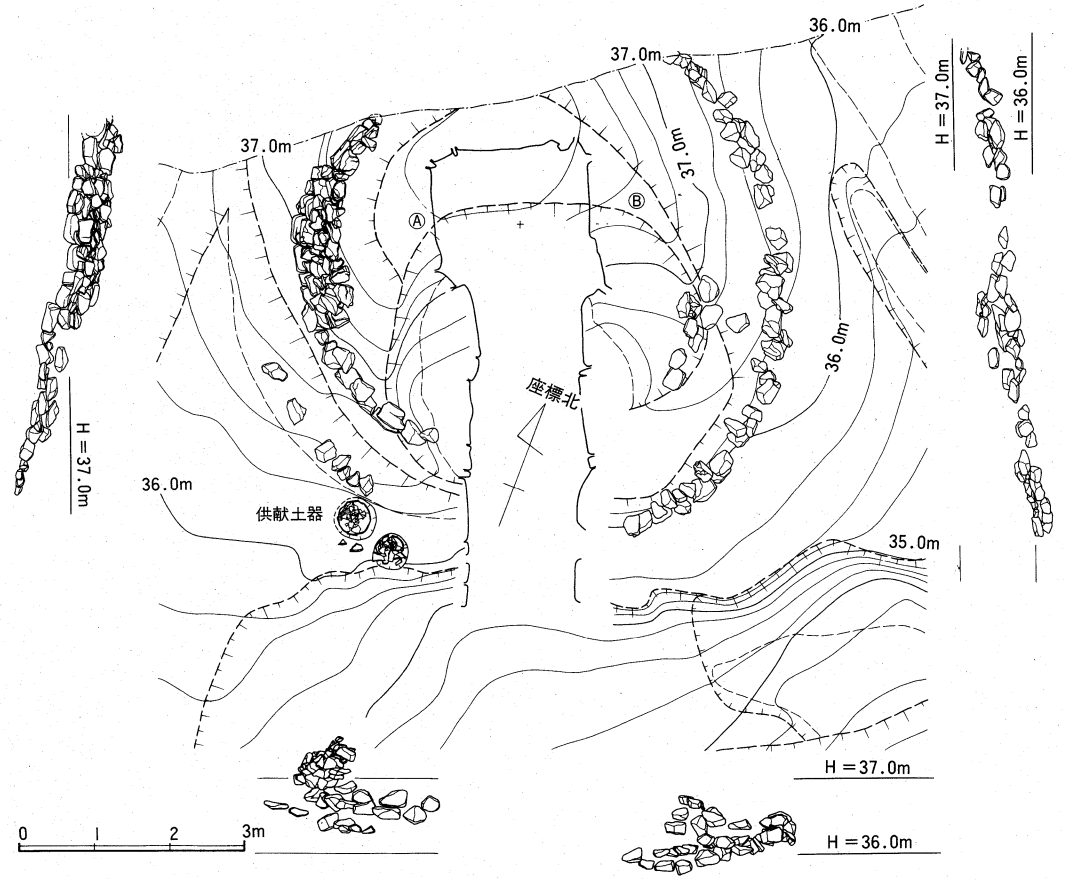


Fig.59　2号墳ⒶⒷ土層断面，墳丘外護列石，供献土器出土状況実測図（1/20，1/60，1/100）

土層名称

1　黄灰色砂質土
2　黒褐色腐植土（表土）
3 a　暗黄灰色砂質土
3 b　黄灰色砂質土
3 c　黄灰色混礫砂質土
（赤味を帯び粗い）
3 d　暗黄灰色砂質土
4 a　淡赤灰色土（やや粘質）
4 b　淡赤褐色粘質土（やや暗い色）
4 c　淡灰褐色粘質土
4 d　灰褐色粘質土
5 a　暗灰褐色粘質土（漸移層）
5 b　暗灰褐色粘質土
（赤褐色土のブロックを含む）
5 c　黒灰色粘質土
（奈良期の遺物を含む）
5 d　黄灰色土
5 e　暗灰褐色粘質土
5 f　暗灰色粘質土
5 g　暗黄灰色土
6 a　黄灰色粘質土
6 b　黄灰色粘質土
（やや赤味を帯びる）
7　赤褐色粘質土
8　赤褐色土
9　木の根（撹乱）
10　赤褐色土
（黄味が強い。黄灰色土も多く含む）
11　赤褐色土
12　赤褐色土
（黄灰色粘土の小ブロックを少量含む）
13　暗黄灰色土
14　赤褐色土
（黄灰色粘土のブロックをやや多く含む）
15　黄灰色土
16　明赤褐色土
17　明赤褐色土
（黄色灰色粘土の小ブロックを少量、石室付近で多く含む）
18　明赤褐色土
（黄灰色粘土のブロックを多く含む）
19　明赤褐色土
（黄灰色粘土の小ブロックをやや多く含む）
20　明赤褐色土
21　黄灰色粘質土
（天井石設置時のタタキ硬化面、炭少量含む）
22　赤褐色土（炭粒少量含む）
23　赤褐色土（炭粒少量含む）
24　黄灰色粘質土（炭粒少量含む）
25　赤褐色土
（黄灰色粘土を少量含む、炭粒も少量含む）
26　黄灰色土
27　赤褐色土
28　明赤褐色土
29　赤褐色土
（黄灰色土のブロックをやや多く含む）
30　赤褐色土
（花崗岩のバイラン砂、礫をやや多く含む。
側壁上半部設置時のタタキ硬化面）
31　暗褐色土
32　黄灰色土（やや砂質）
33　明赤褐色土
34　黄灰色土
35　暗褐色土
（黄灰色土のブロックを少量含む）
36　赤褐色土
（花崗岩バイランの基盤土、砂礫多量に含む。
側壁設置時のタタキ面か）
37　暗赤褐色土
38　暗褐色土（バイラン土やや多く含む）
39　暗赤褐色土（バイラン土やや多く含む）
40　暗黄灰色砂質土
41　赤褐色土（灰色が強い）
42　灰赤褐色土
43　赤褐色土
（花崗岩バイラン土の小ブロックを少量含む）
44　木の根（撹乱）
45　赤褐色土
46　明赤褐色土
（黄灰色粘土のブロックを多く含む）
47　明赤褐色土
（黄灰色粘土のブロックを少量含む。赤味が強い）
48　明赤褐色土（灰味が強い）
49　明赤褐色土
（黄灰色粘土のブロックを多く含む）
50　明赤褐色土
（黄灰色粘土を多量に含む。タタキ硬化面）
51　赤褐色土（灰味が強い）
52　赤褐色土
（黄灰色粘土の小ブロックをやや多く含む）
53　明赤褐色土
（黄灰色粘土を多量に含む。タタキ硬化面）
54　明赤褐色土
（黄灰色粘土の小ブロックをやや多く含む）
55　明赤褐色土
（赤味が強い。黄灰色粘土の小ブロックを少量含む）
56　明赤褐色土（55と類似）
57　暗赤褐色土
（黄灰色粘土の小ブロックを少量含む）
58　暗赤褐色土
（黄灰色粘土の小ブロックをやや多く含む）
59　木の根（撹乱）
60　暗赤褐色土
（暗黄灰色土のブロックをやや多く含む）
61　暗赤褐色土
（暗黄灰色土のブロックを多量に含む）
62　暗黄灰色土（やや砂質）
63　暗褐色土

目は作業面となっていた為か硬くタタキ締められている。側壁積み上げ後、さらに硬くタタキ締められ、天井石を架構している。天井石を設置したあとは、外護列石を設け、土を順次積み上げ全体を被覆したものとみられる。本来はさらにこの上に盛土が施され、外護列石の被覆を含めて、墳丘の整形が行なわれたものと考えられる。

遺物(Fig.60)は、石室が開口して盗掘に会っていたので、殆ど現位置を留めるものはなかったが、石室、羨道、前庭、墳丘とそれぞれ少量づつ出土している。石室からは須恵器坏身、羨道からは1個の金環、土師器の坏、側壁石組の間にはさまって鉄刀が出土している。閉塞石外側の前庭部からは、鉄滓、須恵器坏身・蓋、金環などがあり、墳丘には供献された須恵器甕の外に、須恵器坏身・蓋、紡錘車などが出土している。

87は坏蓋で、口径12.1cm、器高3.9cmを測り、青灰色を呈する。焼成は良好であるが、天井部外面の調整が粗雑である。前庭部出土。88は、石室からの出土で、口径11.8cm、器高4cmを測る。蓋受けの立ち上がりが短くなり、器形も小形化に向っている。89・90は須恵器の坏蓋と身で、89は口径7.8cm、器高3.8cmで擬宝珠のつまみが付き、90は口径8.6cm、器高3.1cmの無高台の坏である。共に焼成があまく灰白色を呈している。2号墳では最も新しい時期の遺物である。91は土師器の大形の坏で口径20.3cm、器高3.5cmとなる。明赤褐色を呈し器面の磨滅が著しい。羨道部からの出土である。93〜94は銅地金張りの耳環で、93は径1.5〜1.6cmで断面最大径は6mmとなる。羨道部出土。94は閉塞石外側から出土し、径2.4〜2.6cmである。銅地金張りで断面最大径は8mmである。95は墳丘から出土した滑石製の紡錘車である。径3.5cm、厚さ1.8cm、孔径8mmを測る。

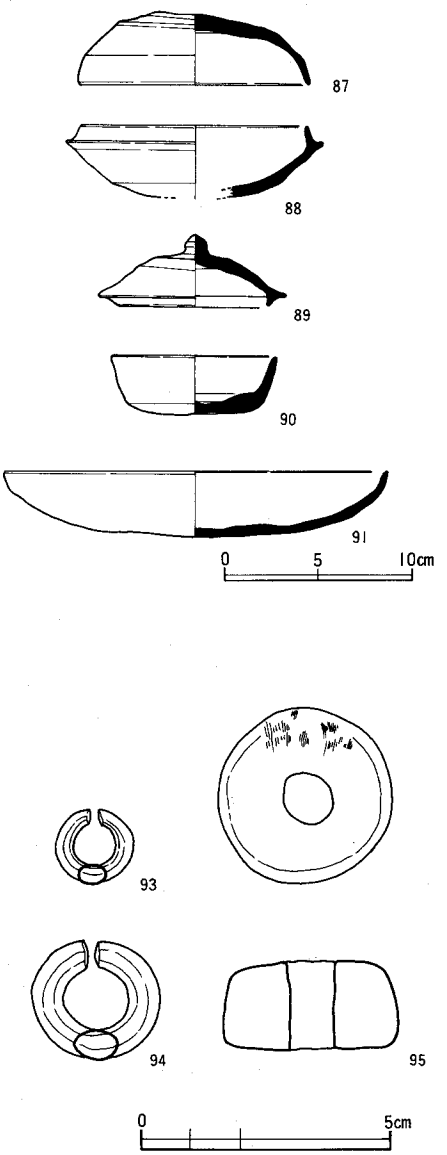


Fig.60　2号墳出土遺物実測図(1/4, 2/3)

3号墳（Fig.52・54・61～64, PL.8）

2号墳の西側に位置し、東側の周溝は2号墳と共有する。南側の傾斜面を地山整形して墳丘が造営されている。調査前は全く確認できず、墳丘上に2～3mの土砂が厚く堆積していた。墳形は馬蹄形を呈する円墳でやや小形の墳丘を有し、長さ幅ともに8mである。墳丘は、ⒶⒷセクションで2m程残存していたが、既に天井石が露出していたので本来はもっと高かったものと考えられる。前庭部からの北高差は3.5mあり、前面から見上げると実際よりもかなり大きく見える。

石室は、両袖形の単室構造の横穴式石室で、主軸はN－29°－Wをとる。石室全長は、5.9mで両側壁ともほぼ等しい法量である。玄室は長方形プランを持ち奥壁幅、前幅ともに1.5mで、左側壁は2.1mを測る。右側壁は袖石が内側に入り込んでいるため20cm短かい。床面には、20～30cm大の扁平な礫の敷石があるが、前半部分は撹乱によって剝ぎ取られている。床面敷石から天井石までの高さは1.7mである。玄室の構造は、左右両壁に1m前後の平たい石を3石横位または縦位に立て、奥壁には2枚の礫を立てて腰石としている。腰石から上にはやや小振りの扁平礫を持ち送り状に5段積み重ね、断面三角形、平面方形の天井石を乗せる。袖石は玄室腰石よりもさらに小さい石を用い、幅1mの玄門を作る。羨道は、玄門と同じ幅1mで、袖石に接続する。羨道は両側壁に1石づつ大きな石を使用している他は、やや小振りの礫で構成されている。玄室及び羨道の側壁は一体化して積み上げられており、楣石は袖石に乗らず側壁に組み込まれている。羨道の天井石は細長い石が1石架構されているが、もう1石羨道部に崩落していたので、本来は2石あったものと考えられる。羨道には2箇所の梱石が設けられ、細長い礫で仕切られている。第1梱石の部分に面を揃え閉塞石が積みあげられる。20～30cmの礫が4～5段残存し、長さ1m弱に整然と積まれている。第2梱石（奥側）と閉塞石との間には、須恵器と土師器が一括で供献されていた。

石室は、岩盤の花崗岩バイラン土を掘り込み、設置されているが、墳丘盛土は墓壙掘削面から積み上げられている。2号墳と同じく4層群に分けることができる。先ずは墓壙の埋め土で、基盤のバイラン土を主に使用している。次に側壁中位までは、バイラン土を含んだ粘質土が水平に大きく積まれる。側壁中位から天井石下端部までは、赤褐色土系のバイラン土や粘質土を含んだ土が細い幅で墳丘の傾斜に合わせて積み上げられている。石室側壁の裏側は青灰色の粘土で目貼りされ、栗石を裏込めにして石積みの安定を計っている。天井石下端部から上は幅の厚い層で盛られ、さらにこの上に盛土を行ない墳丘を整えていたものと考えられる。石室の大きさの割には盛土の大きさが小規模な古墳である。

外護列石は、古墳全体を巡らず、墳丘前面部を中心に側面の一部に配置されていた。調査時点で3～4段確認したが、かなり崩落している石もあり、本来はもっと高く積まれていたとみられる。列石は羨道端部から取り付き、側辺に行くに従って段が減少している。図化している

列石のうち、現位置を保っている石は少なく、全体に積み重なったまま、下端に少しズレていた。

出土遺物は、石室内、羨道、前庭部、墳丘及び周溝からそれぞれ出土している。石室内の遺物は、奥壁側に耳環と鉄滓、鉄器片があり、左側壁玄門側に須恵器の坏蓋と身が4個体あった。羨道部の第1梱石と第2梱石との間には10数個体の須恵器と土師器が供献されていた。前庭東側には須恵器の坏身と蓋が出土し、東側周溝底から銅地金張りの耳環が出土している。3号墳は深く埋没していたにもかかわらず、羨道部天井から進入して盗掘が行われていた。

Fig.64－101～104は石室内から出土した須恵器である。時期差があり追葬によるものとみられる。101は焼けひずみのある坏蓋で、口径11.8cm、器高3.6cmを測る。ヘラケズリは天井部のみで、その部分にヘラ記号がみられる。やや紫がかった暗灰色を呈し焼成は良好である。102は対になると考えられる坏身である。口径10.4cm、器高3.7cmで、紫がかった暗灰色を呈し、焼成

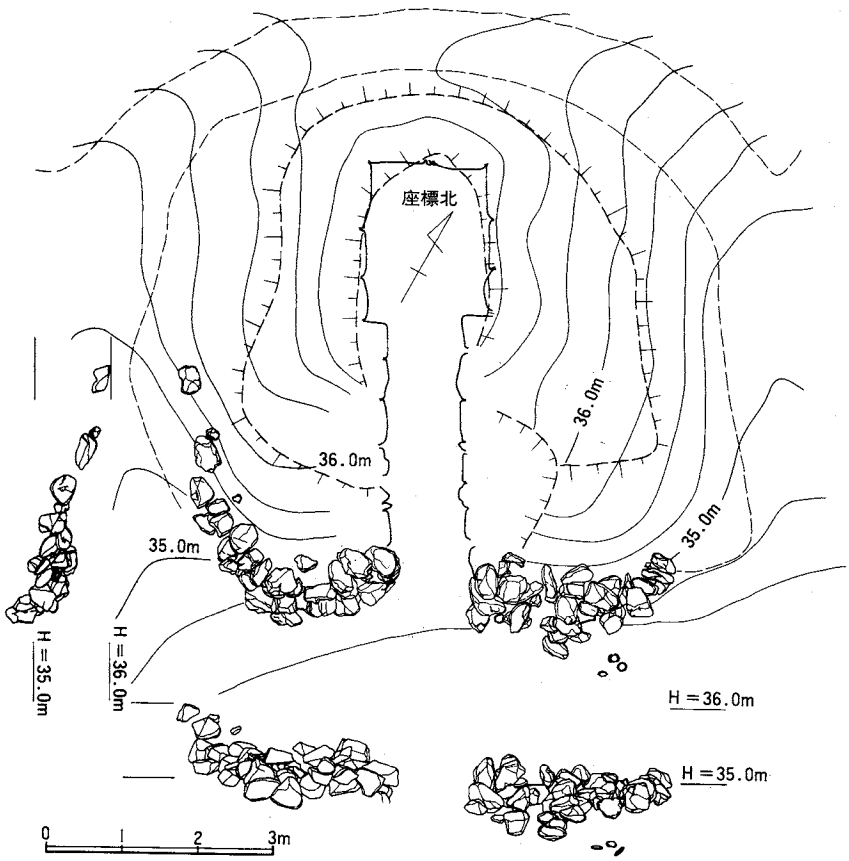


Fig.61　3号墳墳丘及び外護列石出土状況実測図（1/100）

は良好である。坏蓋と同様焼けひずみがある。103と104は内側にかえりのある坏蓋で、103には凝宝珠状のつまみが付く。対になる坏身は出土をみなかった。103が外径15.6cm器高3.8cmで、明るい灰白色を呈し焼成が悪い。天井部3分の1にヘラケズリが施される。104は外径11.6cm、器高1.8cmで赤茶褐色を呈し、焼成は良好である。天井部にヘラケズリが見られる。103、104は7世紀後半代で、3号墳の下限を示す。105〜115は羨道部に供献された土器群である。109〜113は土師器で、それ以外は須恵器である。105、106は対になる坏蓋と身である。蓋には凝宝珠状のつまみが付き、坏は無高台である。坏身の口径10.2cmで、蓋共に暗紫色を呈し、焼成良好である。107は無蓋高坏、108は甕である。高坏は器高9.1cmで、筒部に2条の沈線を入れ、脚端部は外へはね上る。甕は口径9.0cm、器高12.1cmで、体部上半に2条の沈線を施し、その間に刺突文を充塡し、径1cmの孔が穿たれる。体部下半はヘラケズリが施され底面は平たく仕上げられている。109は高坏、110、111は丸底壺、112、113は埦である。109は口径12.3cm、器高8.5cmで脚部は折れて外方に広がる。外面にはヘラ磨きが施され、坏部内面には暗文がみられる。110は口径10.4cm、器高9cm、111は口径10.6cm、器高9.5cmで、外面及び口縁部内面はヘラ磨き、内面下半はナデ調整が施されている。112は口径16.4cm、器高6.4cm、113は口径15.8cm、器高6..1cmを測り、112は外面ヘラ磨き、内面ナデ調整、113は外面ヘラ磨き、内面もヘラ磨きで暗文状を呈している。体部中央にはそれぞれかすかな段が認められるが112の方がやや明瞭になっている。これらの土師器は全て明るい赤褐色を呈しており、胎土・焼成ともに良好である。114は平瓶である。口径7.2cm、器高16.2cmで胴部最大径は18.9cmになる。体部下半3分の1にヘラケズリが施され、底面にはヘラ記号がみられる。115は提瓶で、口径9.4cm、器高21.6cmを測る。把手は既に退化しており、体部にはカキ目調整が施される。茶味を帯びた暗黒色を呈し焼成は良好である。

Fig.62－96は石室内から出土したガラス臼玉である。緑色を呈し、径0.85cm、厚さ0.5cmを測る。98は石室奥壁側で出土した銅地銀張りの耳環である。径2.5〜2.7cm、断面最大径は0.7cmである。99は東側周溝、100は石室内から出土した銅地金張りの耳環である。99が径2.3〜2.5cm、断面最大径は0.8cm、100が径2.6〜2.8cm、断面最大径は0.9cmとなる。

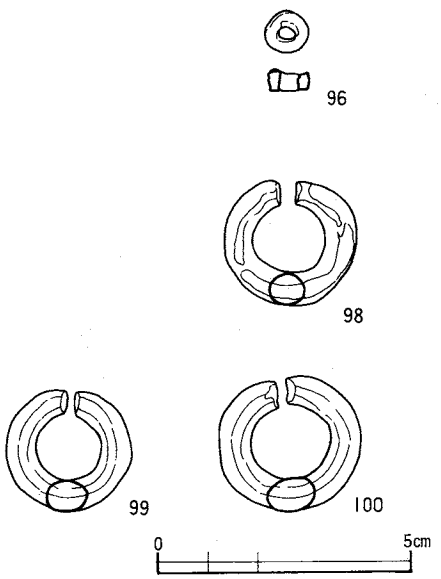


Fig.62　3号墳出土遺物実測図Ⅰ（2/3）

4号墳（Fig.65〜67, PL.8）

3号墳の西側に位置し、調査前に20〜30cm大の

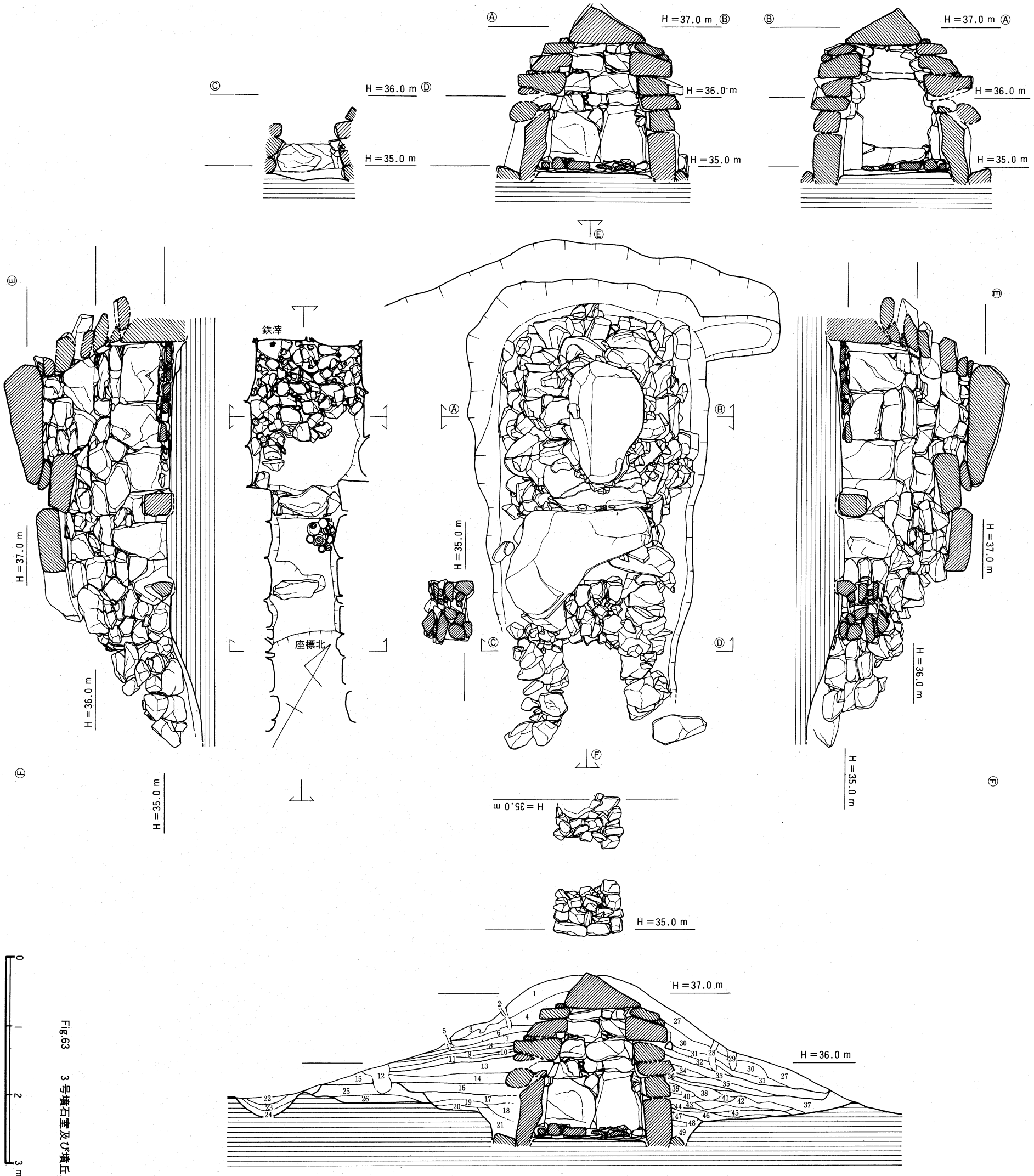


Fig.63　3号墳石室及び墳丘土層断面図（1/60）

土層名称
1　淡い明赤褐色土(砂粒含む)
2　木の根(攪乱)
3　淡い暗黄褐色土(若干灰色土がまざる)
4　淡い明赤褐色土(1より砂粒がやや少ない)
5　木の根(攪乱)
6　淡い暗赤褐色土(バイラン土のブロック若干含む)
7　暗赤褐色土(若干灰色をおびる、バイラン土ブロック含む)
8　淡い暗黄灰色土(粘質をもつ)
9　淡い暗黄灰色土
10　濃赤褐色土(バイラン土を含む)
11　濃赤褐色土(10によく類似している)
12　黄灰色土(ピット？)
13　暗赤褐色土(14よりやや赤みが強い粘質土)
14　暗赤褐色土
15　淡い暗赤褐色土
16　花崗岩バイラン土(粘質)
17　19より明るめ
18　赤褐色土(バイラン土含む、粘質土)
19　暗黄灰色土(炭を含む、粘質)
20　暗赤褐色土と黄灰色土がまざる(バイラン土含む)
21　暗黄灰色土(粘質)
22　淡い暗黄灰色土
23　淡い暗黄灰色土(バイラン土含む)
24　22に同じ
25　26に同じ
26　暗黄灰色土(粘質土)
27　淡い暗赤褐色土(30よりやや暗い)
28　木の根(攪乱)
29　木の根(攪乱)
30　淡い暗赤褐色土
31　淡い暗赤褐色土(バイラン土を含む)
32　淡い暗赤褐色土(やや灰色がかる)
33　淡褐色土(やや青みを帯びる)
34　赤褐色土(青みをおびた淡褐色土がまざる)
35　淡褐色土(やや青み、33より粘質をもつ)
36　暗赤褐色土
37　淡赤褐色土(やや粘質、バイラン土ブロック含む)
38　バイラン土
39　36と同じ(やや淡褐色土がまざる)
40　(バイラン土に淡い暗赤褐色粘質土がまざる)
41　暗赤褐色土(やや粘質)
42　バイラン土
43　暗赤褐色土(粘質、やや灰色がかる)
44　バイラン土(赤褐色粘質土含む)
45　淡褐色粘質土(青みを帯びる)
46　淡褐色土(やや赤みをもつ、バイラン土ブロック含む)
47　バイラン土(青灰褐色粘質土がまざる)
48　バイラン土
49　48に同じ
50　淡い暗褐色土(やや茶みを帯びる)
51　淡い暗赤褐色土(やや青味、バイラン土ブロック含む)
52　淡い暗赤褐色土(やや茶味、バイラン土含む)
53　淡褐色土(やや赤味)
54　淡褐色土(53によく類似している)
55　淡褐色土(やや茶味、バイラン土多く粘質土)
56　灰褐色土
57　淡茶褐色土(粘質)
58　60と同じ
59　バイラン土
60　淡茶褐色
61　暗茶褐色土(やや赤味、粘質土)
62　バイラン土
63　暗茶褐色土
64　暗茶褐色粘土
65　バイラン土

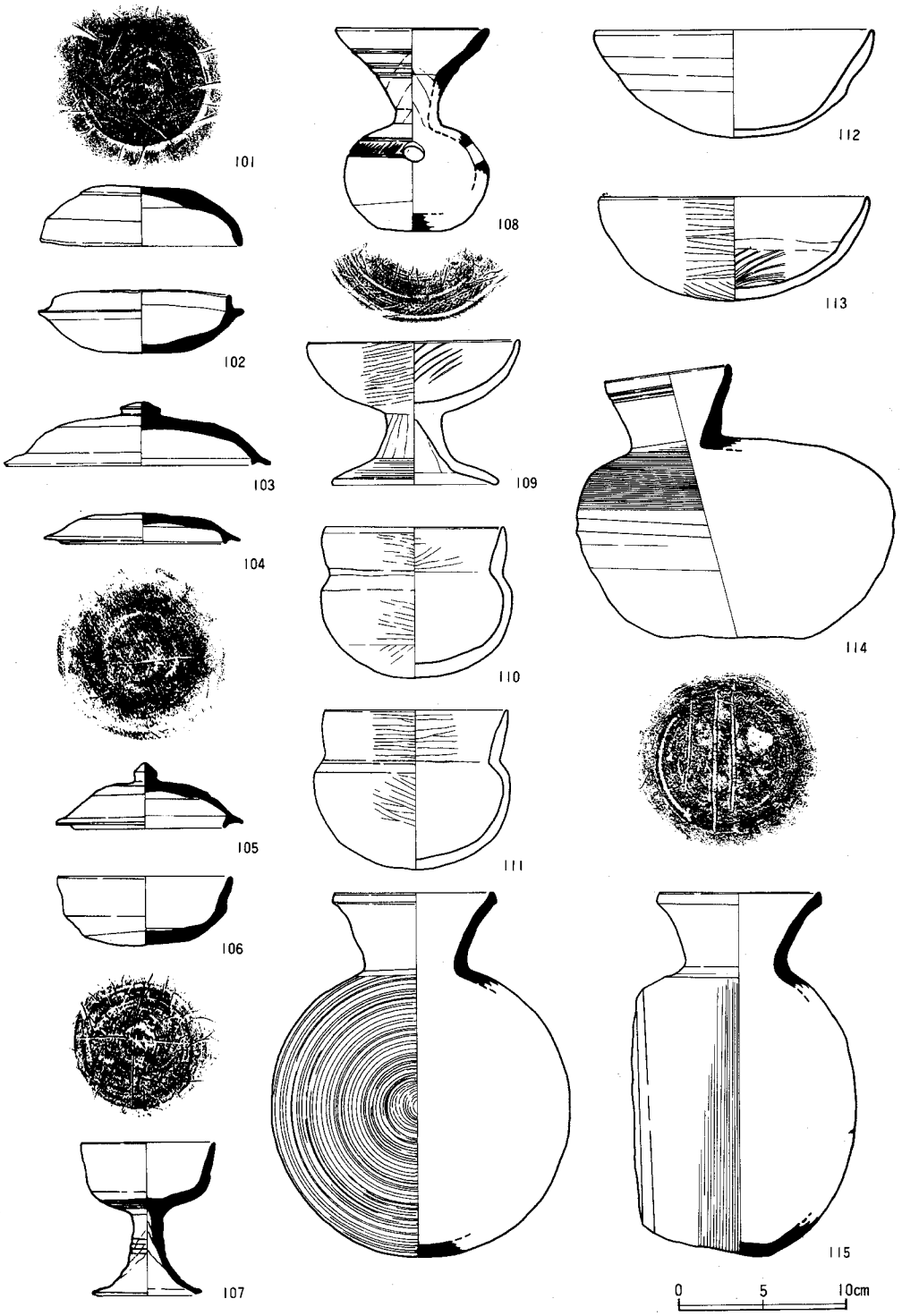


Fig.64　3号墳出土遺物実測図2 (1/4)

礫が散乱していたので、トレンチを入れて確認した。墳丘は馬蹄形状を呈し、上半部は後世の破壊によって殆ど残存していなかった。規模は周溝底で測ると幅、長さともほぼ9.5mである。東側の周溝は2号墳と共有する。

石室は、単室両袖形の横穴式石室で、主軸はN－40°－Wをとる。石室全長は、左壁が5.4m、右壁が4.9mで左壁がやや長い。玄室は長方形を呈し、奥幅1.5m、前幅1.6m、左側壁2.2m、右側壁2.1mを測る。各壁は1m前後の巨石を2石使用し、両側壁は横位に、奥壁は縦位に立てて腰石としている。側壁は腰石の上に1段しか残存していなかった。床面には敷石が施され2面確認できた。1面目は15～40cm大の不揃いの扁平礫を敷き詰め、2面目は20～30cm大の割と揃った扁平礫を丁寧に敷き詰めている。袖石は細長い石を縦位に立てて構成されているが、右袖石は左袖石に比べ短い。楣石を架構する場合は、右袖石にもう1石上積みが施されたと考えられる。玄門の幅は1mで、やや開き気味の羨道が接続する。羨道は玄室側に大きな腰石を使

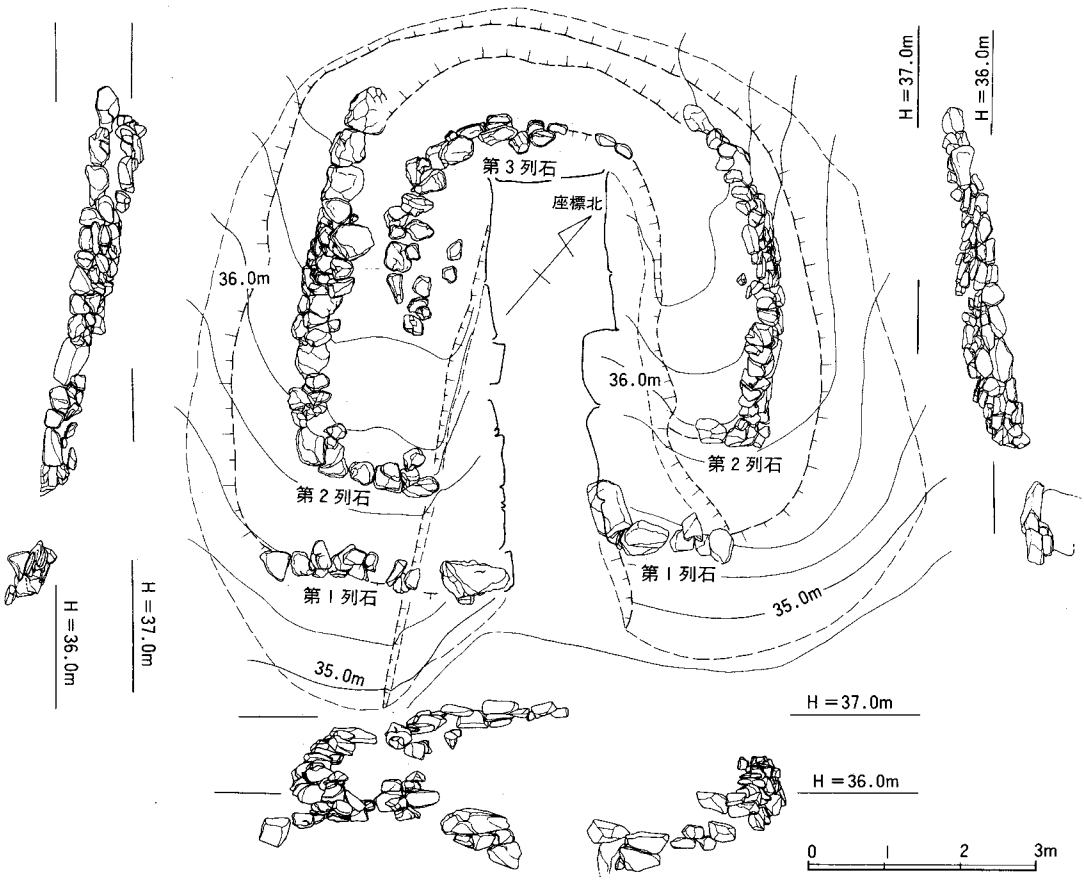


Fig.65　4号墳墳丘及び外護列石実測図（1/100）

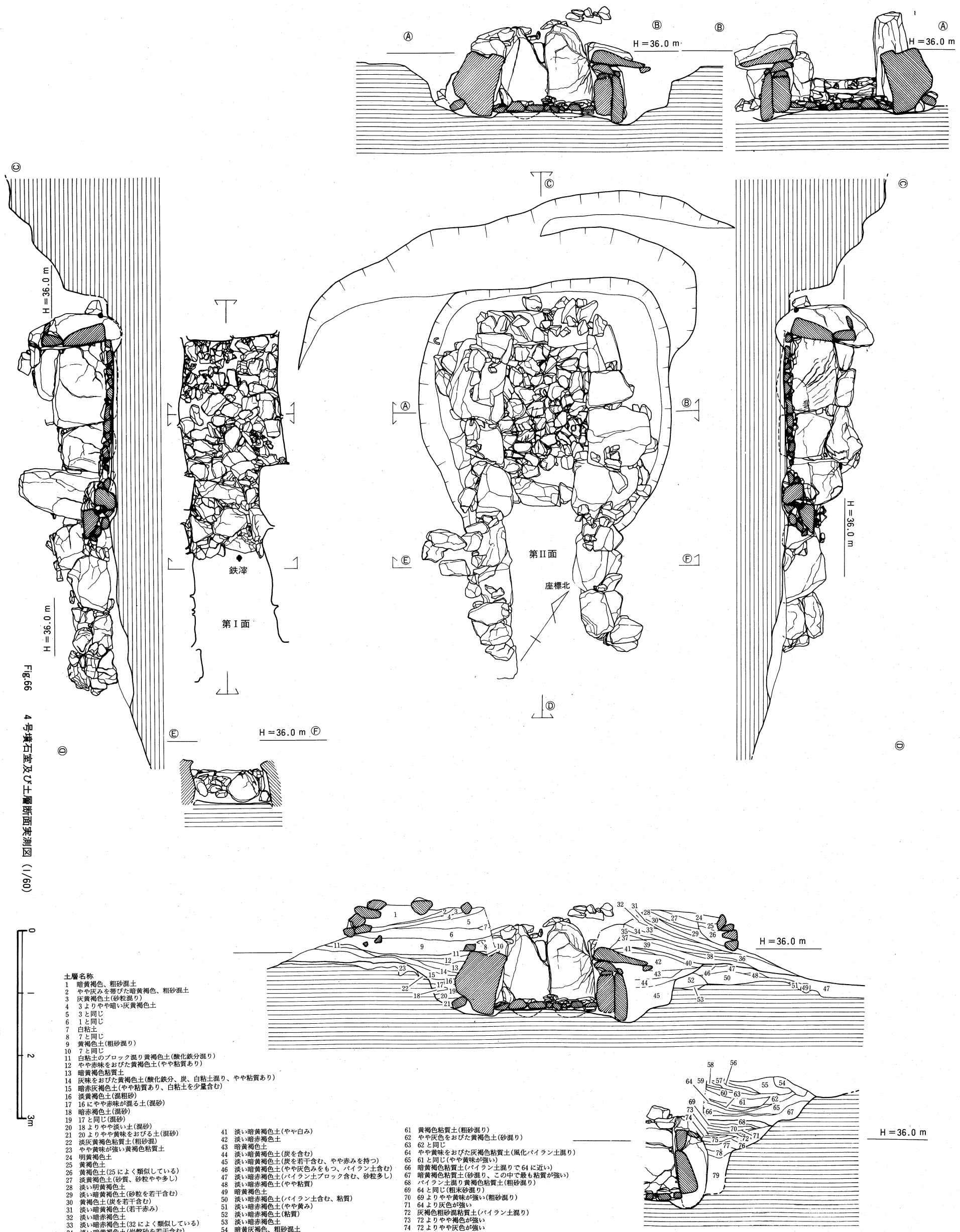


Fig.66 4号墳石室及び土層断面実測図 (1/60)

用し、入口側は小振りの礫を積み上げている。閉塞は玄門部で行なわれたと考えられ、扁平な礫が平坦に積まれている。

外護列石は、墳丘が破壊されていた割には良く残っていた。3列認めることができ、南側から第1列石とすると、第1列石は羨道壁からそのまま接続し、東西に直線的に伸びる。第2列石は墳丘を馬蹄形状に取り囲むもので、前面及び側面は直線的に配列される。後方は円形に巡るとみられるが、全周していたかどうかははっきりしない。現存する石積みは前面で3段、側面で4段程度である。本来はもっと高く積まれていたと考えられ、崩落した石が多数出土している。第3列石は玄室の周囲を円形に取り囲むもので、玄室各壁の構築時における土留、石室の補強に使用されたものとみられる。

墳丘盛土は、3号墳と同様に4層群に分けることができる。石室は基盤の花崗岩バイラン土を掘り込んで設置されており、最下の層群は腰石中位までの埋土である。バイラン土の多く混入した土層である。腰石中位から側壁下端までは粘質土を中心とした土層で硬められている。奥壁側は砂質っぽい細かな層で構成される。側壁から天井石近くまでは、黄褐色系の土層が砂質や粘質土を交えて細かく盛られているが、西側は厚い堆積になっている。上の層群は外護列石と共に砂質の多い土層群が積みあげられ、天井石まで被覆していたものと考えられる。全体の墳丘整形は、さらにもう1層群盛土が施され、外護列石の被覆も計られていたものとみられる。

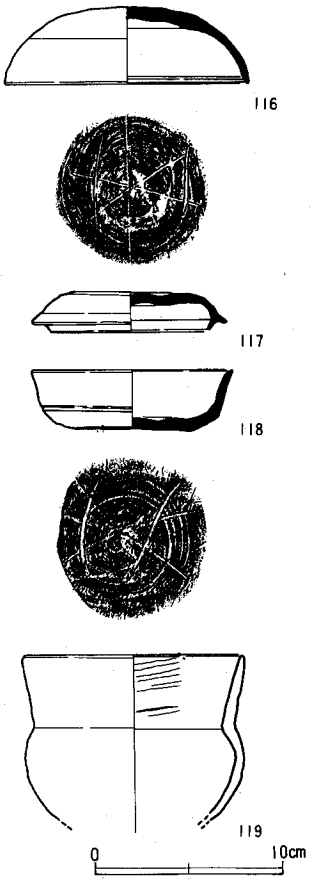


Fig.67　4号墳出土遺物実測図(1/4)

遺物は、玄室内第1面から須恵器坏身・蓋、鉄滓、奥壁左隅の腰石間から鉄製U字形鋤先が出土し、第2面では、須恵器坏、鉄鏃、鉄滓が出土。石室掘方からは鉄製U字形鋤先が出土し、羨道には鉄滓が供献されていた。墳丘からも現位置ではないが供献された須恵器が出土。

116は坏蓋で口縁内側にわずかな段を有する。口径12.8cm、器高4.1cmで、古墳築造以前の包含層から出土。117、118は墳丘から出土した須恵器坏蓋・身である。同じヘラ記号を持つ。119は墳丘盛土から出土した土師器の丸底壺である。ヘラ磨き調整が施され、口径11.5cm。

石室内から出土した須恵器は、第1面が須恵Ⅳb～Ⅴ、第2面がⅣa～Ⅵで、盗掘にあっているので全ての時期を示しているとは限らないが、石室は6世紀末に築造され、7世紀中葉まで追葬や墓前祭が行なわれたものと推察される。

5号墳（Fig.68・69, PL.8）

2号墳の東側に位置する。竪穴状の小石室を有する小円墳である。墳丘の3分の1が未調査区へのびる。墳丘径5.0m、残存墳丘1m弱である。

石室は、長さ1.8m、幅0.5m前後(内法）で、主軸はN－45°－Wである。腰石には長さ0.5m前後の扁平な礫を横位に立てている。側壁は腰石上から2～3段残るが天井石ははっきりしない。墳丘には、僅かながら外護列石が認められる。遺物は、石室内から須恵Vの坏身・蓋のセットが4組以上出土している。追葬が認められない7世紀中葉の古墳である。

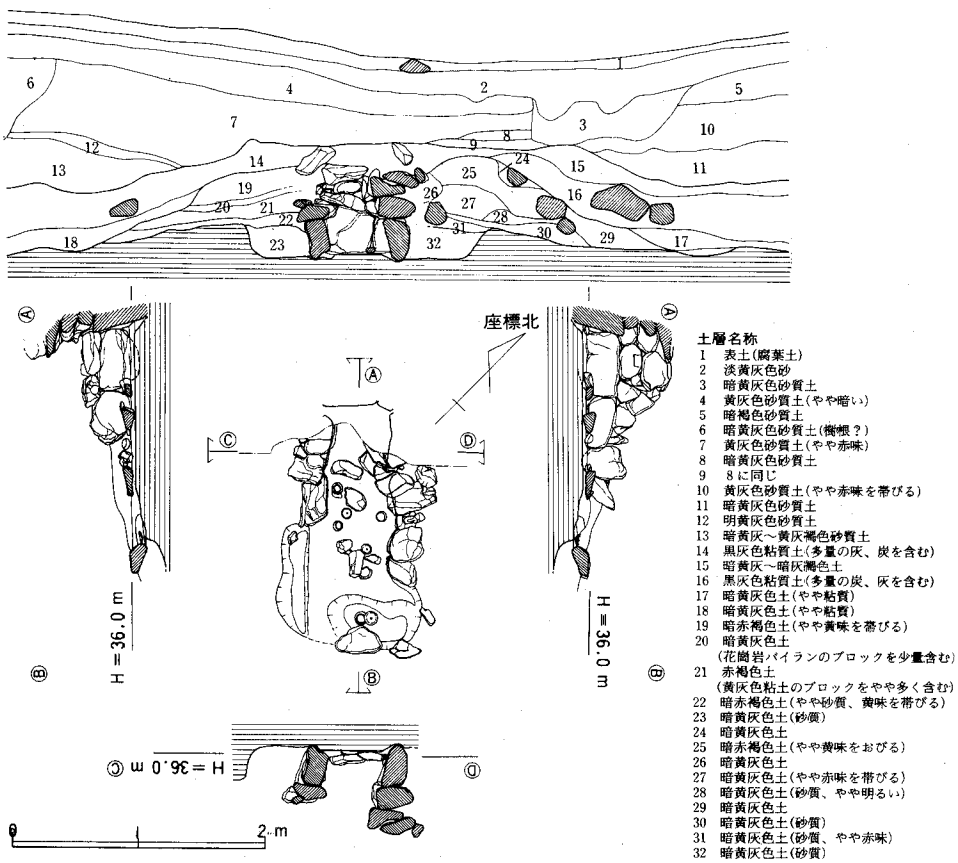


Fig.68　5号墳石室及び墳丘土層断面図（1/60）

Fig.69－120は坏蓋で凝宝珠状のつまみが付く。外径9.4cm、器高2.7cmを測る。121は対になる無高台の坏身で、口径8.4cm、器高3.4cmである。ともに灰白色を呈し、焼成はよくない。

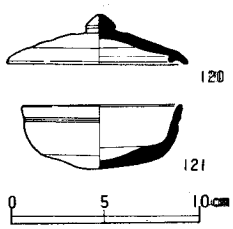
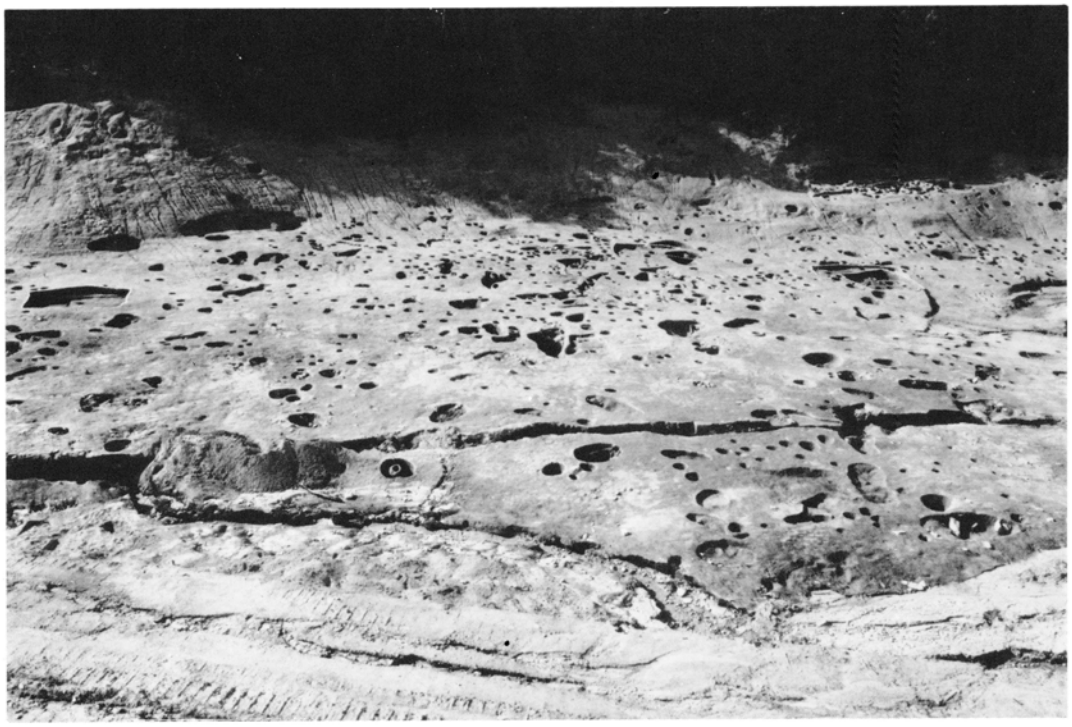


Fig.69　5号墳
出土遺物実測図（1/4）

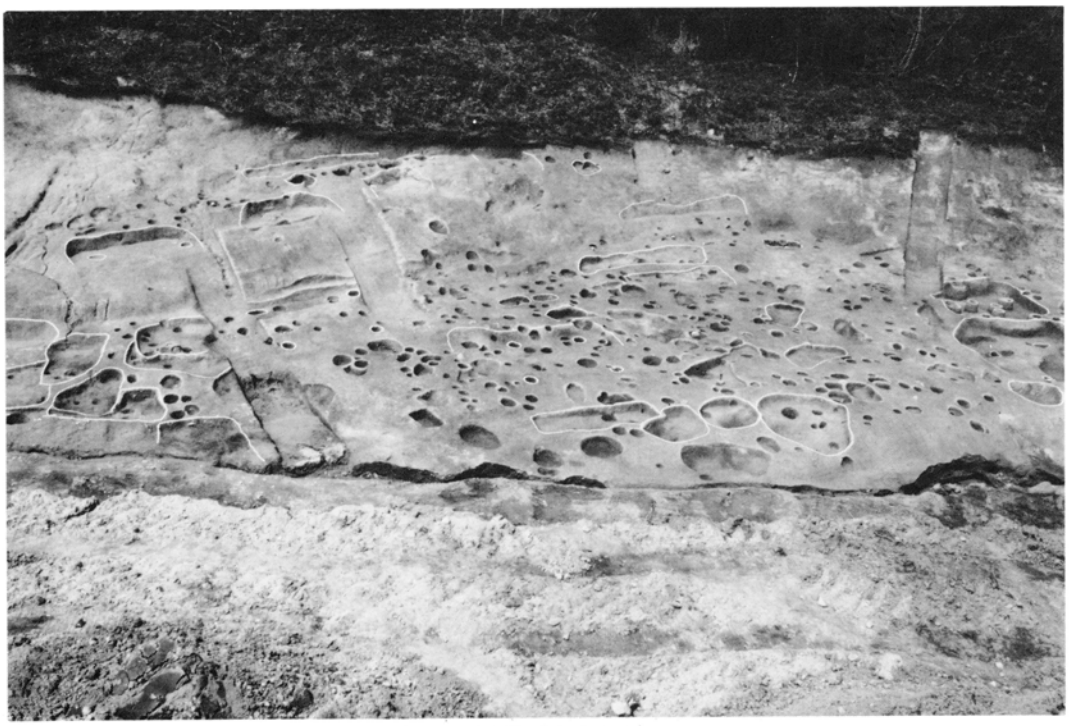
広石古墳群第VI群は、1号墳が支群的な存在であるが、残りは群としてのまとまりは良い。築造順位は2号墳→3号墳→4号墳→1号墳→5号墳となる。2号墳は須恵IIIbの破片が数点出土していることから6世紀後半、1号墳、3号墳は須恵VIaが出土し6世紀末、4号墳が6世紀末～7世紀初め、5号墳が7世紀中葉と考えられる。追葬及び墓前祭は、2号・4号墳が7世紀中葉、3号墳は7世紀後半まで行われている。また広石古墳群第VI群の特徴のひとつは、墳丘に外護列石を持つことである。以後報告する笠間谷古墳群、野方古墳群D群にも外護列石が認められる。

(1)　I 区全景（南東から）

(2)　5 区全景（南から）



(1)　4区全景（南から）



(2)　3区全景（南東から）

(1) I区全景（北東から）

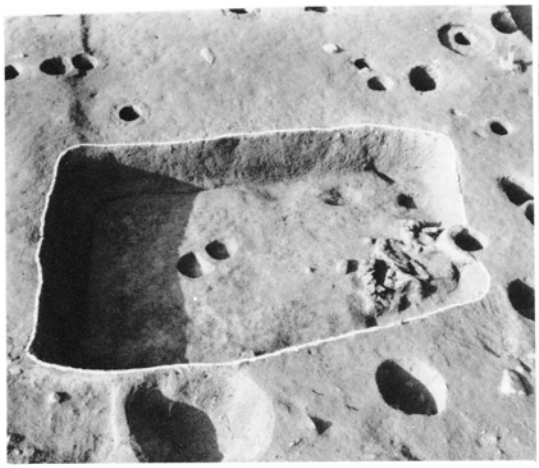
(2) SK142（南から）

(3) SC90(下)・91(上)・92(右)（南東から）

(4) SC52（南東から）

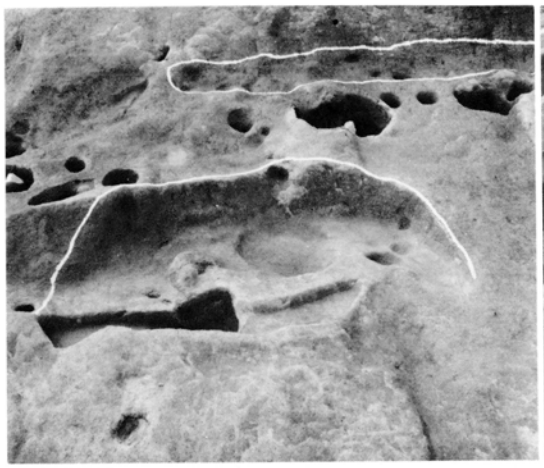
(5) SC152(上)・153(下)（南東から）

(6) SC168（東から）

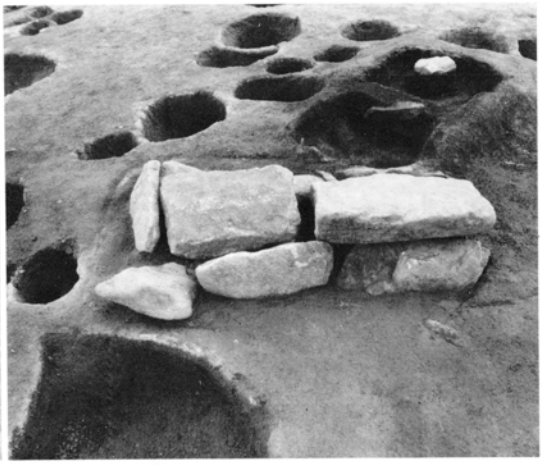


(1) SC77（南東から）

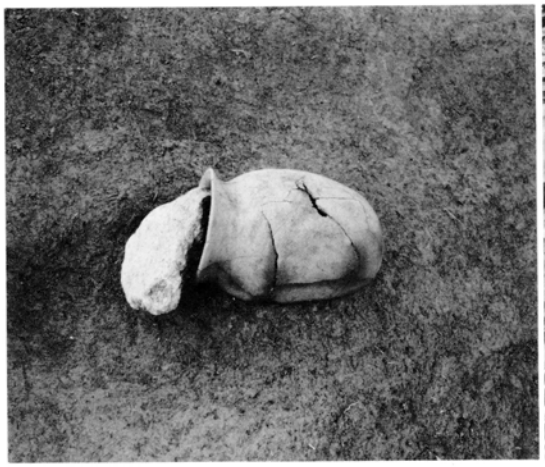
(2) SC34 竈（南から）



(3) SK167（東から）

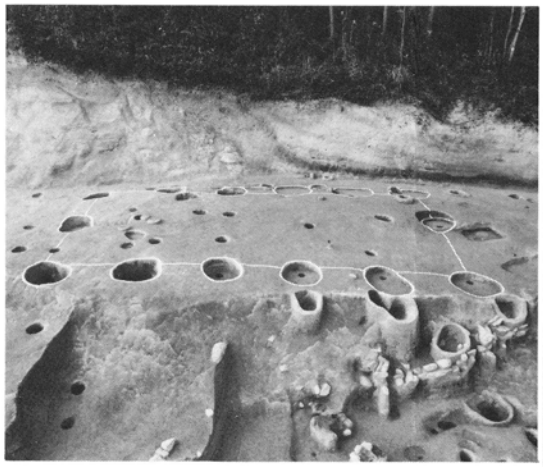


(4) SQ218（北から）

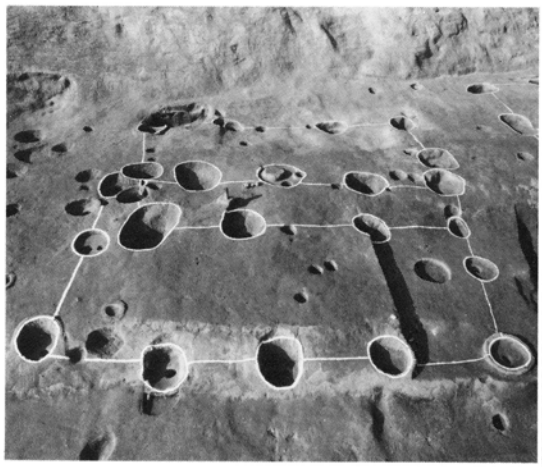


(5) ST274（南東から）

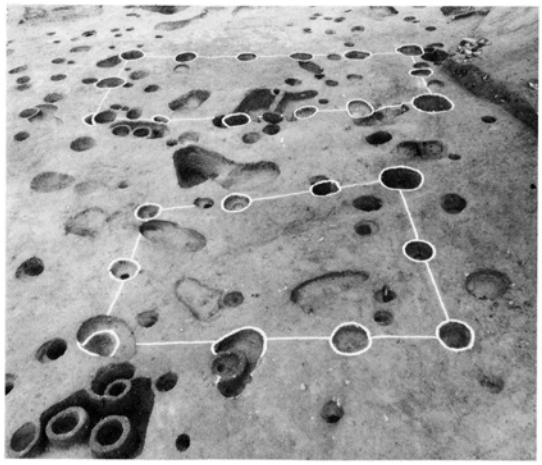
(6) SB73（北東から）



(1) SB73（南東から）

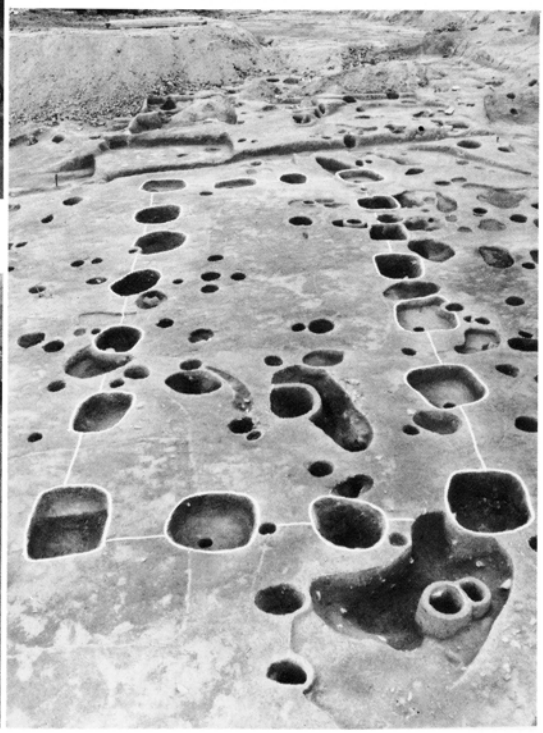


(2) SB71(上)・72(下)（南東から）

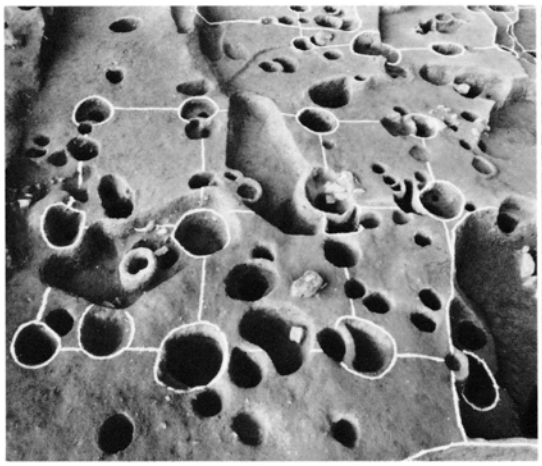


(3) SB201(上)・202(下)（東から）

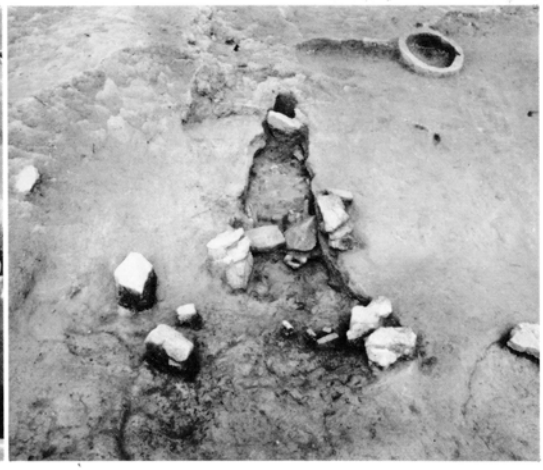
(4) SB70（東から）



(5) SB200（東から）



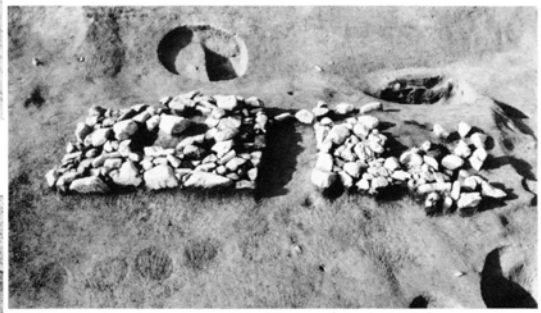
(1) SB76（南東から）



(4) SI-3（南東から）

(2) SK113（南西から）

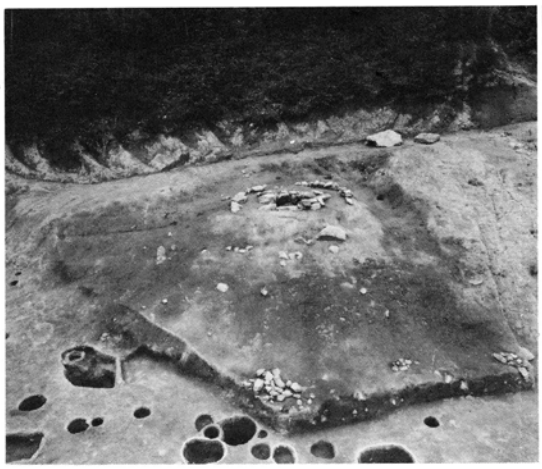
(5) SX7 検出状況（南東から）



(6) SX7 完掘状況（南東から）

(3) SX135（北から）

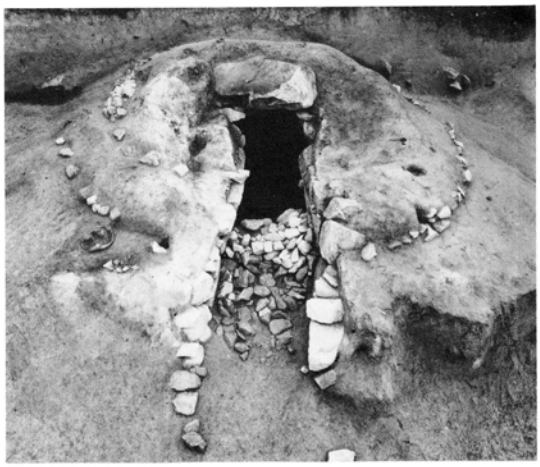
(7) SX7 内部主体（南東から）



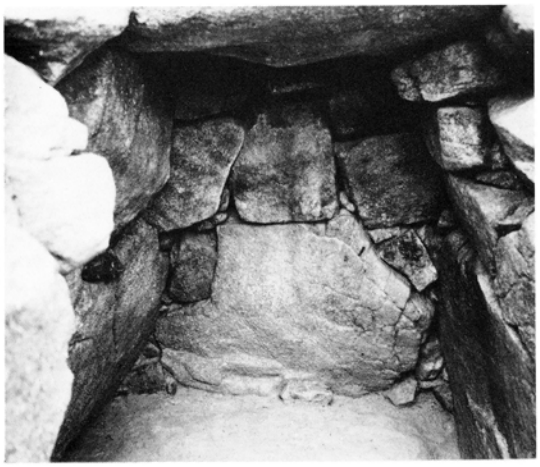
(1)　広石古墳群第Ⅵ群Ⅰ号墳出土状況（南から）

(2)　Ⅰ号墳石室・外護列石出土状況（西から）

(3)　2号～5号墳出土状況（南から）

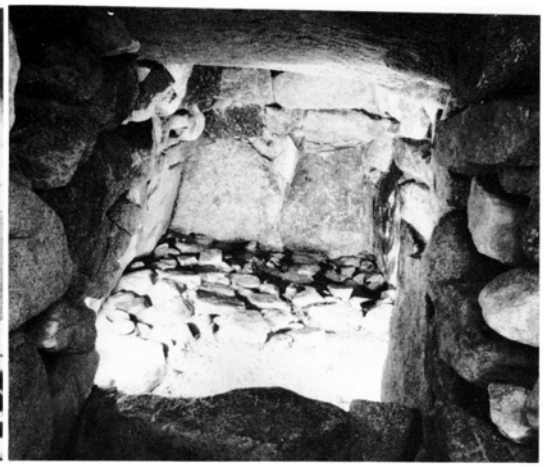


(4)　2号墳出土状況（南から）



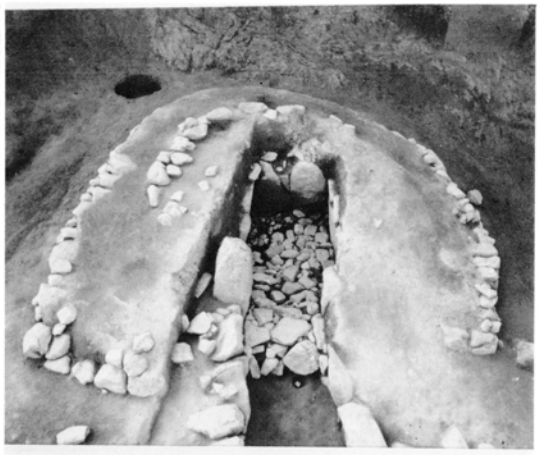
(5)　2号墳石室（南から）

(6)　3号墳出土状況（南から）



(7)　3号墳奥壁（南から）

(8)　3号墳羨道部遺物出土状況（西から）

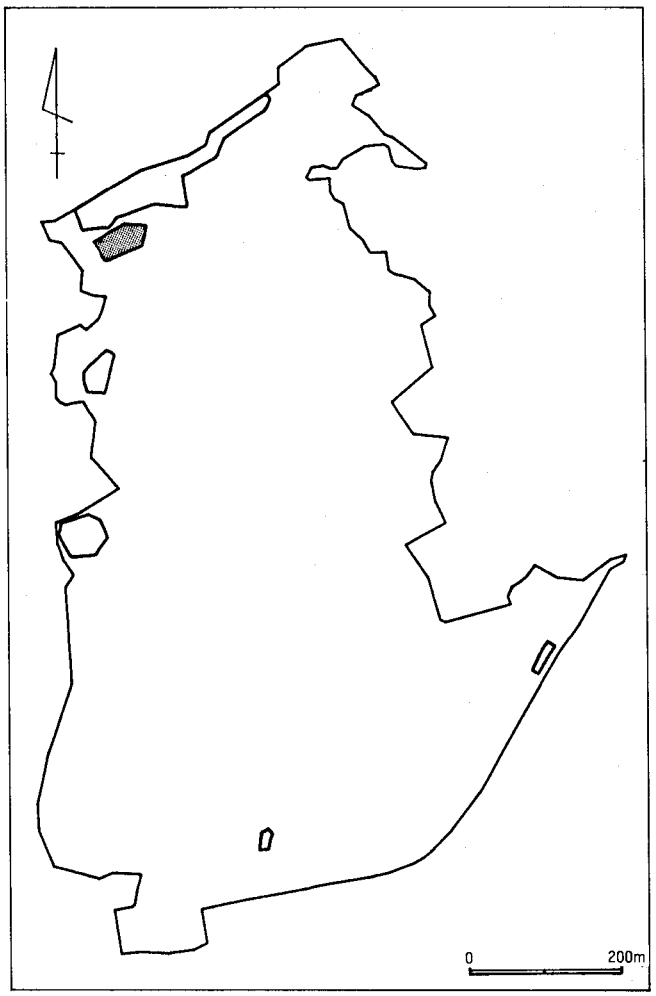


(9)　4号墳出土状況（南から）

(10)　4号墳石室出土状況（敷石第2面）（西から）

(11)　5号墳出土状況（南から）

2．広石遺跡群D地点・広石古墳群Ⅶ群
（第２地点）



遺跡調査番号	８７２１		遺跡略号	ＨＲＤ－１・ＨＩＫ－７	
調査地地籍	西区大字野方字名切谷		分布地図番号	１０４	
開発面積	60ha	調査対象面積	1,100㎡	調査実施面積	1,724㎡
調査期間	1987年６月29日～1987年10月09日		事前審査番号	58－１－170	

2　広石遺跡群D地点・広石古墳群Ⅶ群（第２地点）

調査の概要

本調査区は叶岳の東麓、北東に延びる小支丘群のひとつ、名切谷川によって開析された標高49～61mの低丘陵の北西斜面に位置している。斜度22～28°の急斜面と７～８°の中位段丘上に立地しており、名切谷川をはさんで広石遺跡群Ｃ地点（第１地点）に相い対している。

表土下30～150cm程で遺構検出面の花崗岩バイラン層～黄灰色砂礫層に達する。上部に黒灰～暗灰色土、下部に暗褐～黄灰色土の遺物包含層がある。

検出された遺構は旧石器～縄文時代早期頃の集石炉１、縄文時代と思われる土壙７（SK36・37・38・39・47・48・49）、古墳時代後期の竪穴住居址５戸（SC28・41・50・51・52）、焼土を有し溝を巡らす等の地山整形部８（SX15・25・26・27・32・54・55・62）、土壙７（SK01・02・09・10・24・43・60）、甕棺１、古墳１基、古墳時代後期～奈良時代の掘立柱建物５棟（SB64・65・66・67・68）、焼土壙16基（SK05・13・16・21・22・23・29・30・34・35・40・42・44・45・46・53）である。

丘陵斜面は主に古墳と甕棺、祭祠土壙（SK01・10）とによって墓域を形成しており滑石製勾玉２点を検出している。

掘立柱建物は竪穴住居址を切っており、これより後出すると考えられ、方位と重複関係から２時期にわたると考えられる。焼土壙は上部包含層下から、竪穴住居址等は下部包含層中から検出され、これらより後出する。

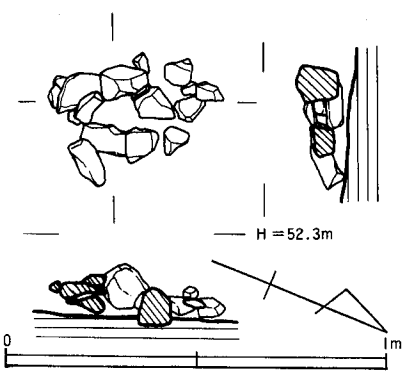


Fig. 1　SH20 実測図（1/20）

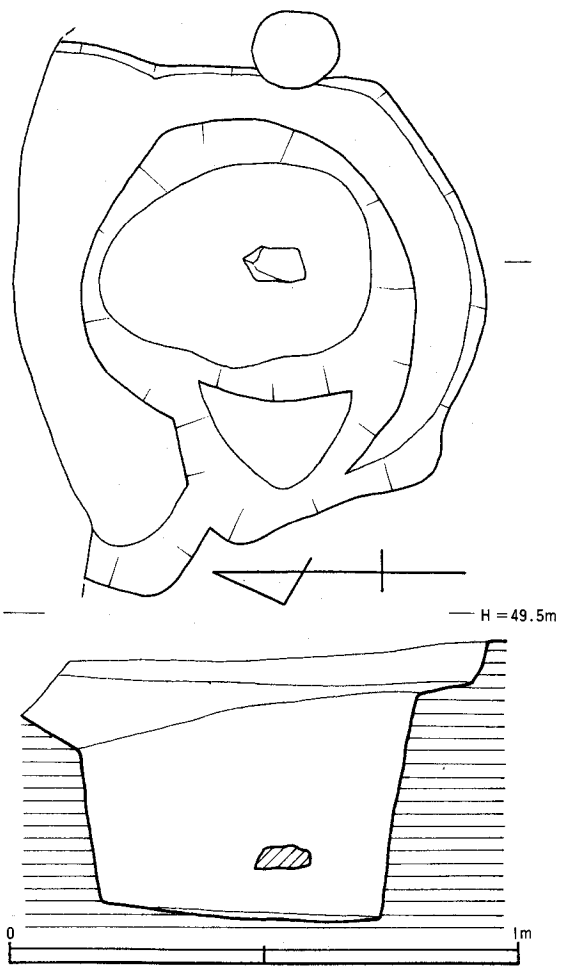


Fig. 2　SK38 実測図（1/40）

Fig. 3　　遺構全体図（1/300）

(1) 遺構

集石炉 SH20 (Fig.1)　SH20 は B3 グリッドの平坦部、黄灰色土中で検出された。5～10cm 程の花崗岩の自然礫が20個弱、平坦に寄せられ、いずれも火熱を受け黒ずむか赤く発色している。遺物の検出がなく時期の確定は難かしいが、旧石器～縄文時代早期と思われる。

土壙　Z8～B5 グリッドの斜面裾部分にかけ 7 基分布しており、円形（SK36・38・39）と方形（SK37・47・48・49）の 2 種類が有る。規模は円形が1.1～2.2m、方形で1.5～2.2m深さは 0.4～ 1 mを測かる。底面にピットを有するもの（39）と20cm程の礫を検出するもの（36、37、38、47、48）が有る。SK37 で古代の内黒土器 2 片が混入するのみで遺物の検出はないが、覆土は黄灰色土、黄灰色シルト質土で、第 1 地点の例を勘案すると縄文時代早期の可能性が高い。集合する有り方やピット、礫の検出などから落とし穴と考えられる。

竪穴住居址　5 戸（SC28・41・50・51・52）検出しており、IIIB期－SC41・50、IV期－52・51の 2 時期に分けられる。主軸を N－77～88°－E にとり丘陵陵線に平行するもの（28・41・52）と N－61°－W の 2 グループが有る。平面プランは長方形で長軸を東西方向にとる。4 本柱に竈・壁溝と定型化されたものが多く第 1 地点に比べ全体的に古い印象を受ける。

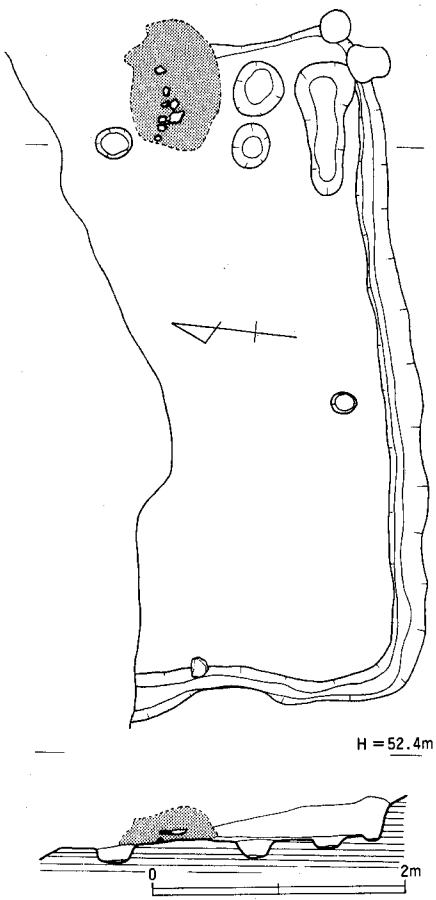


Fig. 4　SC28 実測図（1/60）

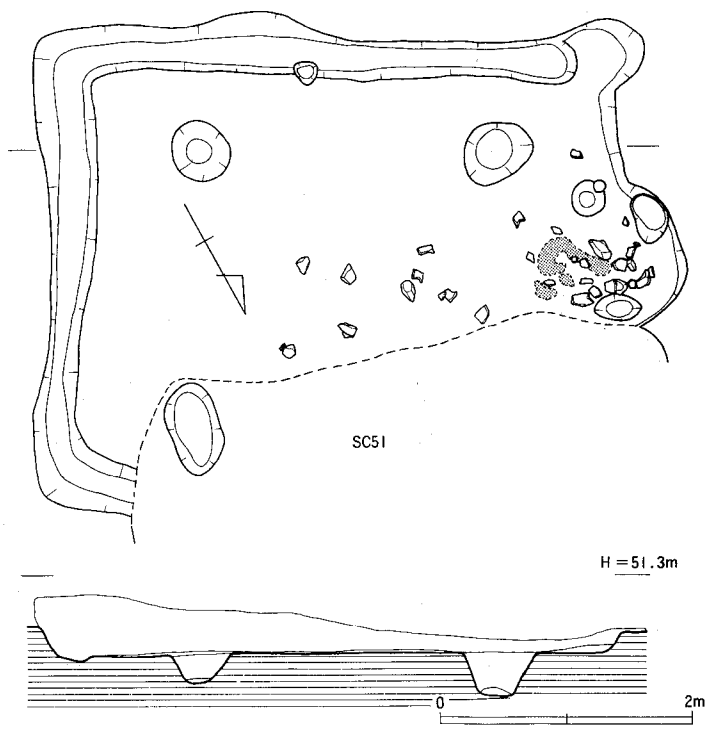


Fig. 5　SC50 実測図（1/60）

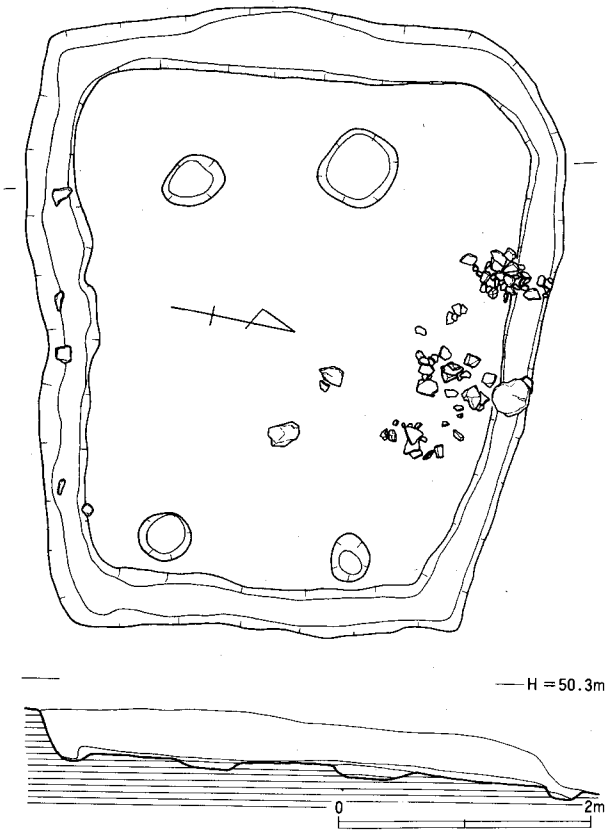


Fig. 6　　SC52 実測図（1/60）

SC28（Fig.4）　B－4～5 グリッドに有り北半をトレンチに切られるが、東西で5.3mを測かる。竈は東側中央にもうけられ土師器甑・甕を検出する。主柱穴が明確でなく、A'タイプとなる。焼土壙 SK16 に切られる。

SC50（Fig.5）　A～B2 グリッドに有り、他の住居と異なって主軸を N－61°－W にとる。ⅢB 期の須恵器坏を検出しており、同方向をとるⅣ期の坏を検出する SC51 に切られる。長辺で4.6短辺で3.9mを測かる 4 本柱で北東側の短辺の中央に竈をもうけている。竈をもうける壁以外の三壁に壁溝がめぐるが、南壁の壁溝の先端の延長部分の壁隅が丸く抉れており、SC51 も同様のプランで特色となっている。

SC52（Fig.6）　A6 の交点に有り、東西 5 m、東壁3.1m、西壁4.3mの台形のプランを持つ。土器は北壁の中央部にまとまっており、竈がこの部分に有った可能性もある。4 本柱で東西で柱間2.8～3.2m、南北で1.2～1.5mを測かる。壁溝は四周をめぐっており、定型化された住居である。焼土壙 SK42 に切られる。

掘立柱建物　資料の検討不十分であるためまだ多数の建物が有ると思われるが、現場で確認し得たのは 5 棟（SB64・65・66・67・68）である。SB68 が 2 × 2 間の総柱の他は 3 × 4 間～ 2 × 2 間の側柱の建物である。長軸を N－79°～85°－E にとるもの（SB64・68）と N－54～60°－E の地形に沿うもの（SB65・66・67）の 2 つのグループに分けられる。SB68 が竪穴住居 SC41 を切っており、これに後出する様である。

SB64（Fig.7）　B2 グリッドに有り、3 × 4 間、4.4×5.2mで最大である。桁行を N－85°－E の方位にとる。柱穴掘方は小さく30～50cm、柱穴は径20cmを測かる。

SB68（Fig.8）　A4 グリッドに有る 2 × 2 間、3 ×2.5mの総柱建物で、SB64 に近い N－79°－E に桁行をとっており、SB68 とは主屋と倉庫の関係かと思われる。掘り方は結構大きく径60～80cm、柱径は20～25cmを測かる。

SB66（Fig.9）　B～C3 グリッドに有り、2 × 3 間、1.9×3.5mを測かる。桁行を N－60°－

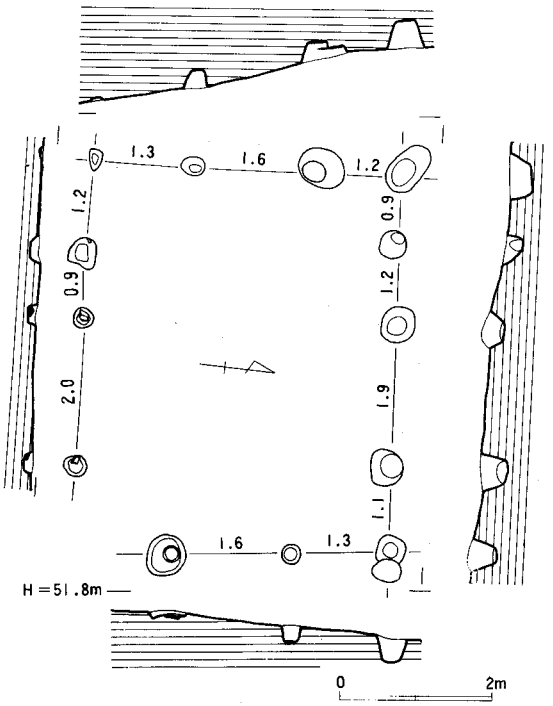


Fig. 7　　SB64 実測図（1/100）

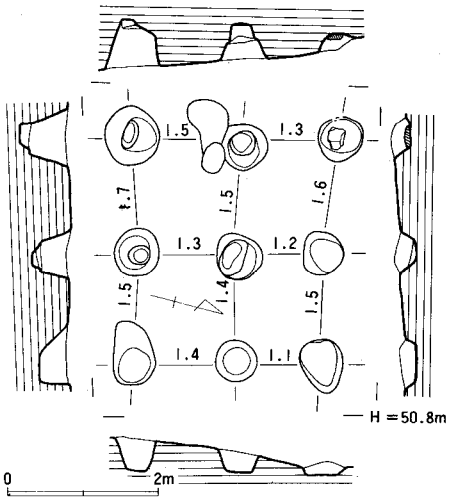


Fig. 8　　SB68 実測図（1/100）

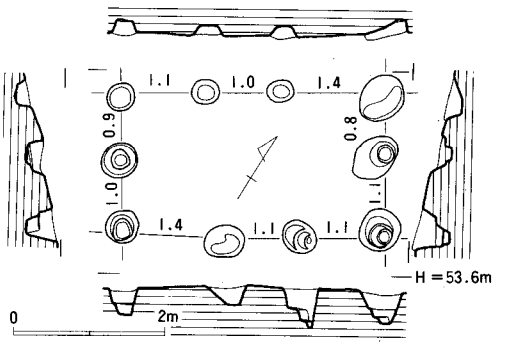


Fig. 9　　SB66 実測図（1/100）

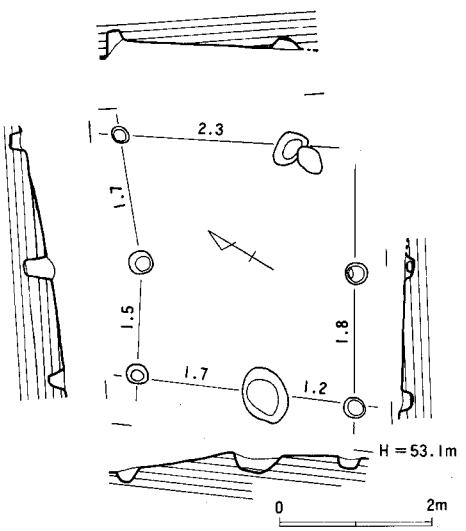


Fig. 10　　SB67 実測図（1/100）

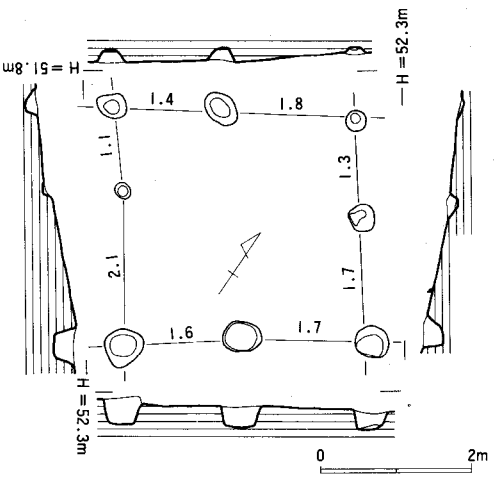


Fig. 11　　SB65 実測図（1/100）

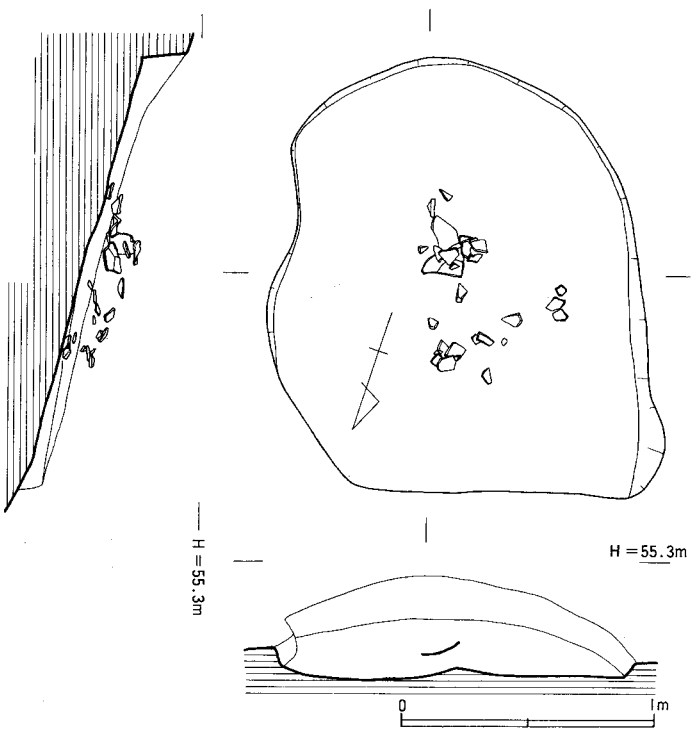


Fig. 12　SK10 実測図（1/30）

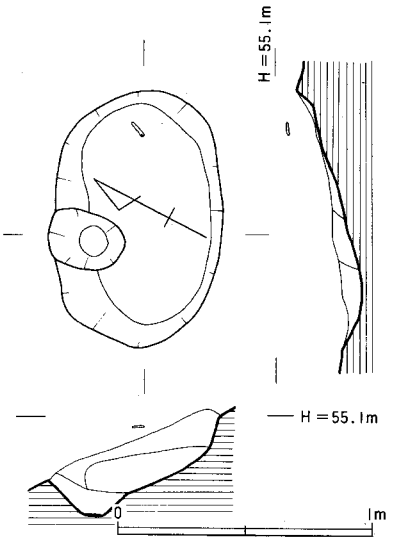


Fig. 13　SK01 実測図（1/30）

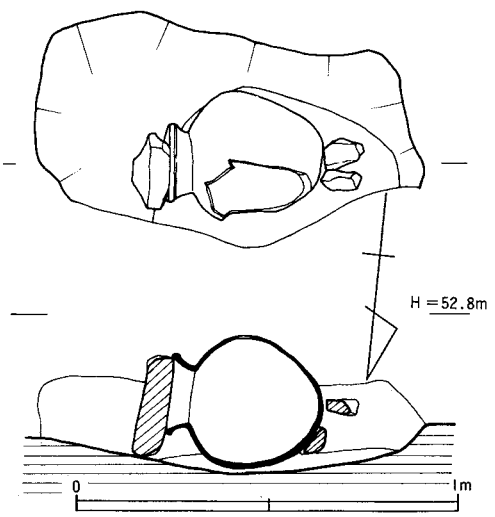


Fig. 14　ST03 実測図

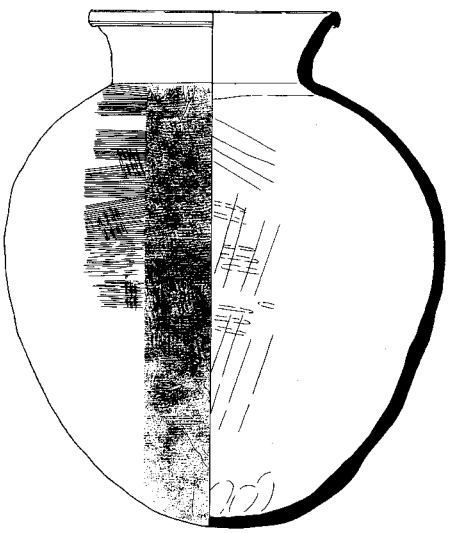


Fig. 15　ST03 甕実測図（1/6）

Eにとる。柱間が0.8～1.4と狭く、倉庫の可能性も考えられる。

SB67（Fig.10）　B4グリッドに有り、桁行2間・梁行2間の3.2×2.9mの規模で柱列の乱れが目立つ。桁行の方位をN－55°～59°－Eにとり、SB66を中にはさんでSB65と対称の位置に

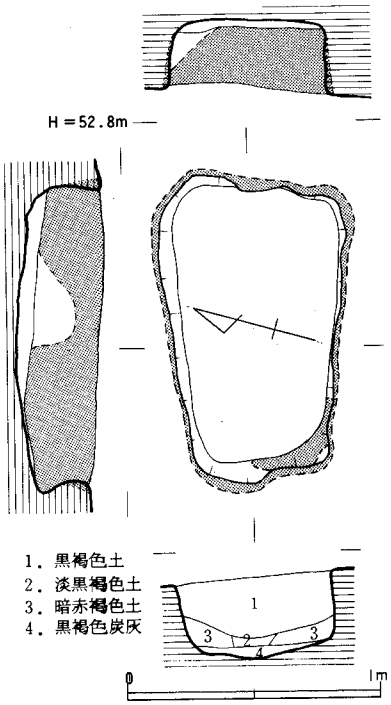


Fig. 16　SK13実測図(1/30)

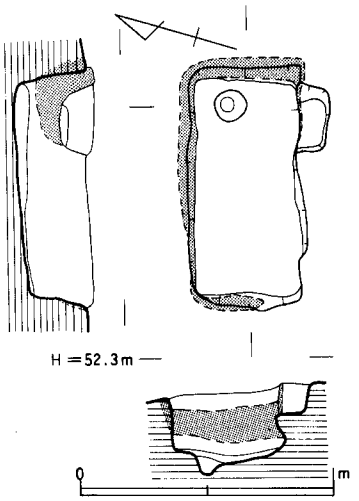


Fig. 17　SK30実測図(1/30)

有る。掘方は全体的に小さく径25～30cmを測かる。

SB65 (Fig.11)　B2グリッドに有り、SB64と重複する。2間×2間、3.3m×3.0～3.2mの規模で、方位をN－54°－Eと、SB67と極めて近く、SB66を中に置いて緊密な関係に有ったものと思われる。

祭祠土壙　SK10 (Fig.12)　C5グリッドの斜面上に位置し、Ⅶ－1号墳をはさんでSK01と対位置に有る。1.8×1.5mの浅い土壙で覆土は暗灰色土である。内部には、木目直交の平行叩きを施す特異な土師器甕（Fig.19－1）1個が破砕された状態で検出されている。

SK01 (Fig.13)　C3グリッドに有り、長軸は陵線に平行する。1.1×0.65の楕円形の土壙で内部より底から10cm程浮いた状態で滑石製の異形勾玉（Fig.19－5）を1点のみ検出している。

甕棺 ST03 (Fig.14・15)　C3グリッドでSK01の3m程斜面の上方に位置している。主軸をN－78°－Eにとる0.55×1.0mの方形土壙内に口径19.2cm、器高41cmの赤焼き須恵器の甕を口を東に横位に置き20cm四方の花崗岩の板石で蓋をする。主体の甕(Fig.15)は玉縁状の口唇に肩の張る倒卵形の胴部を有する甕で胴部外面は木目直交縦位の平行叩きを施した後、粗い横位のカキ目を施す。内面は上半は同心円叩きを縦方向の指ナデでナデ消し、下半は横位の平行叩きをナデ消しており、別個に成形した上半、下半を接合している。

地山整形部　斜面裾部と平坦部西側に8ケ所造成されている。尾根側を高さ0.4～1.5m程60°前後の急勾配で削り込み平坦部を造り出し、壁溝をめぐらすもの（SX15・25・55）と焼土部分を有するもの（SX26・32・55）が有り、甕や甑等の日常雑器を多く検出している。生活遺構と考えられるが、これに伴う柱穴が判然とせず上屋の有無を明確にし得ないが、粘土が赤変する程の火を用いており、小屋掛け程度の上屋の存在は考えられる。ⅢB～Ⅳ期の須恵器を伴出するが、ⅢB期が多くを占める。滑石製紡錘車の出土も目立つ。SX26・54では鉄鎌と鉄滓42gを検出しているが、鉄滓の検出は全体で1ケ所のみで遺跡の性格は広石C地点と大きく異なる様である。

焼土壙 (Fig.16・17)　調査区全域に展開しており、16基を確認している。竪穴住居等の古墳

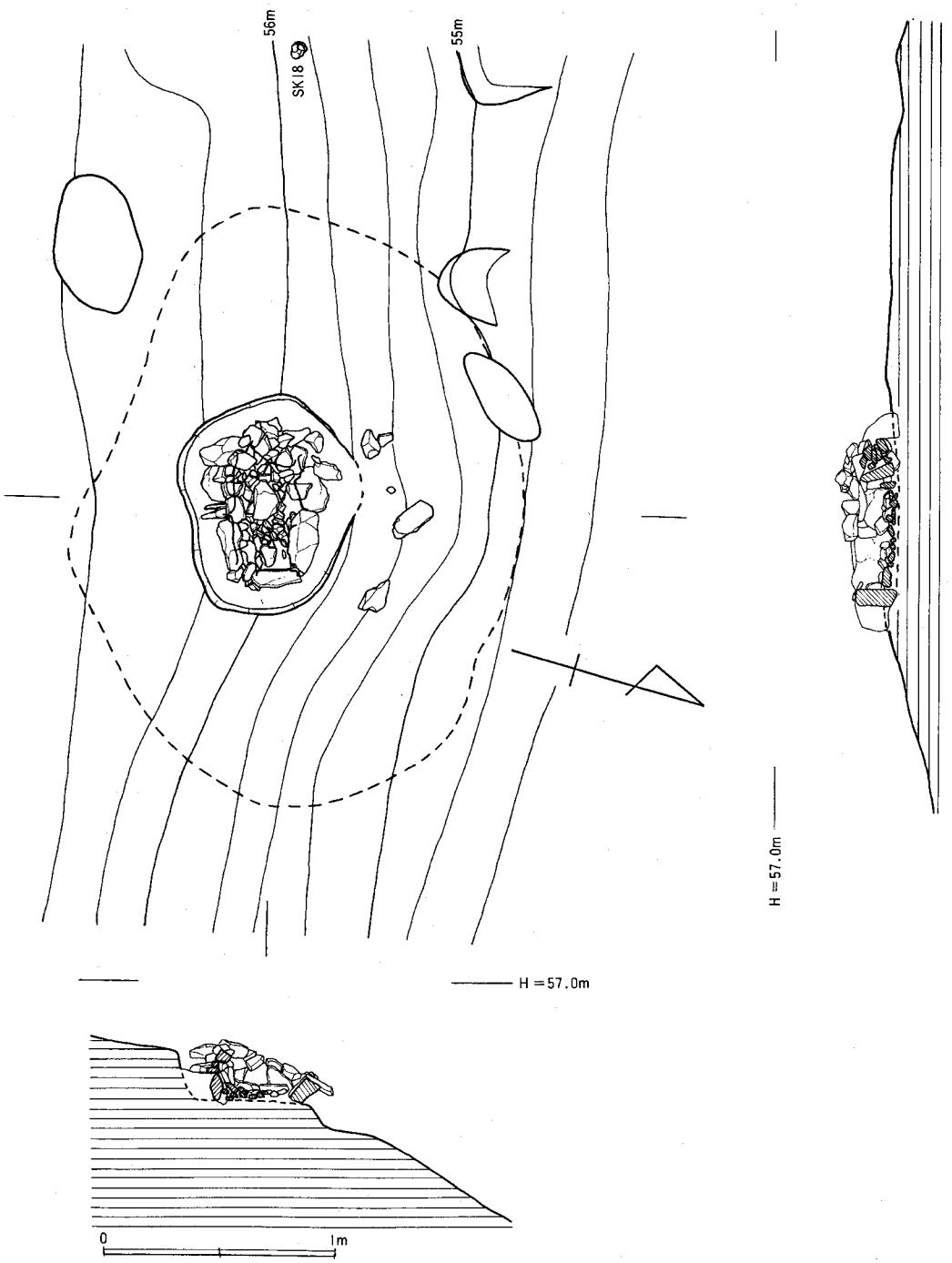


Fig. 18　　Ⅶ群１号墳実測図（1/60）

時代後期の遺構の検出面より5～20cm上方の黒灰色の上部包含層下で検出され、SK16・42・53はこれらを切っており、第1地点の成果を勘案するとほとんどが古代に属すると思われる。方位は稜線に直交するもの（SK34・45・53）斜行するもの（SK16・35・40）が有るが6割以上は稜線に平行する。四壁に粘土を貼るもの（Fig.16）と素掘りのもの（Fig.17）とが有るがいずれも5cm前後焼けており、床上5～10cm程炭粒が堆積する。

Ⅶ群1号墳（Fig.18）　C4グリッドの丘陵斜面、56mの等高線近くに単独で位置している。斜面の立地であり、墳丘も径が3m弱と小規模であるため、墳丘の流失が激しく、石室の一部は概に表土上に露出しており、石室検出当初は中・近世墓と誤認した程である。

地山整形も大半が流れており微妙に平坦部が残る程度であるが、石室掘方の上半で等高線に沿って長さ5m幅1m程のテラス状の平坦部が削り出されている。墳丘盛土は全く残っておらず、十字にトレンチを入れ確認してもみたが地山の黄灰色土との識別はできなかった。墳丘の規模も地山整形によって削られた底部と石室部分との比高20～30cmの微妙な変化で推定できる程度で東西3m、南北2m程の円墳と思われる。墓壙は0.7×1m程の楕円形で尾根側で深さ20cm程を残すが谷側では流失しており、石室側壁も若干動いている。埋葬主体は横口式の小石室で主軸をN－75°－Eにとる。内法50×30cmの長方形のプランで奥壁は28×20cmの一枚で側壁は同程度の腰石を3個並べ上に小礫を2段小口に積んでいる。開口部は10×18cm程の板石を3個並べて壁としており、裏を小礫で埋めており、閉塞が壁を兼ねている。床面には5cm前後の礫を敷きつめている。遺物の検出はない。

(2)　**遺物**（Fig.19）　1はSK10より出土した土師器甕で口径21.6cm、胴径29cmを測かる。しまった頸部から口縁はゆるく長く外反し口唇部は凹線が施され、その上端は跳ね上がり気味に整形される。胴上半の外面は木目直交の縦位の平行叩き後カキ目、内面は縦方向の指頭圧状のくぼみに細かな平行弧線が見られる。胴下半は斜位から横位の平行叩き後粗いカキ目調整・内面はやや巾広の平行弧線の当て具痕が見られる。器壁は薄く色調は桃黄～桃色を呈する。4も同系統の土師器甕でSC28出土。口径17.6cmと若干小振りで、口は大きく開き、短く外反するが造作は1と同様である。頸部外面は強くナデられて段を成し以下に木目直交の横位の平行叩きを施す。内面は器表の荒れが著しく細かな調整不明だが、指頭圧状のくぼみが残る。胎土は砂粒を多く含み桃色の発色を呈しており製塩に供された可能性が高い。1に類似のものは市域では五十川3次調査の6世紀後半SC07[註1]の竈内から、7世紀前後の下和白塚原古墳群山ノ下支群1号墳[註2]の墳裾から、後期で同様の叩きを有する土師器としては広石古墳群Ⅱ－1号墳石室[註3]から、吉武K8号墳石室[註4]から出土している。これらに先行して吉武遺跡群の5世紀中頃～後半の土壙・溝[註5]から、有田遺跡群30次地点3号土壙[註6]から同様の叩き、口縁部を持った半島軟質土器系のものが出土しており、これら軟質系土器の強い影響下に成立し、強い伝統を残しながらその一部が製塩に供され、古代の「玄海灘式製塩土器」へと続く系譜の特異な土師器の一部に位置していると考えられる。2は1号墳の地山整形部付近で出土。5～10は滑石製品、11はメノウ12は軟玉の玉である。

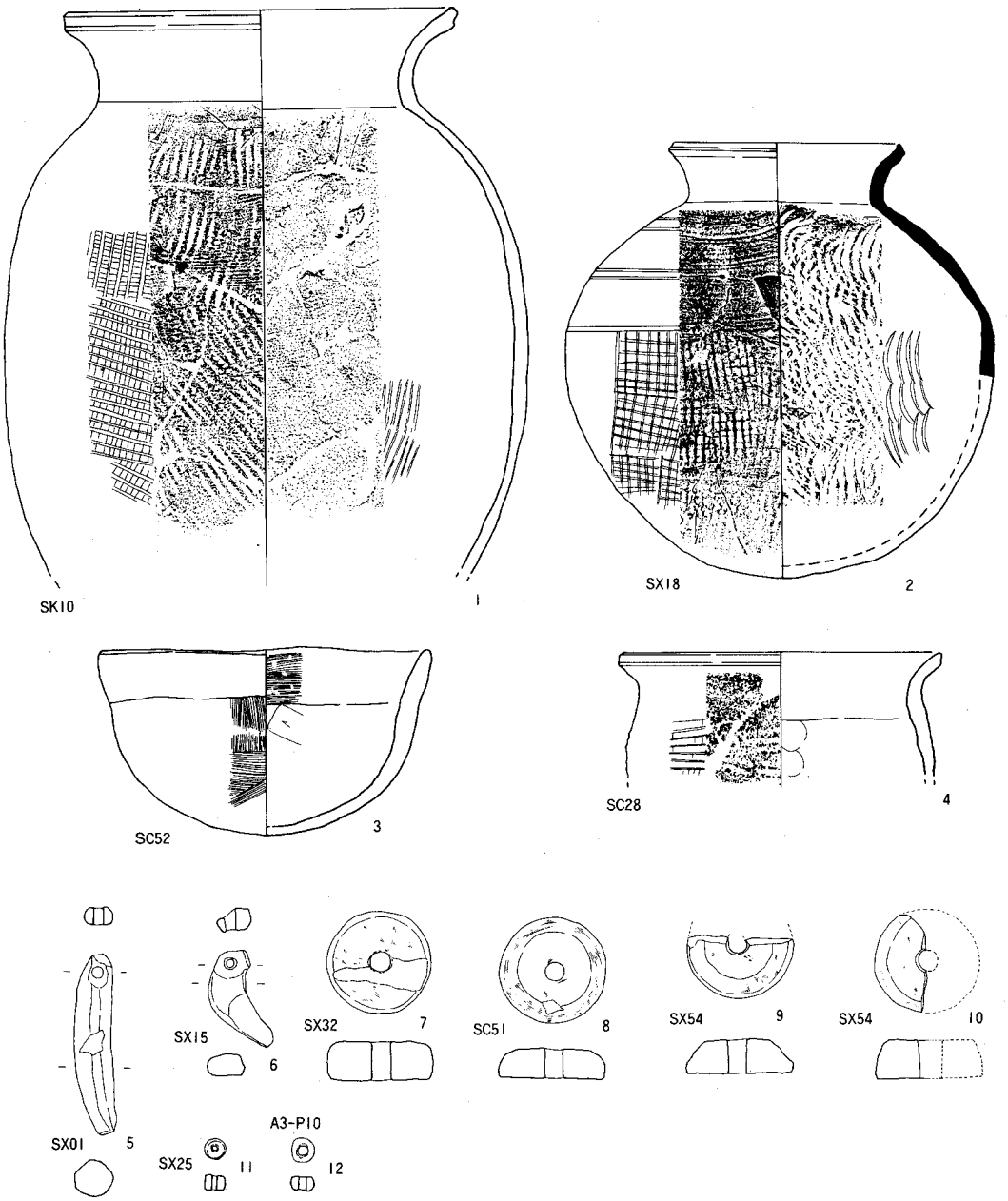


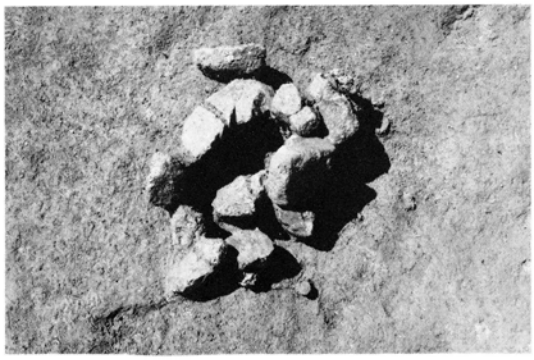
Fig. 19　出土遺物実測図（1/4、1/3）

（註１）「福岡市中部地区埋蔵文化財調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第111集　1984年
（註２）「下和白塚原古墳群」　同55集　1980年
（註３）「広石古墳群」　同41集　1977年
（註４）「重要遺跡確認調査Ⅰ」　同68集　1981年
（註５）「吉武遺跡群Ⅰ」　同127集　1986年
（註６）「有田・小田部第５」　同110集　1984年　1988年の下水調査でも検出報告未刊

(1) 調査区全景（北から）

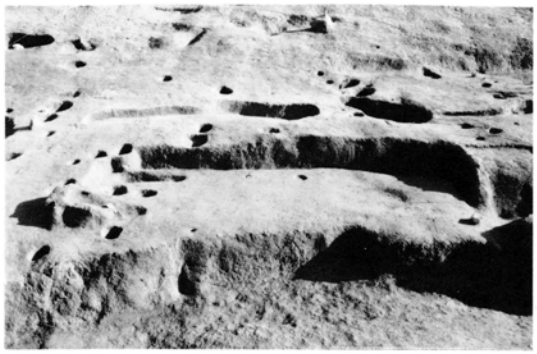
(2) 調査前風景（北から）

(3) 調査区西半全景（南から）

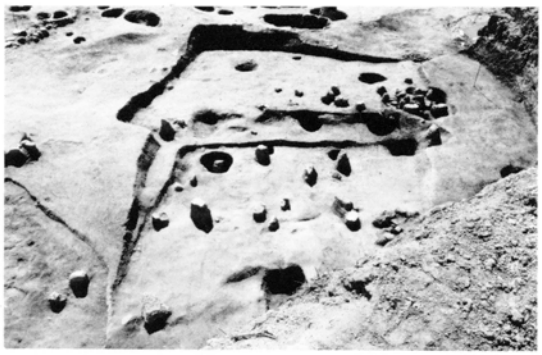


(4) SH20（北西から）

(5) SK38（北から）



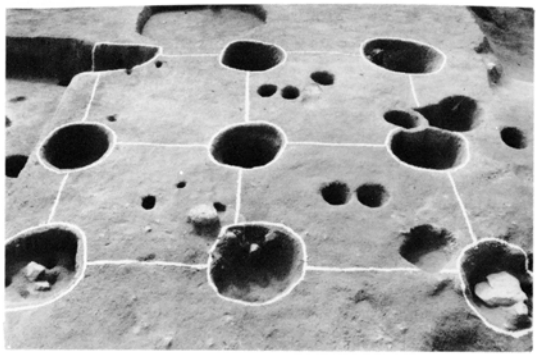
(1) SC28（北から）



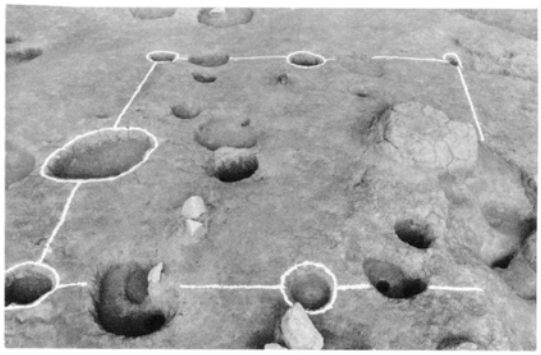
(2) SC50・51（手前）（北から）

(3) SK42（中央）・SC52（南から）

(4) SB64（手前）・SB65（北東から）



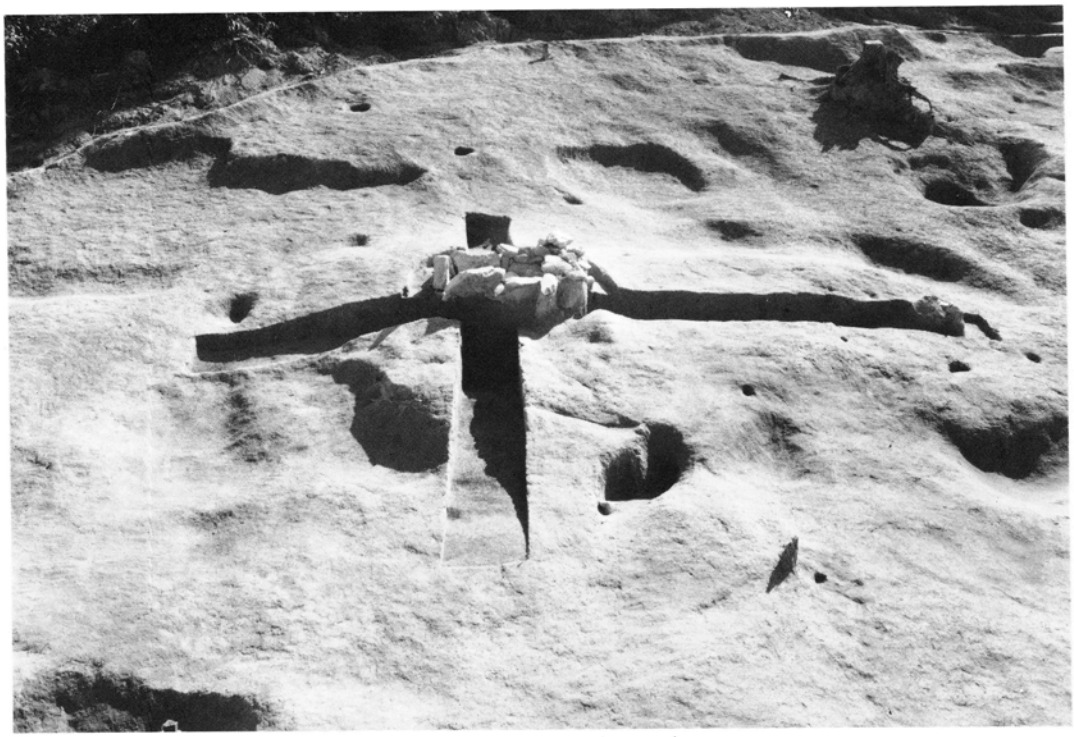
(5) SB68（南から）



(6) SB67（南から）

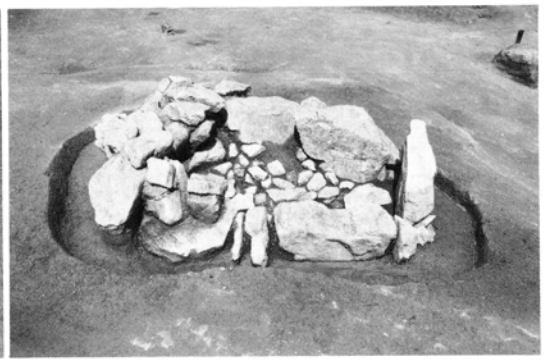
(7) ST－03（北から）

(8) SX54（北から）



(1) Ⅶ－Ⅰ号墳全景（北から）

(2) Ⅶ－Ⅰ号墳検出状況（南から）

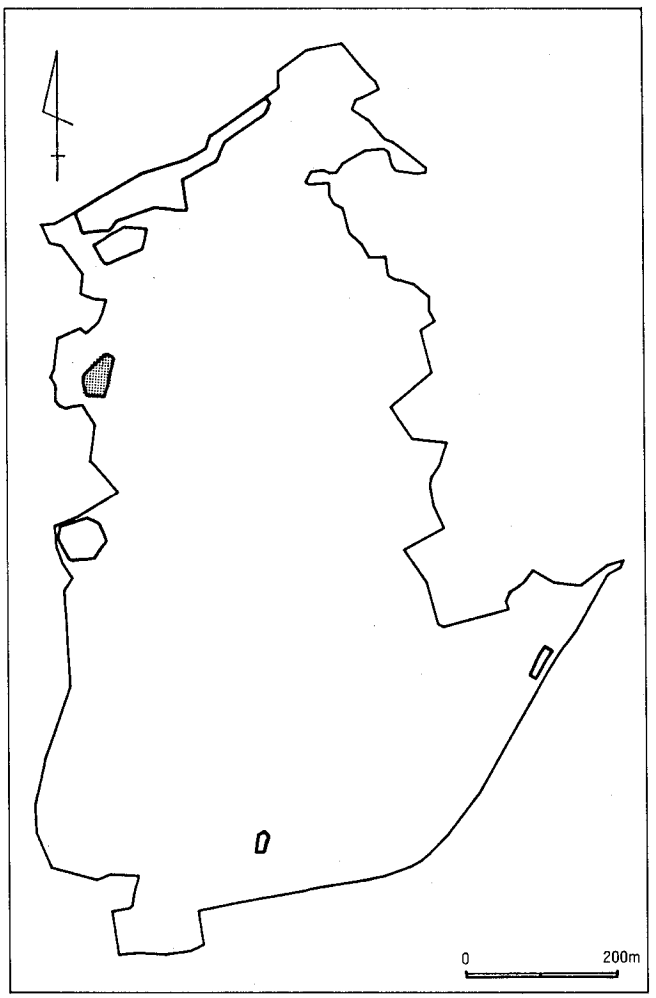


(3) Ⅶ－Ⅰ号墳石室完掘状況（南から）

(4) Ⅶ－Ⅰ号墳石室完掘状況（北から）

(5) Ⅶ－Ⅰ号墳石室内（北から）

3．名切谷遺跡
(第３地点)



遺跡調査番号	８７１０		遺跡略号	ＮＲＤ－１	
調査地地籍	西区大字野方字名切谷		分布地図番号	１０４	
開発面積	60ha	調査対象面積	1,500m²	調査実施面積	658m²
調査期間	1987年６月12日～1987年７月18日		事前審査番号	58←１－170	

3　名切谷遺跡（第３地点）

調査の概要

本調査区は開発域の中央部の山際、叶岳から北東へ延びる小支丘の南東側、標高57～66mの斜度21～66°の急斜面と９～10°の緩斜面に立地している。

現状は山林、表土下30～80cmほどで遺構面に達する。暗灰色土と黄灰色土の上下２層の包含層が有る。検出された遺構は旧石器～縄文時代早期にかけての集石炉１、集石１、古墳時代後期の地山整形部分４ケ所、方形石組炉２、古墳時代後期～奈良時代の焼土壙３基である。

遺物は主に緩斜面部分と地山整形部から検出されておりコンテナ５箱分。石組炉を配する地山整形部付近の包含層より耳環を１、緩斜面包含層から鉄滓が溶着した精練炉か鍛冶炉の炉体と思われる焼土と鉄滓を少量検出しており、付近に古墳時代～奈良時代の製鉄遺構の存在が考えられる。

(1)　遺　構

集石炉 SH09（Fig.1）　T2グリッドに位置し、上面の集石（SX11）下に2.6×1.4mの楕円形プランで深さ70cm程の土壙が有り、床面から15cm程炭粒を少量混じる赤褐色土が堆積した状態で真赤に焼けた５～20cm程の自然礫（花崗岩）が多数土壙の壁に沿うように検出されており、最下部に５cm程、炭混じりの焼土が検出されている。遺物が検出されなかったが旧石器から縄文時代早期にかけての集石炉と考えられる。

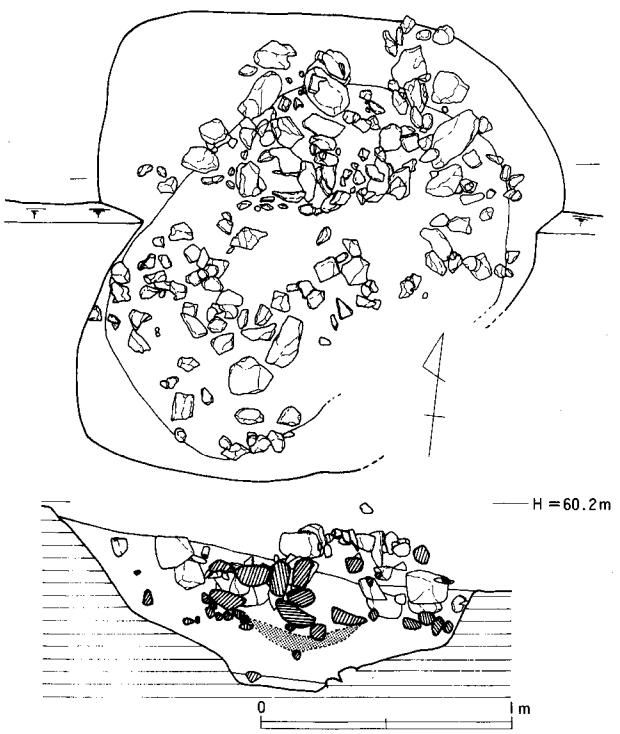


Fig. 1　SH09 実測図（1/30）

石組炉（Fig.3）　急斜面部に４×15m～1.2×2.8mの方形の地山整形部（SX10・12・13）が有り、中央の３×８ｍの隅丸方形の地山整形部（SX10）の中央部とその斜面下に２基石組炉が検出されている（SH01・02）。SH01は方形の自然礫で75×70cmの内法で方形に組み、中央に35×10cmの方柱状の自然礫が支脚として立てられている。周囲には土師器甕、甑・須恵器等が散乱しており、日常雑器類と製塩に用いられたと思われる甕も検出している。柱穴は無い。

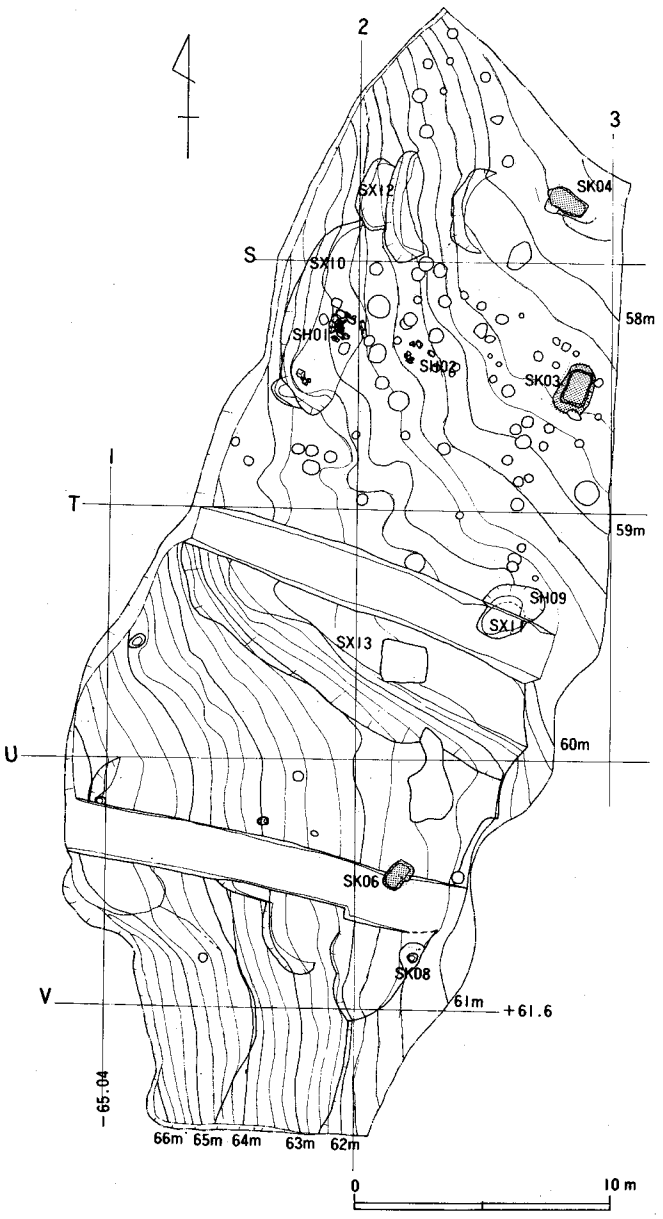


Fig. 2　　遺構全体図（1/300）

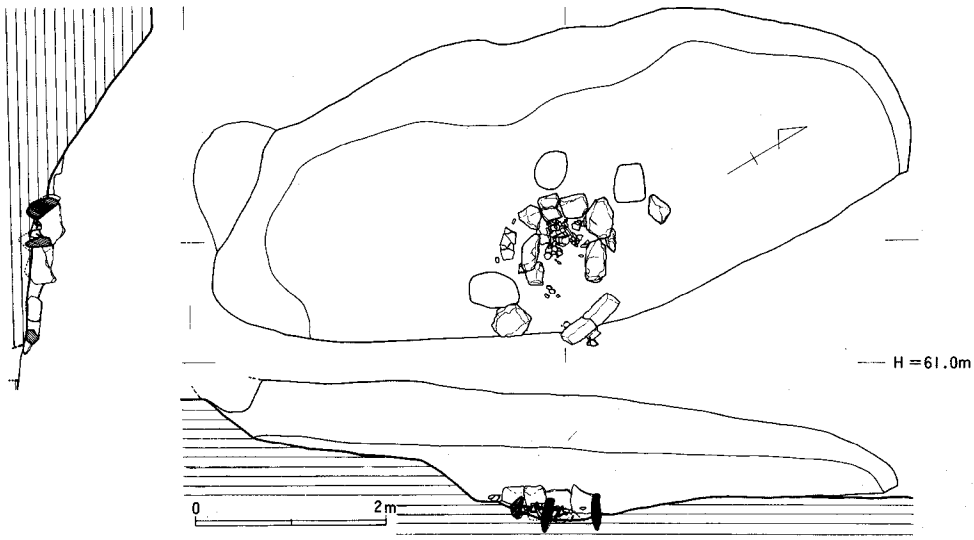


Fig. 3　　SH01 実測図（1/80）

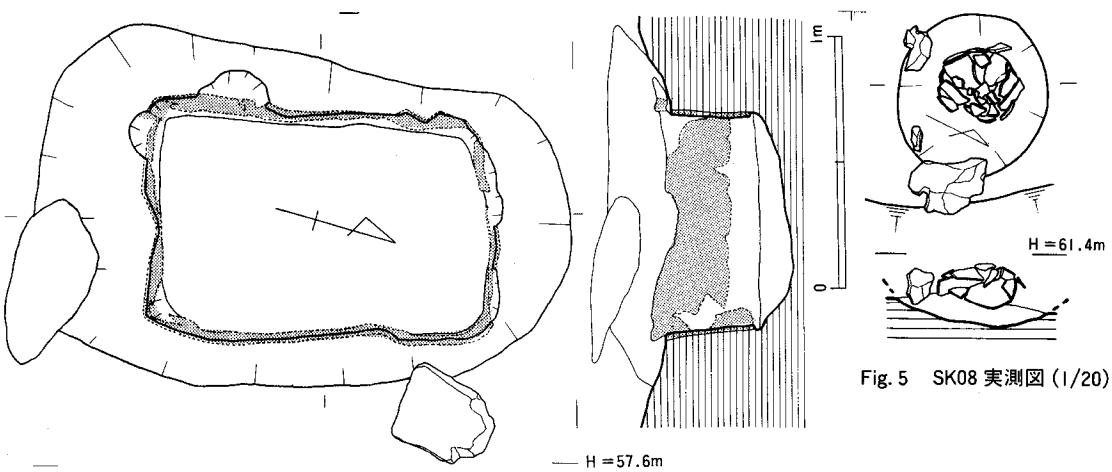


Fig. 5　SK08 実測図（1/20）

Fig. 4　　SK03 実測図（1/30）

焼土壙（Fig.4）　焼土壙は丘陵斜面の裾に沿って３基（SK03・04・06）分布しており、N－17～36°－E に主軸を取り稜線に平行するもの（03・06）とこれに直交して N－62°－W にとる04とが有る。長さ120～140cm・幅70～90cm・深さ20～60cmの方形で、四壁は厚さ２～４cm程焼け

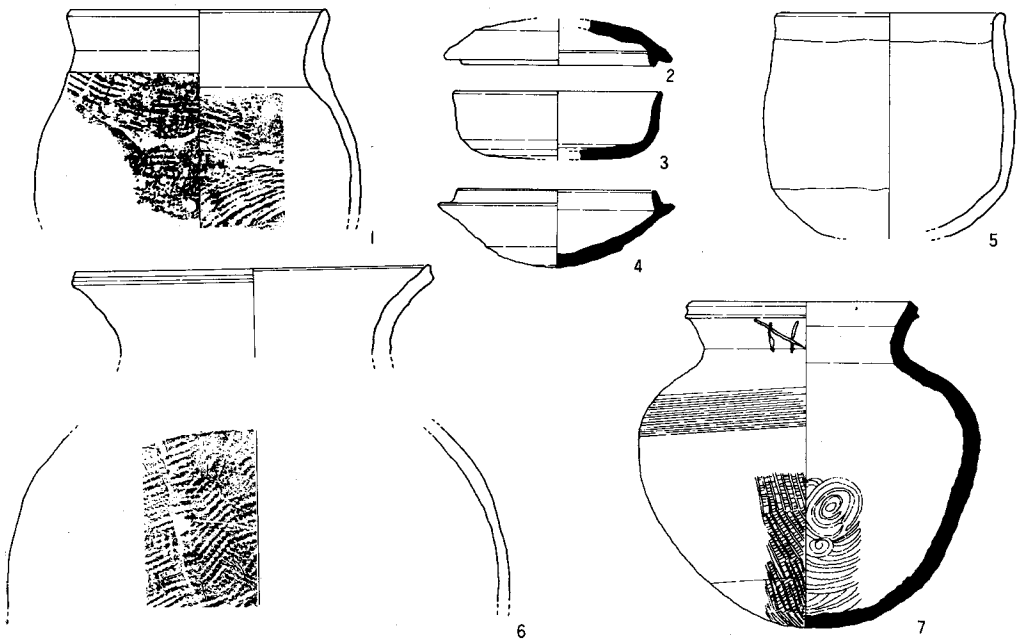


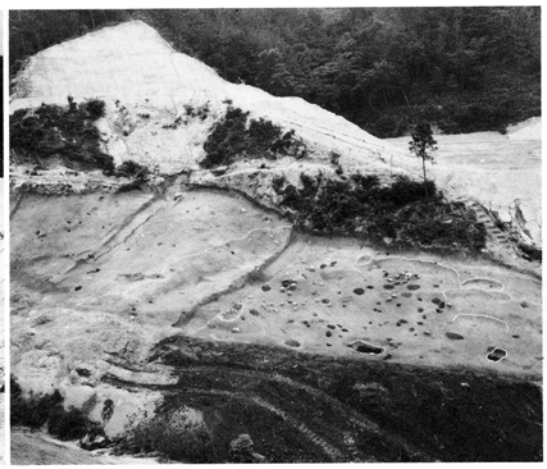
Fig. 6　　出土遺物実測図（1/4）

ている。内部には炭・灰が充満し遺物の出土は極めて少ない。

埋甕 SK08（Fig.5）　U 2 グリットに有り、径40cm程の円形の掘り方に床から 5 cm程離して須恵器の小甕をすえている。甕は(Fig.6－7) 口径11.5cm器高17.2cmを測かり、木目直交の叩成形の胴下半とカキ目とナデ整形の上半とを接合したものである。

(2)　遺物（Fig.6）　1・3・6 は SH01 内、2・4・5 は SX10 からの検出である。1 は土師器甕で口径13.8cm、使用中に破損した様で支脚の自然礫を取り囲む様に検出された。胴部外面は横位の木目直交叩き、内面に平行な弧線の当て具痕を残す。器面の剝落が著しく、一部赤く発色しており、製塩に用いられた可能性が高い。6 は口径18.4cm、跳ね上がり気味の口唇上端・凹線気味の仕上げの口唇・胴部に施された木目直交の叩きを特徴とする一連の土師器甕で、色調は明燈色、内面の剝落が著しく、煮沸に用いられている。同様に製塩の可能性が考えられる。同種のものは SX13、包含層等から数個体検出されている。5 は SX10 の南隅で倒置した形で検出された。口径11.8cm、器高12cmを測かる土師器の甕で外面の頸部下は縦方向の板ナデ、内面上半は斜位のケズリ下半は指ナデ、口頸部はヨコナデが施される。煮沸に供されている。SX10 では他に外面に格子目叩きを施す須恵器系の土師器甑も出土している。2 は須恵器坏蓋。天井部の半分程回転ヘラ削りを施す。口径10cm。3 は須恵器坏、口径10.8cm・器高3.7cm。胴部下1/3程回転ヘラ削りを施す。4 は須恵器坏で口径10.3cm・器高4.1cmを測かる。胴部下1/3程回転ヘラ削りを施す。須恵器の時期はⅣ～Ⅵ期を示している。

(1) 調査前風景（北東から）



(2) 調査区全景（東から）

(3) SH01（中央）・SH02（手前）(南東から)

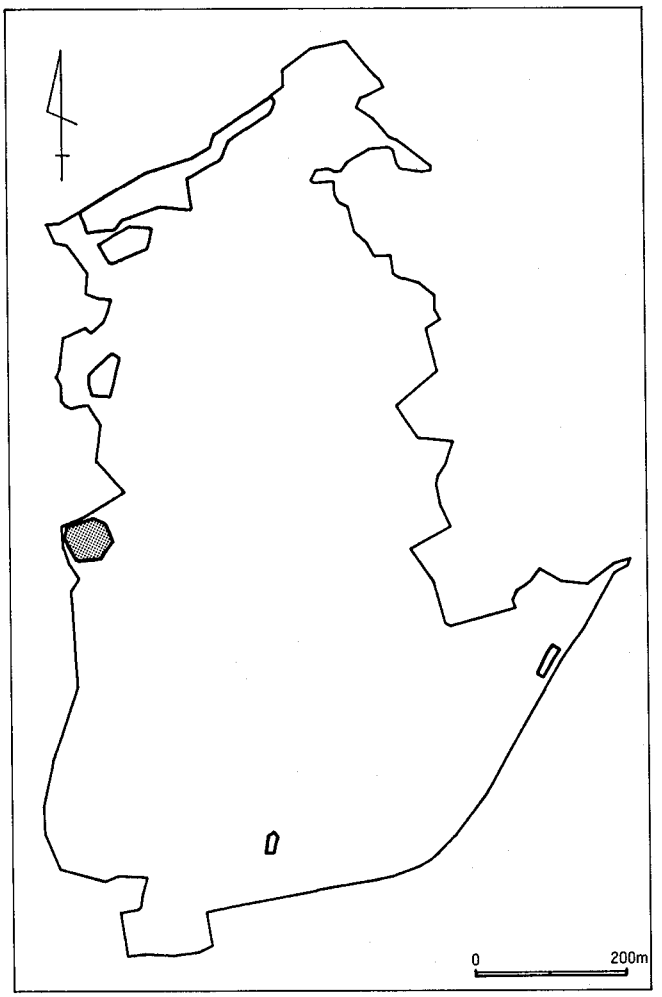
(5) SH09（南から）

(6) SK03 検出状況（北東から）

(4) SH01 近景（南東から）

(7) SK03 完掘状況（北東から）

4．笠間谷古墳群
(第４地点)



遺跡調査番号	８８２１		遺跡略号	KMK	
調査地地籍	西区野方字笠間谷		分布地図番号	１０５	
開発面積	60ha	調査対象面積	2,700㎡	調査実施面積	2,669㎡＋古墳４基
調査期間	1988年５月16日～1988年９月19日			事前審査番号	58－２－161

4　笠間谷古墳群

概　要

叶岳から東に伸びる丘陵尾根の先端部に位置する。南側と北側には小河川が東流し、丘陵先端部で合流する。標高は75mから87mをかぞえ、周りの尾根が急峻なので意外と平坦に見える。調査面積は2,669m²で、もともと2基の古墳が確認されていたが、伐採後1基、表土除去後もう1基出土して、調査した古墳は都合4基になった。古墳群は、花崗岩の風化粘土や岩盤上に作られるが、風化粘土層には縄文時代早期の不定形土壙が掘り込まれ、上面には古代から中世にかけての製鉄炉や焼土壙などが出土している。各時期の土壙は合わせて23基を確認した。縄文時代の不定形土壙は10数基で、楕円押型文や撚糸文、条痕文などが出土している。石器は柳葉形のサヌカイト製石槍4本、石鏃などがあり、サヌカイトの剝片も出土している。

1　古　　墳

1号墳 (Fig.2～4、PL.13)　調査区中央部に位置し、丘陵の傾斜が急に強くなる部分の先端に立地する。墳丘は、下方が馬蹄形状、上方が円形になる。径12mを測り、南側から見上げると実際よりもかなり大きく見える。石室は、単室両袖形の横穴式石室で、既に開口しており、中は敷石が完全に抜き取られる程荒らされていた。石室の石組みは殆ど完全に近い形で残っていたが、羨道部天井石のひとつが入口に落下していた。

石室全長は、右側壁が7.2mで、左側壁は7mである。主軸はN－36°－Wで南側に開口する。玄室はやや歪んでいるが、奥幅2.2m、前幅2.1m、左側壁2.5m、右側壁2.2mを測る。敷石除去後の床から天井までの高さは2.5mである。奥壁には巨石を2枚立て、両側壁にはそれよりもやや小振りの礫を横位または縦位に据えて腰石としている。腰石の上は奥壁3段、両側壁5～6段の石積みが持ち送り状に積まれ、断面三角、平面四角の天井石が乗せられる。袖石は縦長の礫を立てて構成され、玄門幅は1.2mである。羨道は玄門と同じ幅で取り付き、入口に向ってやや幅が広がる。羨道の石積みはそのまま外護列石の石積みと接続する。羨道内には2箇所の梱石が設けられるが、第1梱石を基線に閉塞石が積み上げられる。玄門部の梱石は抜き取られており、掘方に礫が詰まっていた。

1号墳の墳丘は良く遺存していた。墳丘の形成過程は5段階に分けられる。先ず、第1段階は基盤を掘り込んで腰石を設置し、腰石が安定するまで基盤の土を中心に埋め込まれる。腰石の裏込めには栗石が詰め込まれ、安定が計られている。第2段階は、側壁の積みあげと盛土が側壁の下位から中位程度まで行なわれる。第3段階では、側壁の中位から上位の積み上げが行なわれ、それに伴なって外護列石を築いて盛土が積み上げられる。外護列石は東側が特に丁寧に積まれており5段認めることができる。北側及び西側は4段の列石が巡る。第4段階は天井

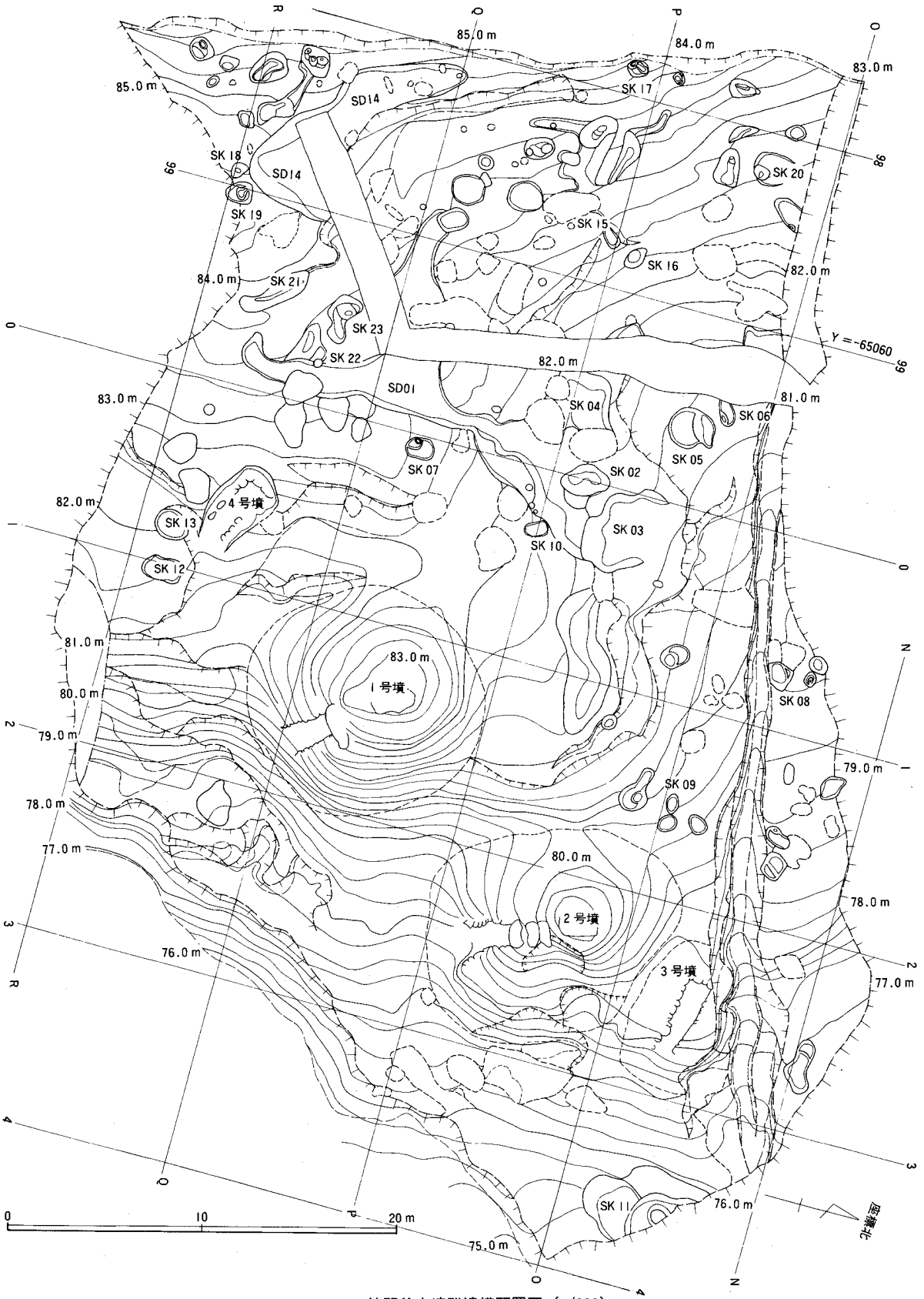


Fig. 1　　笠間谷古墳群遺構配置図（1/300）

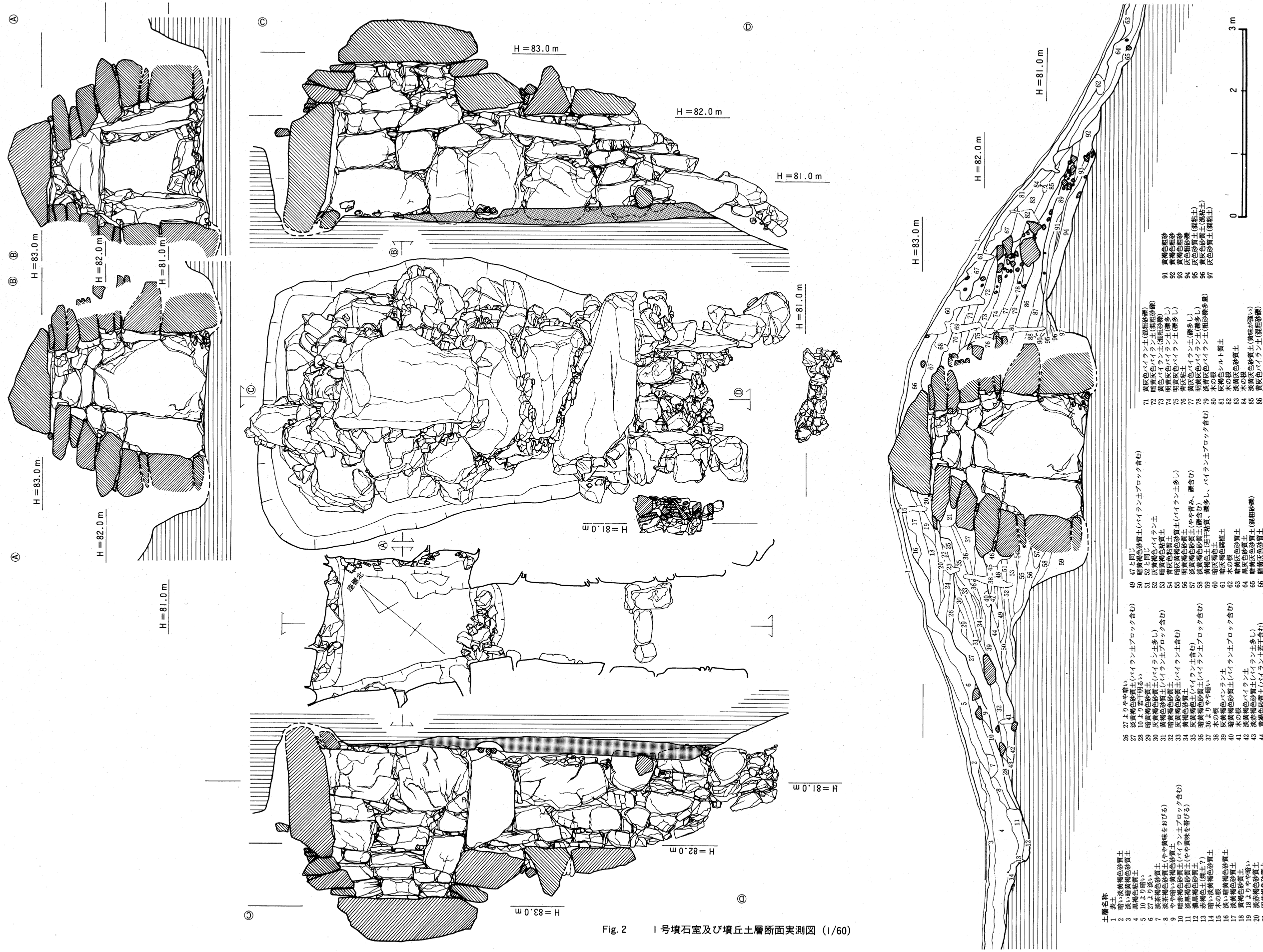


Fig. 2　　Ⅰ号墳石室及び墳丘土層断面実測図（1/60）

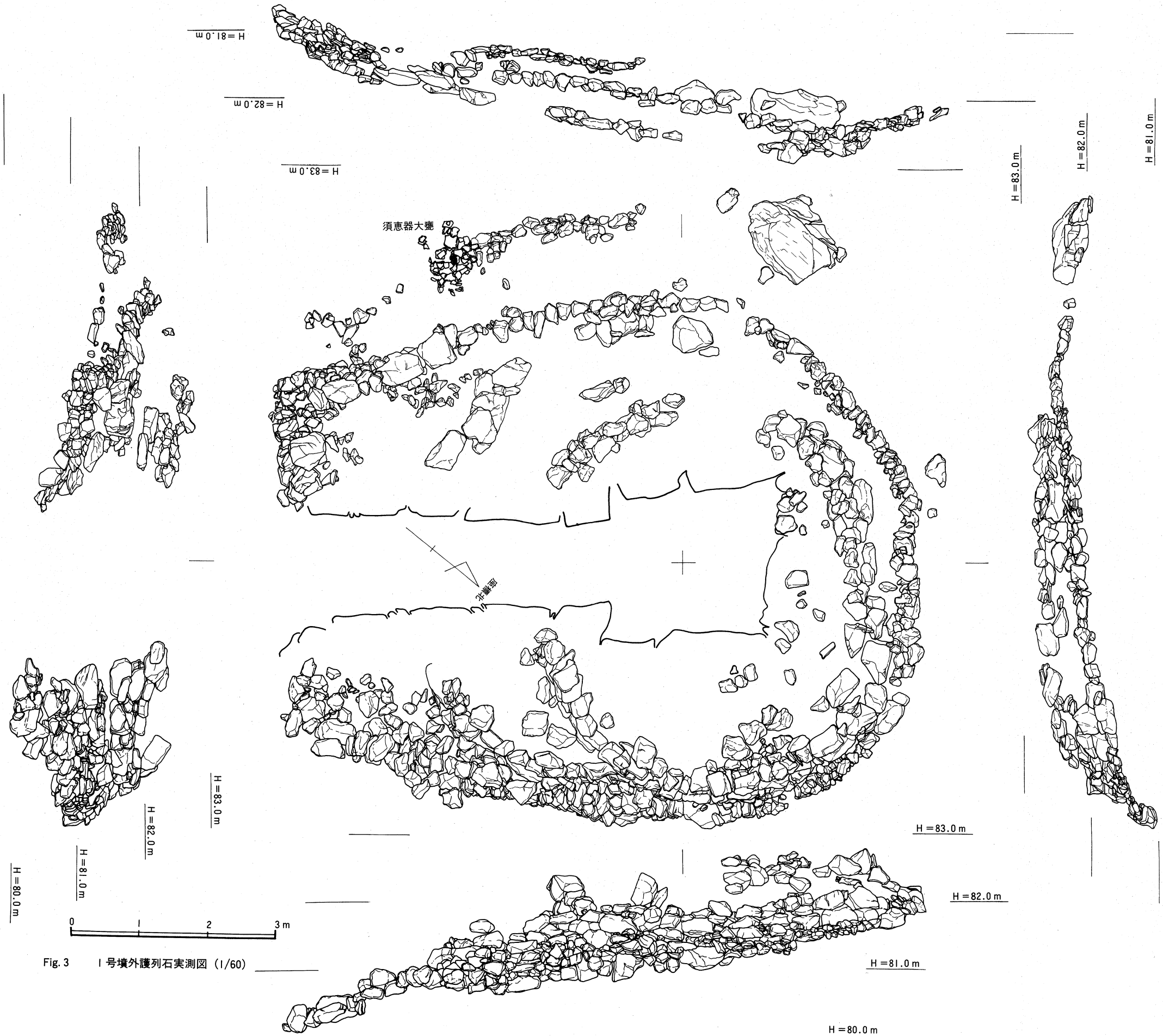


Fig. 3　Ⅰ号墳外護列石実測図（1/60）

石を乗せ、天井石を被覆するまで盛土を行なう。第5段階は外護列石も埋め込んで、さらに盛土を行ない墳丘を整えたものと考えられる。土層断面と外護列石の出土状況から以上のことが想定できた。

出土遺物は、古墳の残りが良い割りには少なかった。既に盗掘に逢っており、石室内は完全に荒らされていた。玄室右側壁近くで鉄刀の破片、玄門部で須恵器坏身が出土している。原位置を留めたものはなく、前庭部から掻き出された遺物が少量出土している。墳丘西側の外護列石の間では、供献された須恵器大甕が出土している。接合した結果、口径50cm、器高96cm、胴径89.3cmあった。

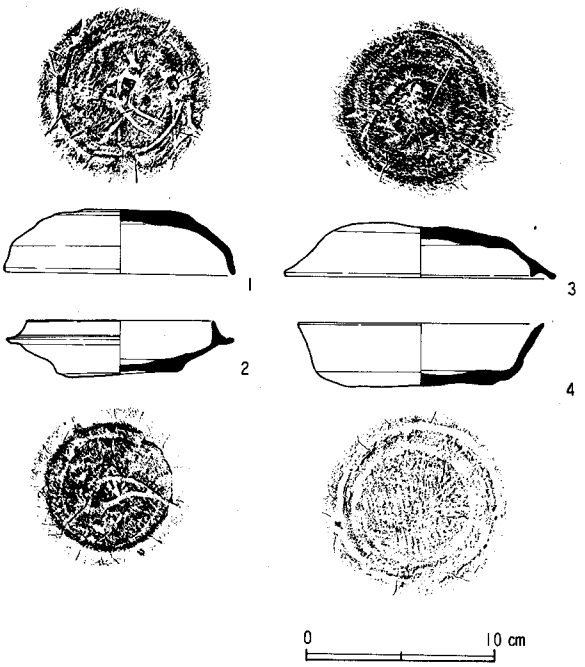


Fig. 4　　1号墳出土遺物実測図（1/4）

Fig.4－1は前庭部から出土した須恵器坏蓋である。口径12cm、器高3.4cmを測り、体部中央に稜を持つ。暗灰色を呈し、焼成は良好である。天井部にヘラケズリがみられ二重弧のヘラ記号が施される。2は同じヘラ記号を持つ坏身である。玄門部から出土。口径9.8cm、器高3.2cmで体部は丸味がなく、底部は平底になる。3・4は前庭部から出土した坏身と蓋である。3は外径14.4cm、器高2.9cmで内側に反りを持ち、天井部にヘラケズリが施される。4は口径13cm、器高3.4cmを測る無高台の坏である。3と同様暗茶褐色を呈し、同一のヘラ記号を持つ。1号墳は築造時期を決定する遺物はないが、石室の形態などから6世紀後半代に作られ、7世紀後半代まで追葬や墓前祭が行なわれたものと考えられる。

2号墳（Fig.5・6、PL.14）

1号墳東側のやや低い位置に造営された古墳である。長径13m、短径11mで、基底は馬蹄形状を呈する。墳丘東側は最近の撹乱によって一部破壊されている。

石室は、単室両袖形の横穴式石室で南側に開口する。主軸はN－26°－Wである。既に以前から出入りが可能で、石室内は荒らされていた。石室全長は、左側壁で7m、右側壁は7.6mで、右側壁がやや長い。石室入口の石積みはそのまま両側に伸びる外護列石に接続する。玄室は、石室全体の大きさからすると小さく、幅1.8m、左側壁1.8m、右側壁2mで、ほぼ正方形に近い形となる。奥壁は一枚の鏡石を用い、両側壁は2石の腰石を有する。腰石の上には3段程度

の塊石が積まれ、天井石を架構する。側壁の石は大きさが不揃いで、積み方が粗雑な感じである。床面には敷石はなく岩盤が露出している。原位置を留めない礫が散在していることから、本来は敷石が施されていたものとみられる。現床面から天井までの高さは2.1mである。なお、玄室の横断面図は、石室の中心から北へ30cm移動した部分で取っている。石室中央部では石積みの状況が表現できなかったからである。両袖石は1m強の石を縦位に立てて構成している。玄門の幅は1mを測る。羨道はそのまま1m幅で取り付き、入口側に向って広がりを増す。羨道の石積みは、やや大き目の石を横位に据えて腰石とし、左側壁はその上に細長い石を積み上げる。右側壁は塊石が積み上げられる。羨道床面には梱石が2箇所設けられ、細長い石が2個組み合わせられる。また、第1梱石を基準に閉塞石が積み上げられる。長さ1m以上にわたって積まれ、石積みは4段残存している。天井石は、玄室が1石、玄門の楣石を除いて羨道部が3石で構成されている。

墳丘は、西側の基盤を整形して作られ、石室はさらに掘り込まれて設置される。墳丘の形成過程は1号墳と同様で、土層の観察から5段階程度に分けられる。第1段階は左腰石の中位、右腰石の上端までの盛土で、腰石の安定を計るため硬くタタキ締められている。第2段階は側壁の中位まで、第3段階は側壁の上位まで盛土が行なわれる。側壁裏側は裏込めの栗石と粘土が詰め込まれ、石積みの安定を計っている。1号墳は記述しなかったが2号墳と同様の技法が採られている。第4段階は天井石を架構した後、天井石の被覆のための盛土である。第3段階及び第4段階の盛土には外護列石を設けて積み上げられている。外護列石は、羨道端部に接続するのが最下段で、馬蹄形状になる。墳丘上部までは都合4段の外護列石が巡り、列石間には細かな礫が分布する。礫そのものは盛土の中にも多数認められる。第5段階は墳丘全体の整形盛土である。墳頂部は流出しており、本来の高さは分らない。

遺物は、石室羨道部と、前庭部から出土している。羨道部には6個体の須恵器坏身・蓋がまとまって供献されているが、時期幅がある。前庭部からは須恵器坏身・蓋・甕などが出土している。また、石室から掻き出されたものか銅地金張りの耳環が出土している。

Fig.5は羨道部から出土した坏と蓋である。時期差があり、5は口径10.5cm、6は9cmを測る。6はボタン状つまみを持つ。

2号墳は出土遺物や石室の形態から、6世紀後半～末に作られ、7世紀中頃まで、追葬や墓前祭が行なわれたと考えられる。

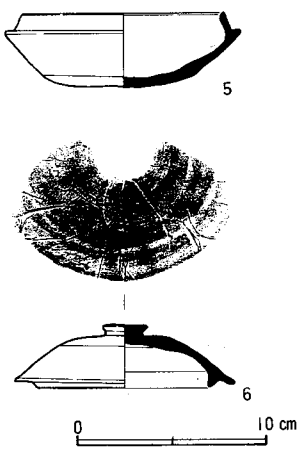


Fig. 5　2号墳出土遺物実測図（1/4）

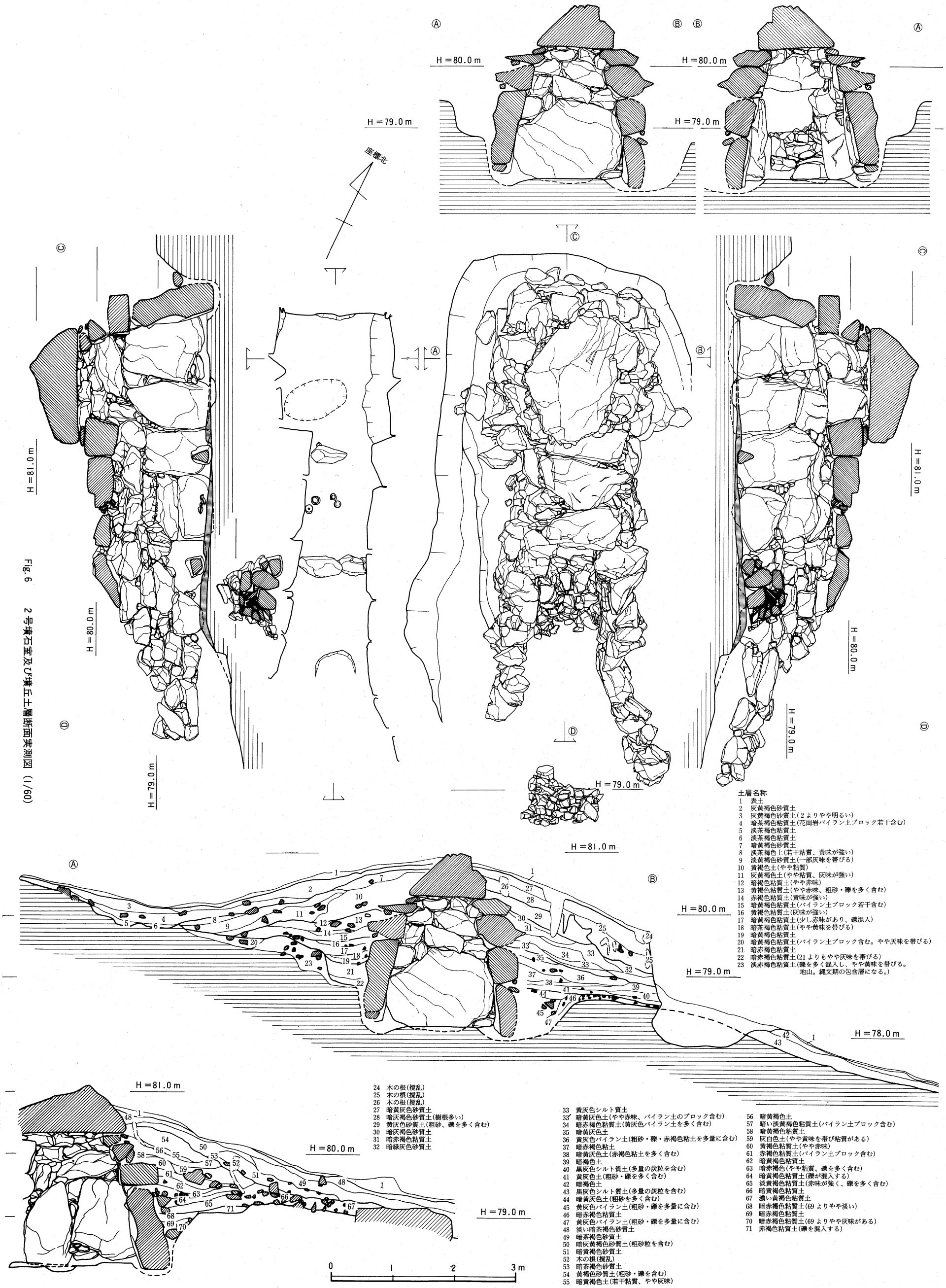


Fig.6　2号墳石室及び墳丘土層断面実測図（1/60）

土層名称

1　表土
2　灰黄褐色砂質土
3　灰黄褐色砂質土（2よりやや明るい）
4　暗茶褐色粘質土（花崗岩バイラン土ブロック若干含む）
5　淡茶褐色粘質土
6　淡茶褐色粘質土
7　暗黄褐色砂質土
8　淡茶褐色土（若干粘質、黄味が強い）
9　淡黄褐色砂質土（一部灰味を帯びる）
10　黄褐色土（やや粘質）
11　灰黄褐色土（やや粘質、灰味が強い）
12　暗褐色粘質土（やや赤味）
13　黄褐色粘質土（やや赤味、粗砂・礫を多く含む）
14　赤褐色粘質土（黄味が強い）
15　暗黄褐色粘質土（バイラン土ブロック若干含む）
16　黄褐色粘質土（灰味が強い）
17　暗黄褐色粘質土（少し赤味があり、礫混入）
18　暗茶褐色粘質土（やや黄味を帯びる）
19　暗黄褐色粘質土
20　暗黄褐色粘質土（バイラン土ブロック含む。やや灰味を帯びる）
21　暗赤褐色粘質土
22　暗赤褐色粘質土（21よりもやや灰味を帯びる）
23　淡赤褐色粘質土（礫を多く混入し、やや黄味を帯びる。地山。縄文期の包含層になる。）
24　木の根（撹乱）
25　木の根（撹乱）
26　木の根（撹乱）
27　暗黄灰色砂質土
28　暗灰褐色砂質土（樹根多い）
29　黄灰色砂質土（粗砂、礫を多く含む）
30　暗灰褐色砂質土
31　暗赤褐色粘質土
32　暗緑灰色砂質土
33　黄灰色シルト質土
33′　暗黄灰色土（やや赤味、バイラン土のブロック含む）
34　暗赤褐色粘質土（黄灰色バイラン土を多く含む）
35　暗黄灰色土
36　黄灰色バイラン土（粗砂・礫・赤褐色粘土を多量に含む）
37　暗赤褐色粘土
38　暗黄灰色土（赤褐色粘土を多く含む）
39　暗褐色土
40　黒灰色シルト質土（多量の炭粒を含む）
41　黄灰色土（粗砂・礫を多く含む）
42　暗褐色土
43　黒灰色シルト質土（多量の炭粒を含む）
44　暗黄灰色土（粗砂を多く含む）
45　黄灰色バイラン土（粗砂・礫を多量に含む）
46　暗赤褐色粘質土
47　黄灰色バイラン土（粗砂・礫を多量に含む）
48　淡い暗茶褐色砂質土
49　暗茶褐色砂質土
50　暗灰黄褐色砂質土（粗砂粒を含む）
51　暗黄褐色砂質土
52　木の根（撹乱）
53　暗茶褐色砂質土
54　黄褐色砂質土（粗砂・礫を含む）
55　暗黄褐色土（若干粘質、やや灰味）
56　暗黄褐色土
57　暗い淡黄褐色粘質土（バイラン土ブロック含む）
58　暗黄褐色粘質土
59　灰白色土（やや黄味を帯び粘質がある）
60　黄褐色粘質土（やや赤味）
61　赤褐色粘質土（バイラン土ブロック含む）
62　暗黄褐色粘質土
63　暗赤褐色（やや粘質、礫を多く含む）
64　暗黄褐色粘質土（礫が混入する）
65　淡黄褐色粘質土（赤味が強く、礫を多く含む）
66　暗黄褐色粘質土
67　濃い黄褐色粘質土
68　暗赤褐色粘質土（69よりやや淡い）
69　暗赤褐色粘質土
70　暗赤褐色粘質土（69よりやや灰味がある）
71　赤褐色粘質土（礫を混入する）

3号墳（Fig.7、PL.14）

丘陵端部に位置し、２号墳の直ぐ北側に造営される小形の古墳である。楕円形状を呈し、長径８ｍ、短径６ｍを測る。墳丘の一部は２号墳を少し削り込んで作られている。

石室は、単室両袖形の横穴式石室で、かなり簡略化された作りである。主軸はＮ－76°－Ｗで、石室全長は左壁で4.3m、右壁で3.8mを測る。羨道端部は少し崩れているので本来はもう少し長かったと推察される。玄室は幅1.2m、左側壁は1.6m、右側壁は1.4mである。石室は腰石と１段の石積みを残す程度で、天井部は失なわれている。玄室の腰石は各壁２石づつ用いられ、奥壁は縦位、両側壁は横位に据えられる。床面には敷石が施されていたとみられるが、撹乱で殆ど剝ぎ取られている。羨道は玄室と一体化して作られ、袖石は石材を縦位に立てて表現している。羨道部の幅は玄室幅よりもわずかに狭くなる。閉塞は玄門部で行なわれ40cm前後の礫を５個並べて仕切り石にしている。墳丘には羨道端部から伸びた外護列石が取り巻く。西側で４段、東側で３段の列石が確認できる。石室は、古い段階から破壊されていたこともあり、遺物は殆ど出土しなかった。石室の形態から７世紀代に作られた古墳と考えられる。

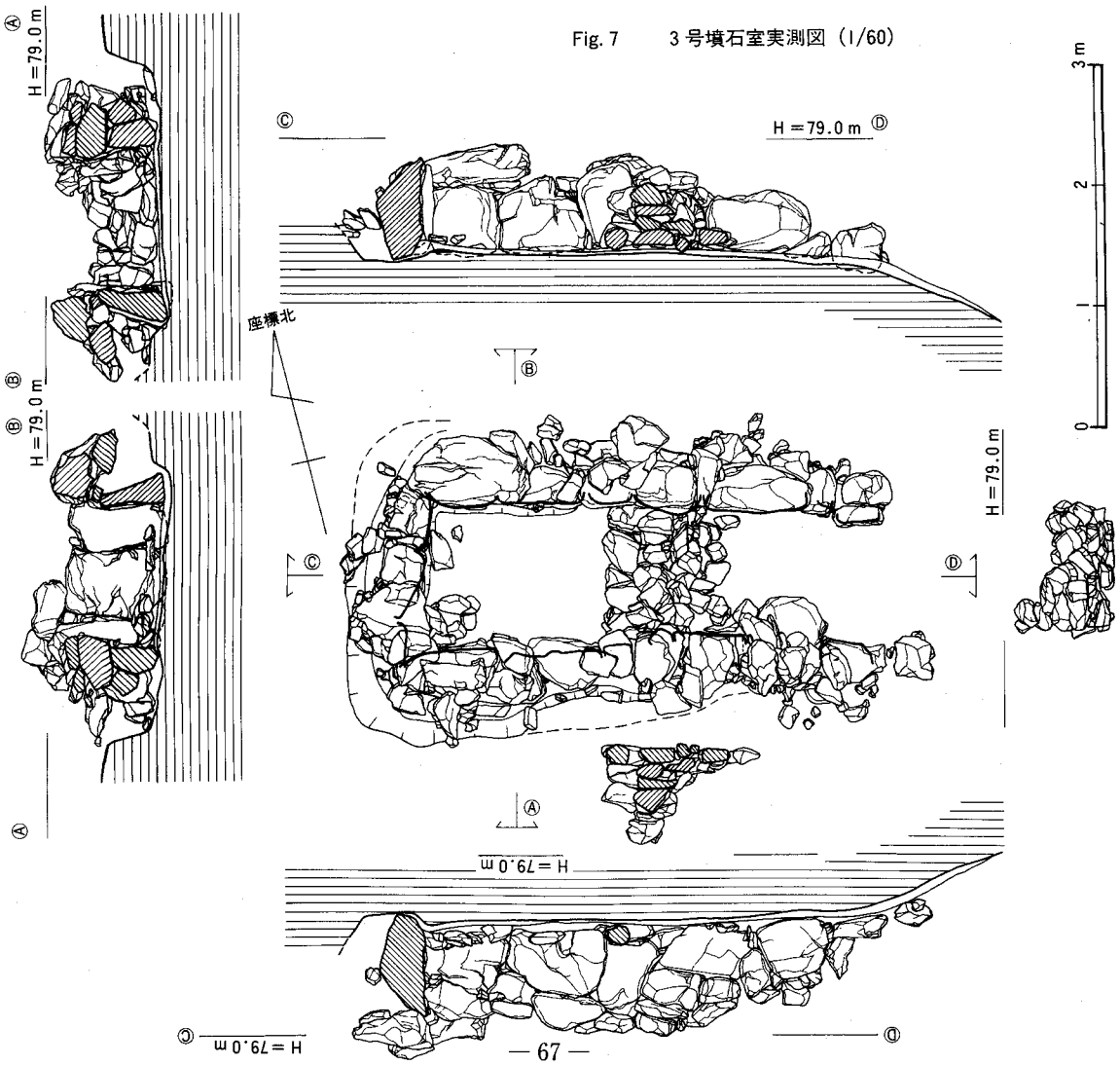


Fig. 7　　３号墳石室実測図（1/60）

4号墳（Fig.8・9、PL.14）

調査区中央部南側で出土。小形の横穴式石室を有する古墳である。墳丘盛土は既に失なわれ、石室の腰石部分以下が残存していた。主軸はN－57°－Wである。石室残存長は3.5mで、玄室は床面敷石で測ると幅、長さとも1.4mの正方形に近い形になる。腰石は各壁とも2石で構成されていたとみられる。玄門部には閉塞石が積まれていた痕跡を示す。3号墳よりもさらに簡略化された石室である。遺物は玄室左壁近くに2セットの坏身・蓋と羨道部から須恵器が出土している。

Fig.8－7は内側に反りのある坏蓋で、凝宝珠形のつまみが付く。外径15cm、8は口径14.4cmで内側に反りを持たない坏蓋である。9は無高台、10は高台の付く坏身である。9は口径13.7cm、10は13.3cmである。全体に焼けひずみが激しい。これらの遺物は追葬時のものと考えられ、この古墳の一番新しい時期を示している。4号墳は7世紀代に作られ、後半まで追葬が行なわれたらしい。

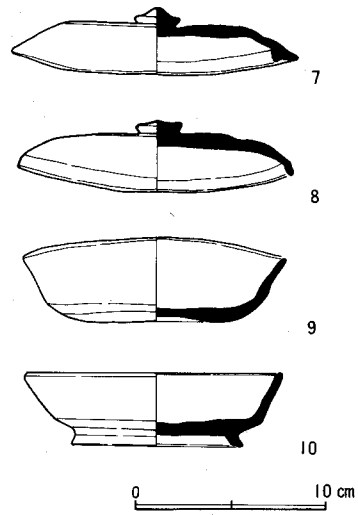


Fig. 8　4号墳出土遺物実測図（1/4）

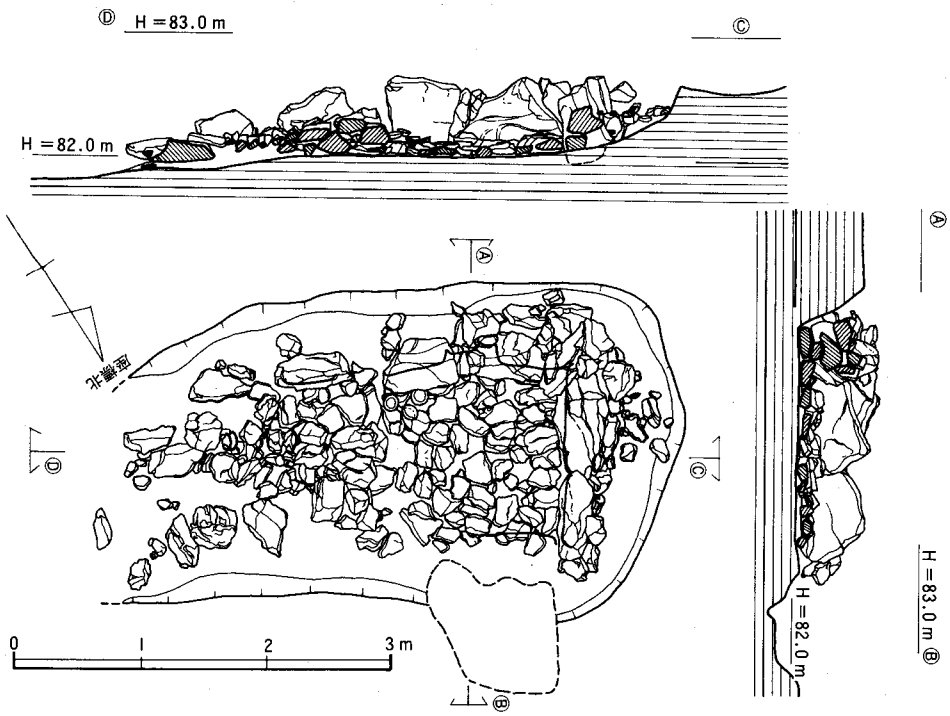


Fig. 9　4号墳石室実測図（1/60）

2　古墳以外の遺構

縄文時代　縄文時代の遺構は自然流路２条（SD01・14）と不整形土壙12基（SK02・04・05・06・07・08・09・11・20・21・22・23）を検出している。南西から北東へ浅い谷地形となっており、底部にSD14・01の自然流路が流れ、この谷筋に沿って土壙が分布している。SD01(Fig.10)は幅3.2m深さ25cm程で黄灰色砂～シルトが堆積しており、1層中から後・晩期の粗製土器、2・3層中から早期押型文・撚糸文土器等を検出している（Fig.13）。SK05（Fig.11）は0-99グリッドに有り、長径3.0m、短径1.9mを測る。平面は不整形、床面も凹凸が著しい。覆土は黄灰～暗黄灰色シルト質土。

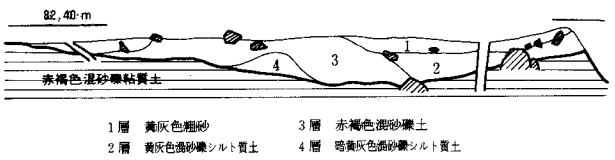


Fig. 10　　SD－01 土層断面図（1/40）

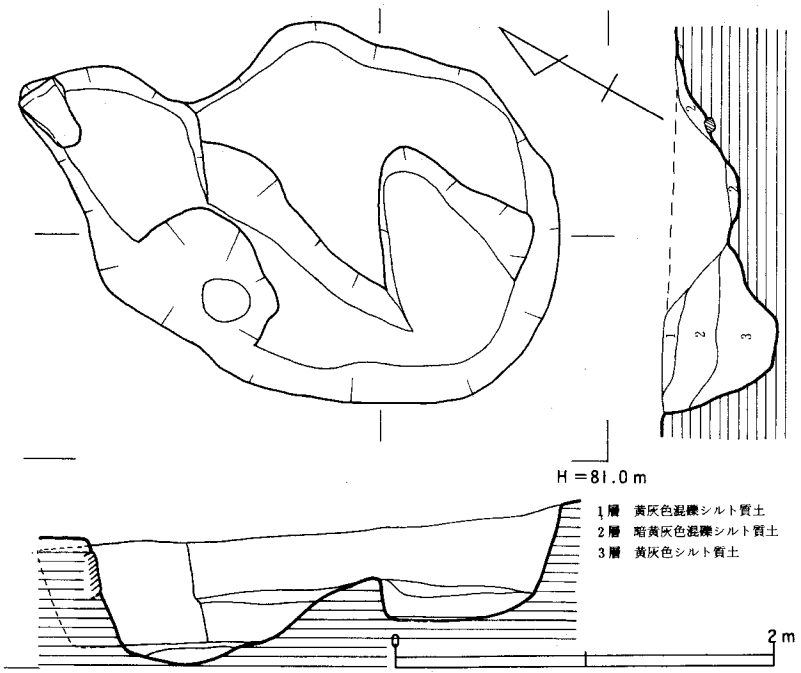


Fig. 11　　SK－05 実測図（1/40）

古墳～奈良時代　焼土壙５基（SK10・12・13・15・17）と排滓ピット２基（SK18・19）と鉄滓集積部１ケ所を検出している。いずれも82mの等高線から上の部分で検出されている。焼土壙は長さ1.1～2.0mで１m前後の小振りのものが多い。遺物の検出はほとんどなく、古墳との関係は不明。製鉄関係はQ－99グリッド付近にまとまっており、鉄滓集積部では割られた滓375kg・SK18からは232g、SK19からは４kg検出している。焼土・炉体のまとまった出土はなく主体部は不明。ヘラ切りの土師器小片が出土しており、古墳後期～奈良時代と考えられる。

遺物　石器は11～13・19～22はサヌカイト、14・23は緑泥片岩、他は黒曜石製である。

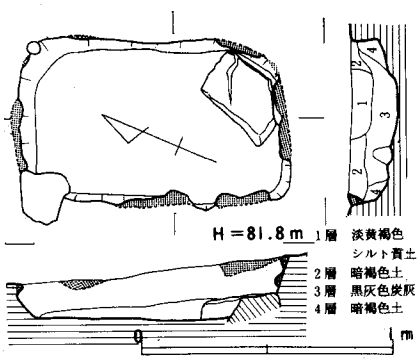


Fig. 12　　SK－10 実測図（1/30）

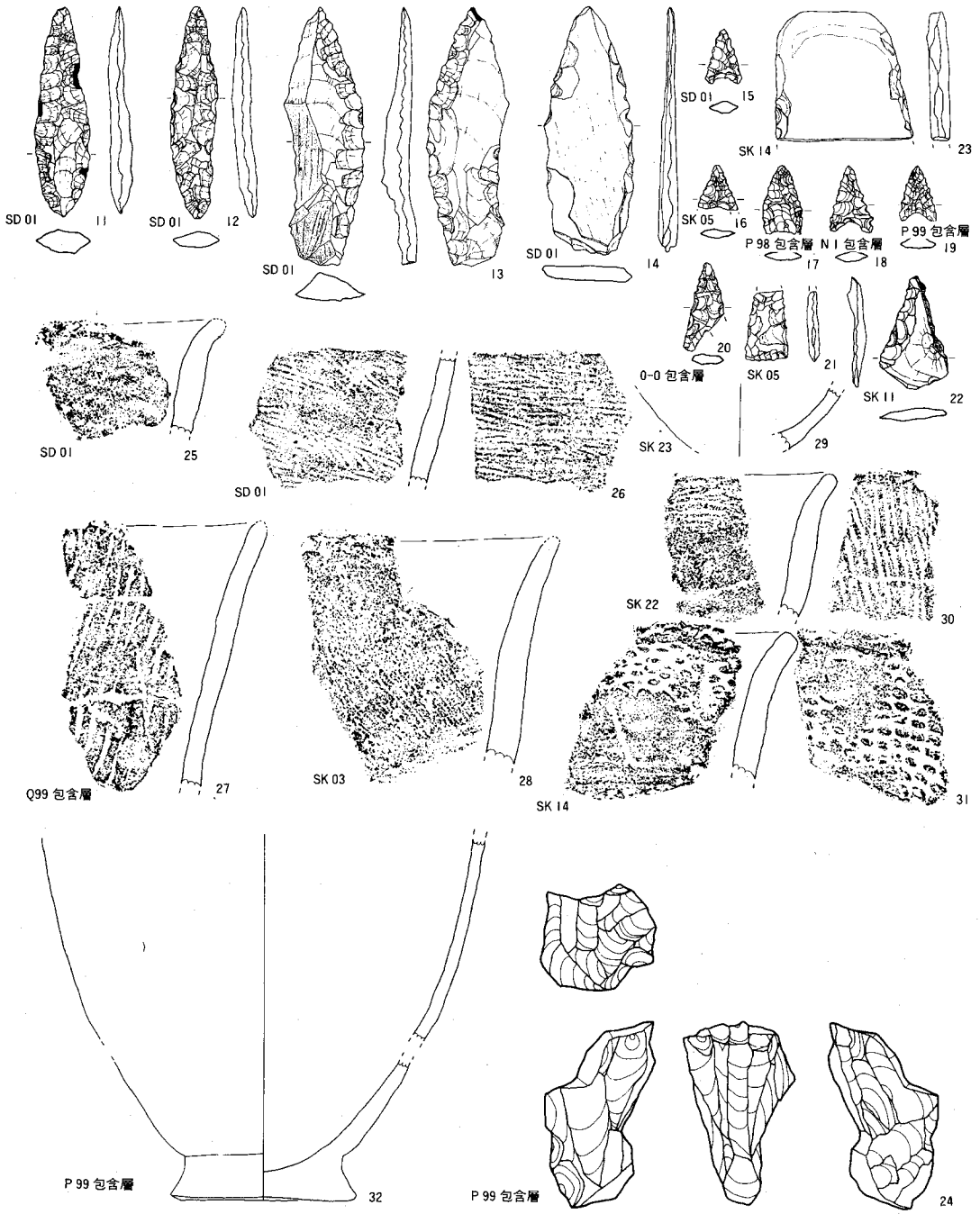
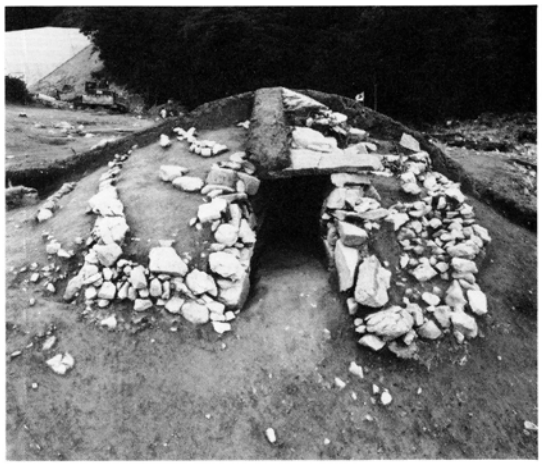


Fig. 13　　出土遺物実測図（1/3・1/1）

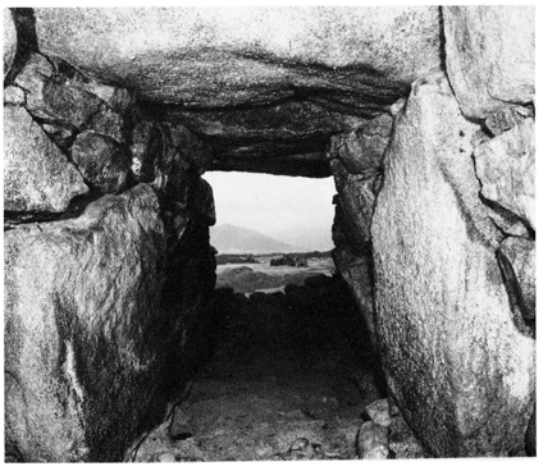
(1) 笠間谷古墳群全景（南上空から）

(2) 笠間谷古墳群調査前全景（南から）

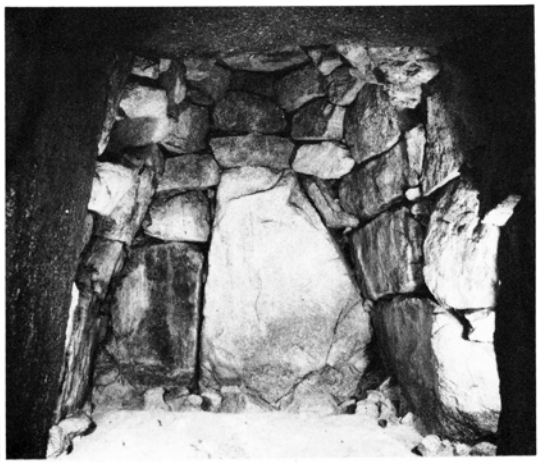


(3) 笠間谷古墳群Ⅰ号墳調査状況（南から）

(4) Ⅰ号墳外護列石出土状況（東から）

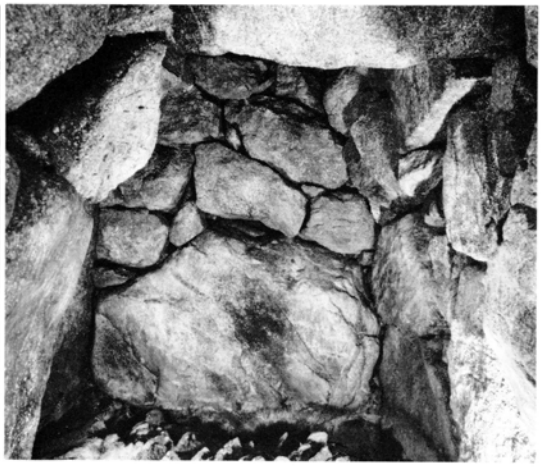


(5) Ⅰ号墳羨道（玄室から外を望む）



(6) Ⅰ号墳奥壁（南から）

(7)　2号墳出土状況（南から）

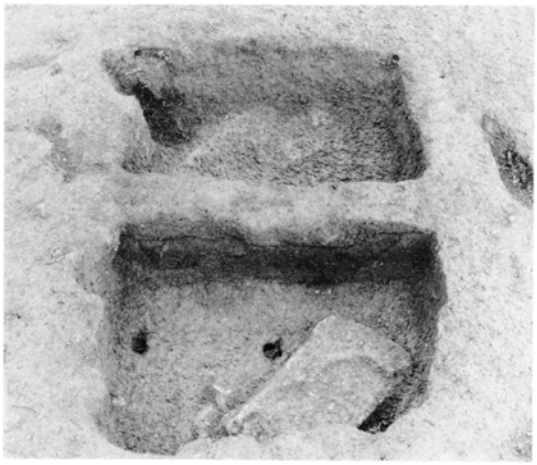


(8)　2号墳奥壁（南から）

(9)　3号墳出土状況（南から）

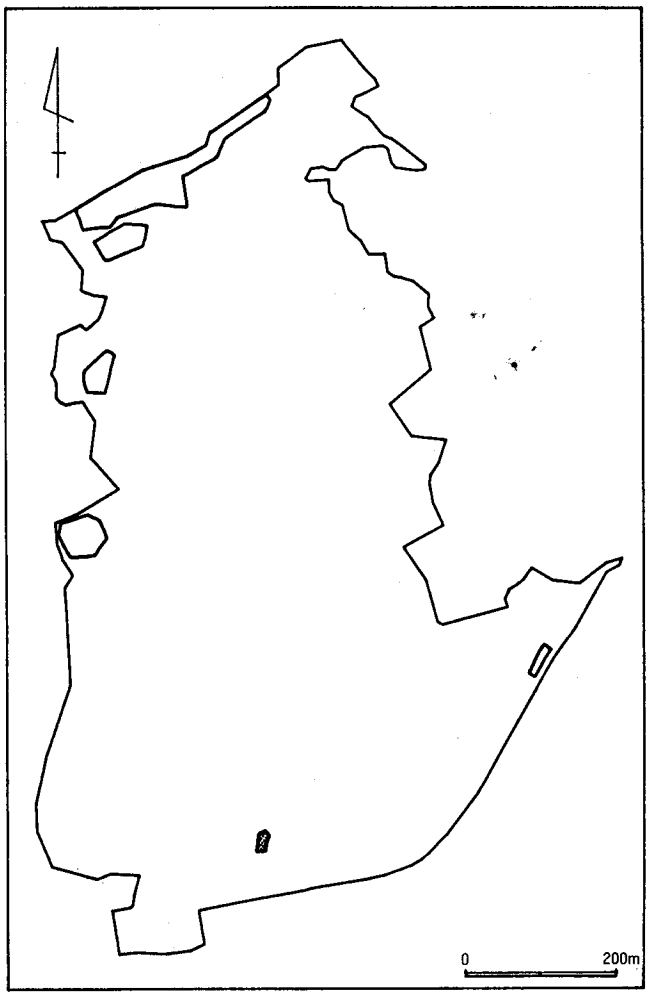
(10)　4号墳出土状況（東から）

(11)　SK－05（南から）



(12)　SK－10（南東から）

5．野方古墳群D群
（第５地点）



遺跡調査番号	８７３８		遺跡略号	ＮＫＫ－４	
調査地地籍	西区野方字大音		分布地図番号	１０５	
開発面積	60ha	調査対象面積	古墳２基	調査実施面積	500㎡＋古墳２基
調査期間	1987年11月25日～1988年３月31日			事前審査番号	58－２－161

野方古墳群　D群

概　要

叶岳から派生して東に伸びる丘陵の尾根と尾根とに挟まれた平坦な東斜面に位置する。標高は71～75mをかぞえ、もともと2基の古墳が知られていた。南側の尾根には野方古墳群A～C群が分布するので、野方古墳群D群とする。調査区は2基の古墳を中心に500m²の範囲に設定した。調査の結果、古墳は6世紀前半に作られ、外護列石が取り巻く丁寧な作りの古墳であることが明らかになった。また、古墳の周辺や古墳基底面には、縄文時代晩期の土壙やいわゆる焼壁土壙が数基検出された。2号墳の基底面には6世紀代の竪穴住居址が出土している。

1　古　墳

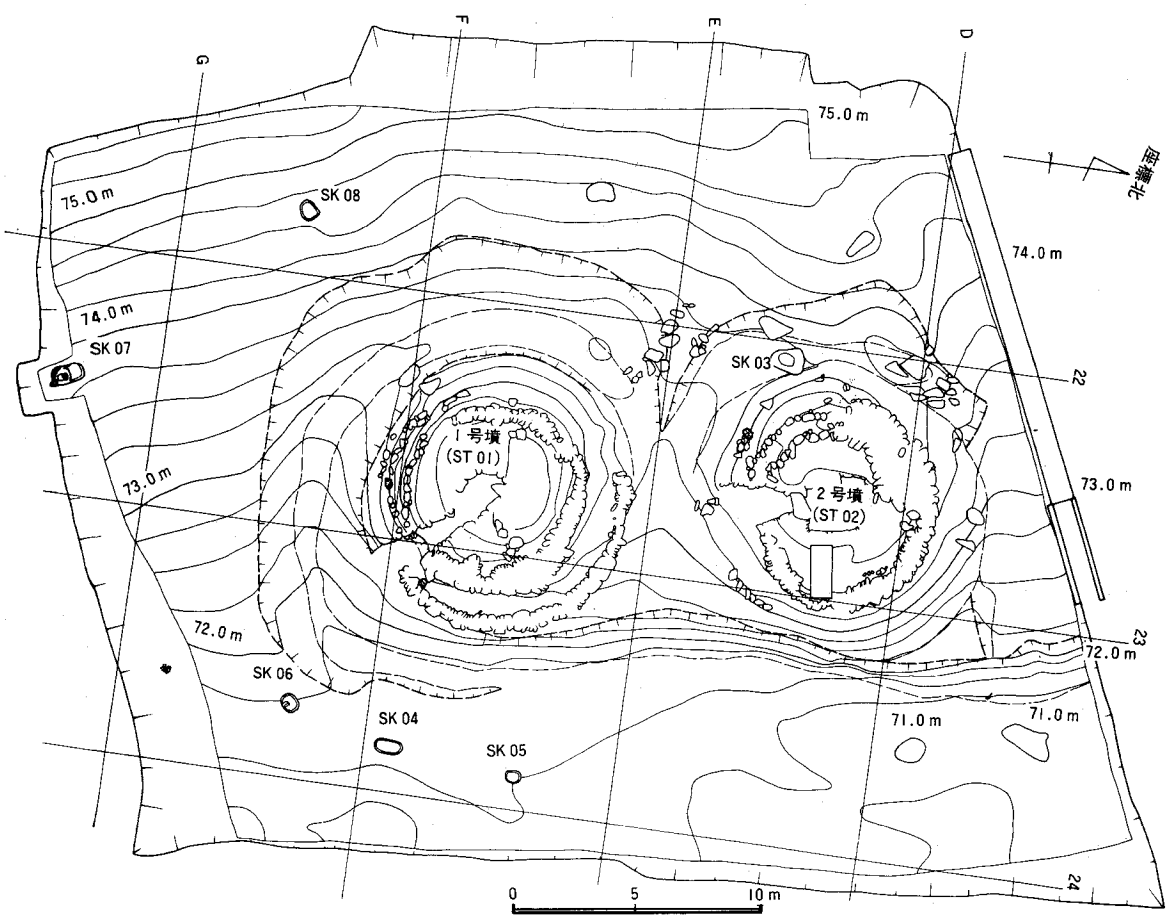


Fig. 1　　野方古墳群D群墳丘出土状況図（1/300）

1号墳（Fig.2～5、PL.15）

南側に位置する古墳である。西側の地山を削って東側に均し基底面としている。墳径はほぼ12mで均整のとれた円墳である。西側には浅い周溝がめぐる。

石室は、東南に開口した単室両袖形の横穴式石室である。主軸はN－45°－Wにとり、石室全長は4.6～5mである。玄室は長方形を呈し、長さ2.6～2.7m、幅2mで中央部が0.2mふくらむ。両側壁は4石、奥壁は3石の腰石を据え、やや小振りの長い礫を持ち送り状にレンガ積みする。天井石は破壊されて存在しない。床面には平たい礫で敷石を設ける。袖は3～4段の石積みで構成され、玄門幅は下端で0.7mを測る。玄門には梱石を置き、やや外側で閉塞の石積みを行なう。羨道端部の石積みはそのまま外護列石に接続する。

外護列石は2段で構成される。第1段目は東側だけにしか存在せず、斜面の土留との関係が考えられる。第2段目は下端の径が8mで全周巡り、特に斜面側の東には多くの礫が積まれている。また、東側墳丘内にはさらに2段の列石が確認された。列石は墳丘盛土と密接な関係があり、土層断面の観察から、石室構築と共に墳丘形成の工程として積み上げられたことが分かる。墳丘形成は4～5段階の工程で行なわれている。

遺物は、石室内から須恵器、鉄鏃、鉄刀子、玉類などが出土した。前庭及び周溝からは盗掘の際に掻き出された須恵器や玉類が出土し、一部は石室内出土の遺物と接合する。墳丘には供献の甕や滑石製の勾玉、紡錘車などが出土している。Fig.5－41は坏蓋で、器高が高く2分の1にヘラケズリが施される。42は口縁端部に段を有する坏蓋である。41～43は石室内出土。44は短脚円形透しの高坏で、口縁端部に段を持つ。1段目と2段目の外護列石の間から出土している。45～52は、墳丘東側に一括して出土したもので、45・46は高坏、47～50は甕、51は甕、52は提瓶である。Fig.2は主に水洗で出土した玉類である。1は碧玉製の管玉で片側穿孔である。2～40はガラス小玉で、そのうち8・17・29・39は明褐色を呈する。他はブルーや黄緑色を呈する。

1号墳出土の遺物は、須恵のⅡbからⅢbに属するものであり、6世紀前半に築造され、後半まで追葬が行なわれたものと考えられる。

2号墳（Fig.6～8、PL.16）

1号墳の北側に位置する。直径12mの円墳で、西側の地山を整形して墳丘が形成される。

石室は、南側に開口する只の字形の単室両袖形横穴式石室である。石室全長は、左壁で5m、右壁で4.4mを測る。玄室は、奥幅2.1m、前幅1.9m、奥行2.2mである。各壁とも3石の腰石を据え、

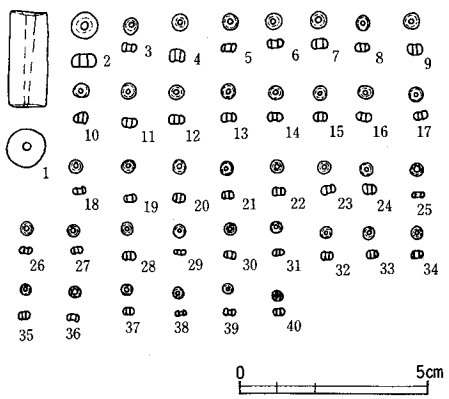


Fig. 2　1号墳出土玉類実測図（1/2）

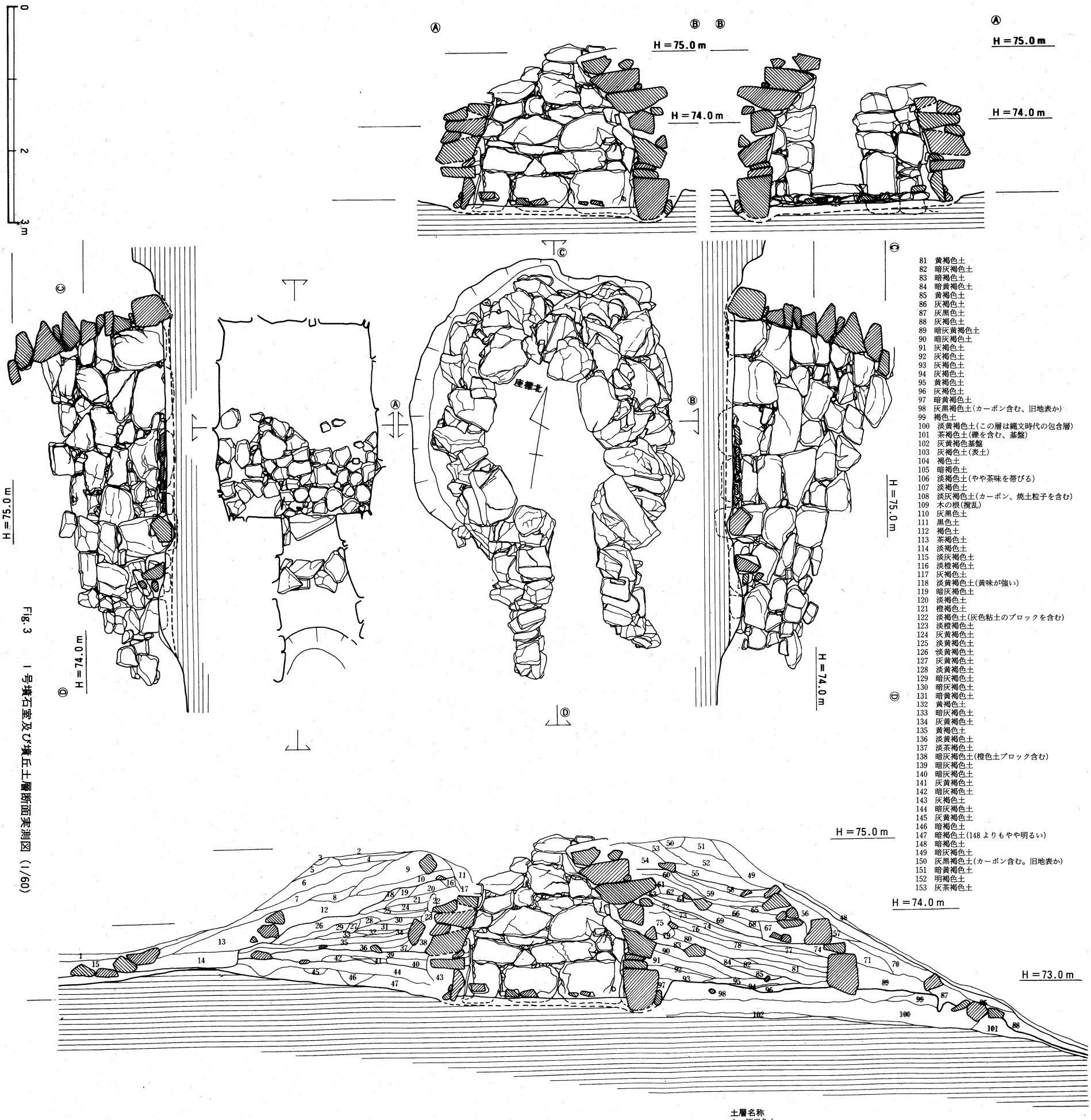


Fig. 3　1号墳石室及び墳丘土層断面実測図（1/60）

81　黄褐色土
82　暗灰褐色土
83　暗褐色土
84　暗黄褐色土
85　黄褐色土
86　灰褐色土
87　灰黒色土
88　灰褐色土
89　暗灰黄褐色土
90　暗灰褐色土
91　灰褐色土
92　灰褐色土
93　灰褐色土
94　灰褐色土
95　黄褐色土
96　灰褐色土
97　暗黄褐色土
98　灰黒褐色土(カーボン含む、旧地表か)
99　褐色土
100　淡黄褐色土(この層は縄文時代の包含層)
101　茶褐色土(礫を含む、基盤)
102　灰黄褐色基盤
103　灰褐色土(表土)
104　褐色土
105　暗褐色土
106　淡褐色土(やや茶味を帯びる)
107　淡褐色土
108　淡灰褐色土(カーボン、焼土粒子を含む)
109　木の根(攪乱)
110　灰黒色土
111　黒色土
112　褐色土
113　茶褐色土
114　淡褐色土
115　淡灰褐色土
116　淡橙褐色土
117　灰褐色土
118　淡黄褐色土(黄味が強い)
119　暗灰褐色土
120　淡褐色土
121　橙褐色土
122　淡褐色土(灰色粘土のブロックを含む)
123　淡橙褐色土
124　灰黄褐色土
125　淡黄褐色土
126　淡黄褐色土
127　灰黄褐色土
128　淡黄褐色土
129　暗灰褐色土
130　暗灰褐色土
131　暗黄褐色土
132　黄褐色土
133　暗灰褐色土
134　灰黄褐色土
135　黄褐色土
136　淡黄褐色土
137　淡茶褐色土
138　暗灰褐色土(橙色土ブロック含む)
139　暗灰褐色土
140　暗灰褐色土
141　灰黄褐色土
142　暗灰褐色土
143　灰褐色土
144　暗灰褐色土
145　灰黄褐色土
146　暗褐色土
147　暗褐色土(148よりもやや明るい)
148　暗褐色土
149　暗灰褐色土
150　灰黒褐色土(カーボン含む。旧地表か)
151　暗黄褐色土
152　明褐色土
153　灰茶褐色土

土層名称

1　灰黒色土
2　茶褐色砂質土
3　茶褐色砂質土
4　暗褐色土
5　橙褐色土
6　褐色土
7　淡褐色土
8　褐色土
9　灰褐色土
10　褐色土
11　淡褐色土
12　灰褐色土
13　褐色土
14　淡灰褐色土
15　黒色土
16　淡褐色土
17　褐色土
18　暗褐色土
19　褐色土
20　暗褐色土
21　淡褐色土
22　暗褐色土(木の根か)
23　橙褐色土
24　暗褐色土
25　淡灰褐色土
26　灰褐色土
27　褐色土
28　暗褐色土
29　明褐色土
30　褐色土
31　暗灰褐色土
32　灰褐色土
33　暗褐色土
34　褐色土
35　灰茶褐色土
36　暗灰褐色土
37　暗褐色土
38　暗褐色土(橙色土ブロック含む)
39　暗灰褐色土
40　灰褐色土
41　暗褐色土
42　暗褐色土
43　灰褐色土(橙色土ブロック含む)
44　暗黒褐色土
45　暗黒褐色土
46　暗黒褐色土
47　褐色土
48　淡灰色表層(ササの根多数)
49　淡灰褐色土
50　茶褐色土
51　淡黄褐色土
52　淡褐色土
53　暗灰褐色土
54　淡灰褐色土～淡褐色土
55　淡灰褐色土
56　黒色土
57　黒色土
58　灰黄褐色土
59　淡黄褐色土
60　灰黄褐色土
61　暗黄褐色土
62　褐色土
63　灰褐色土
64　暗灰褐色土
65　暗灰褐色土
66　灰黄褐色土
67　暗灰褐色土
68　灰褐色土
69　灰黄褐色土
70　暗灰褐色土
71　褐色土
72　灰褐色土
73　暗灰褐色土
74　黄褐色土
75　橙褐色土(砂、シルト)
76　暗灰褐色土
77　暗灰褐色土
78　黄褐色土
79　橙褐色土
80　暗灰褐色土

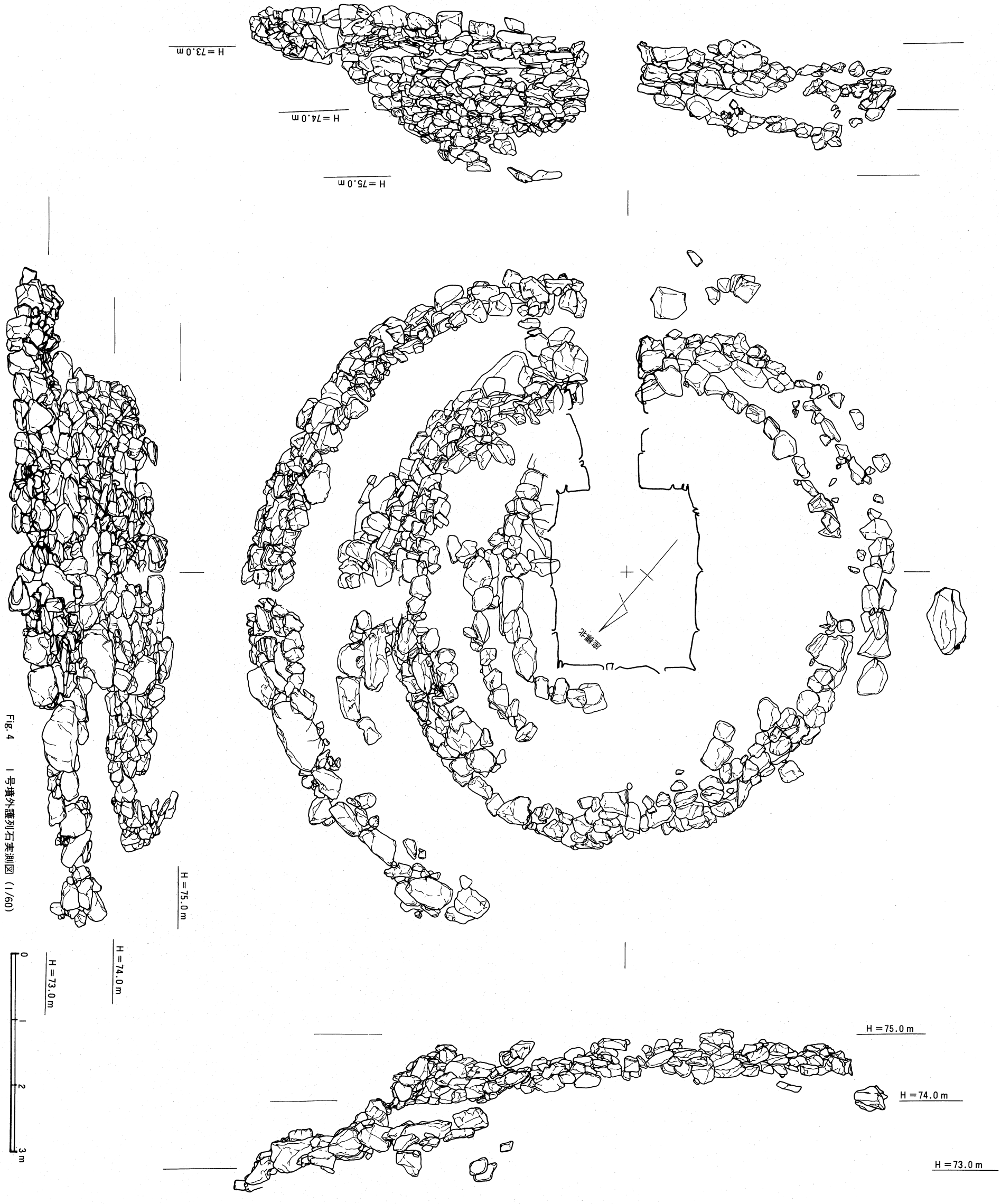


Fig. 4　1号墳外護列石実測図（1/60）

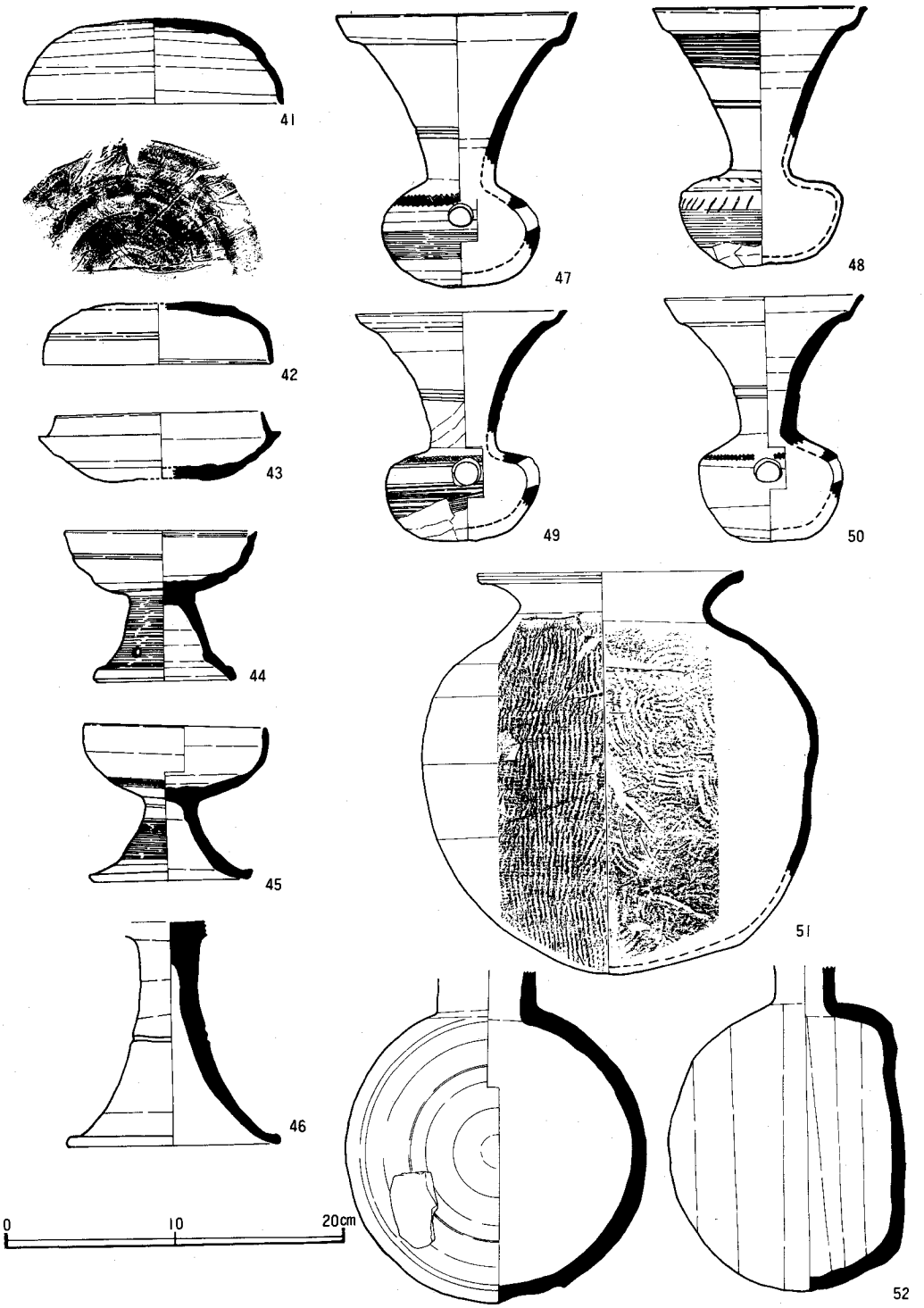


Fig. 5　　1号墳出土遺物実測図（1/4）

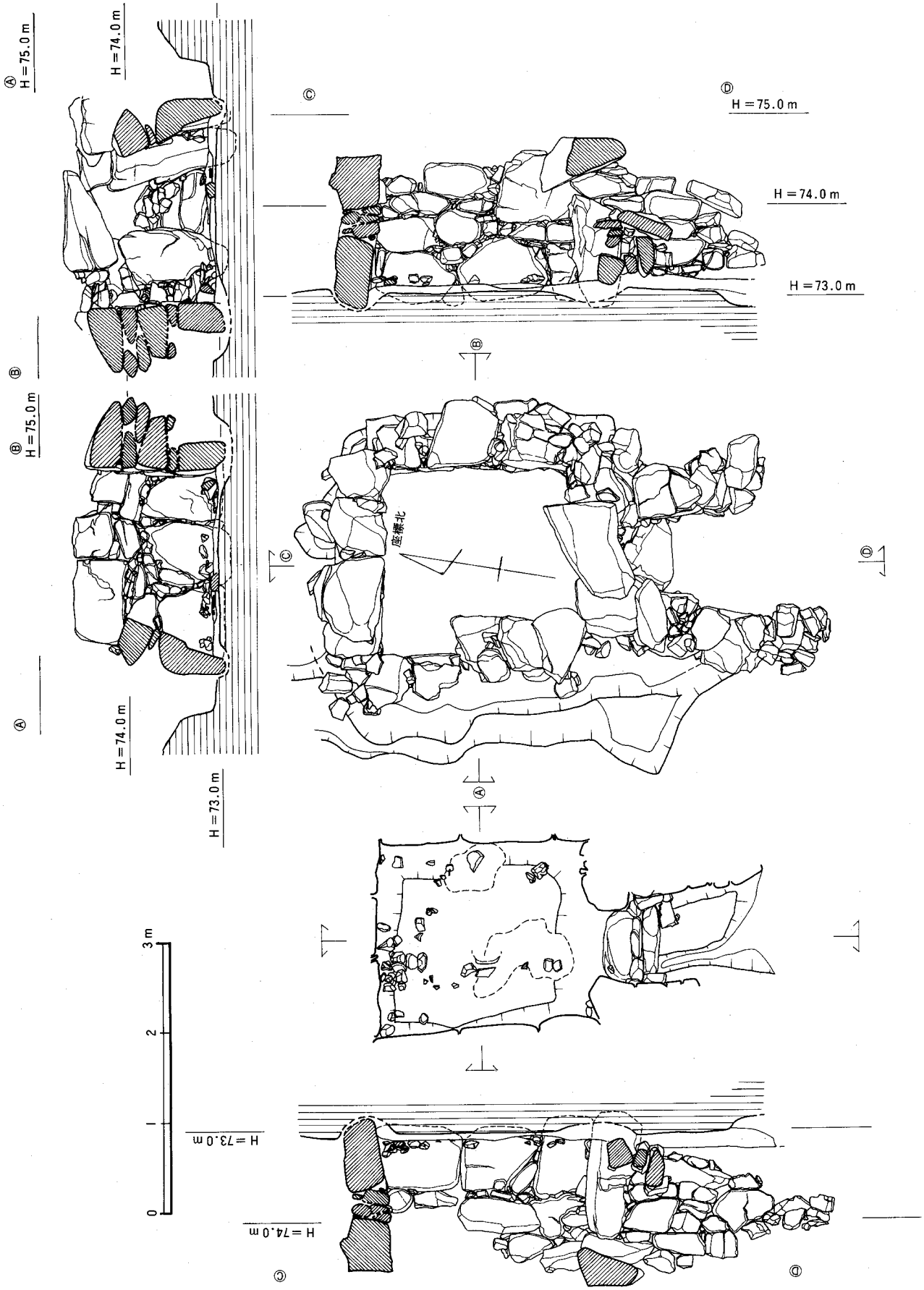
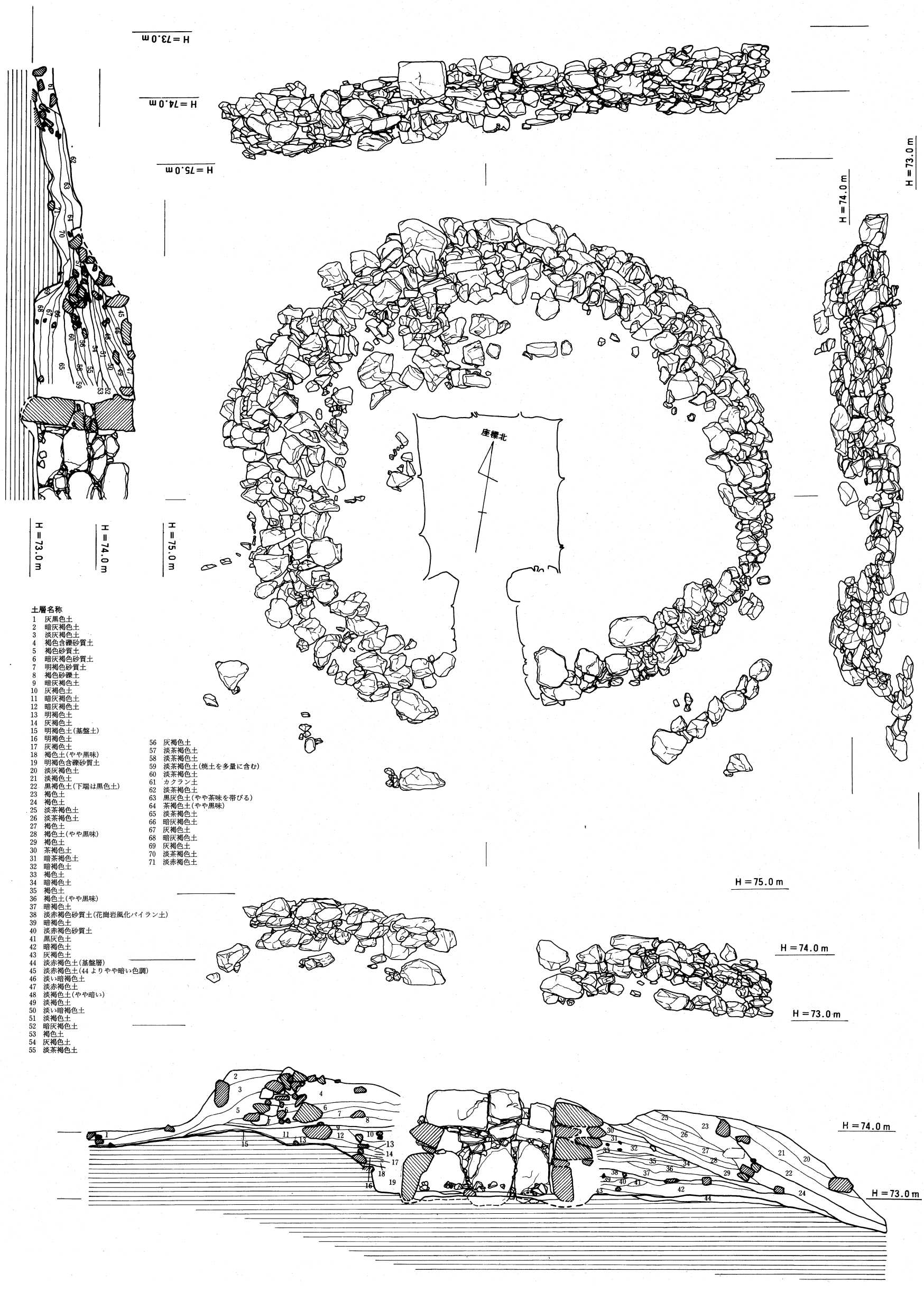


Fig. 6　　2号墳石室実測図（1/60）



土層名称

1 灰黒色土
2 暗灰褐色土
3 淡灰褐色土
4 褐色含礫砂質土
5 褐色砂質土
6 暗灰褐色砂質土
7 明褐色砂質土
8 褐色砂礫土
9 暗灰褐色土
10 灰褐色土
11 暗灰褐色土
12 暗灰褐色土
13 明褐色土
14 灰褐色土
15 明褐色土(基盤土)
16 明褐色土
17 灰褐色土
18 褐色土(やや黒味)
19 明褐色含礫砂質土
20 淡灰褐色土
21 淡褐色土
22 黒褐色土(下端は黒色土)
23 褐色土
24 褐色土
25 淡茶褐色土
26 淡茶褐色土
27 褐色土
28 褐色土(やや黒味)
29 褐色土
30 茶褐色土
31 暗茶褐色土
32 暗褐色土
33 褐色土
34 暗褐色土
35 褐色土
36 褐色土(やや黒味)
37 暗褐色土
38 淡赤褐色砂質土(花崗岩風化バイラン土)
39 暗褐色土
40 淡赤褐色砂質土
41 黒灰色土
42 暗褐色土
43 灰褐色土
44 淡赤褐色土(基盤層)
45 淡赤褐色土(44よりやや暗い色調)
46 淡い暗褐色土
47 淡赤褐色土
48 淡褐色土(やや暗い)
49 淡褐色土
50 淡い暗褐色土
51 淡褐色土
52 暗灰褐色土
53 褐色土
54 灰褐色土
55 淡茶褐色土
56 灰褐色土
57 淡茶褐色土
58 淡茶褐色土
59 淡茶褐色土(焼土を多量に含む)
60 淡茶褐色土
61 カクラン土
62 淡茶褐色土
63 黒灰色土(やや茶味を帯びる)
64 茶褐色土(やや黒味)
65 淡茶褐色土
66 暗灰褐色土
67 灰褐色土
68 暗灰褐色土
69 灰褐色土
70 淡茶褐色土
71 淡赤褐色土

Fig. 7　2号墳外護列石及び土層断面実測図 (1/60)

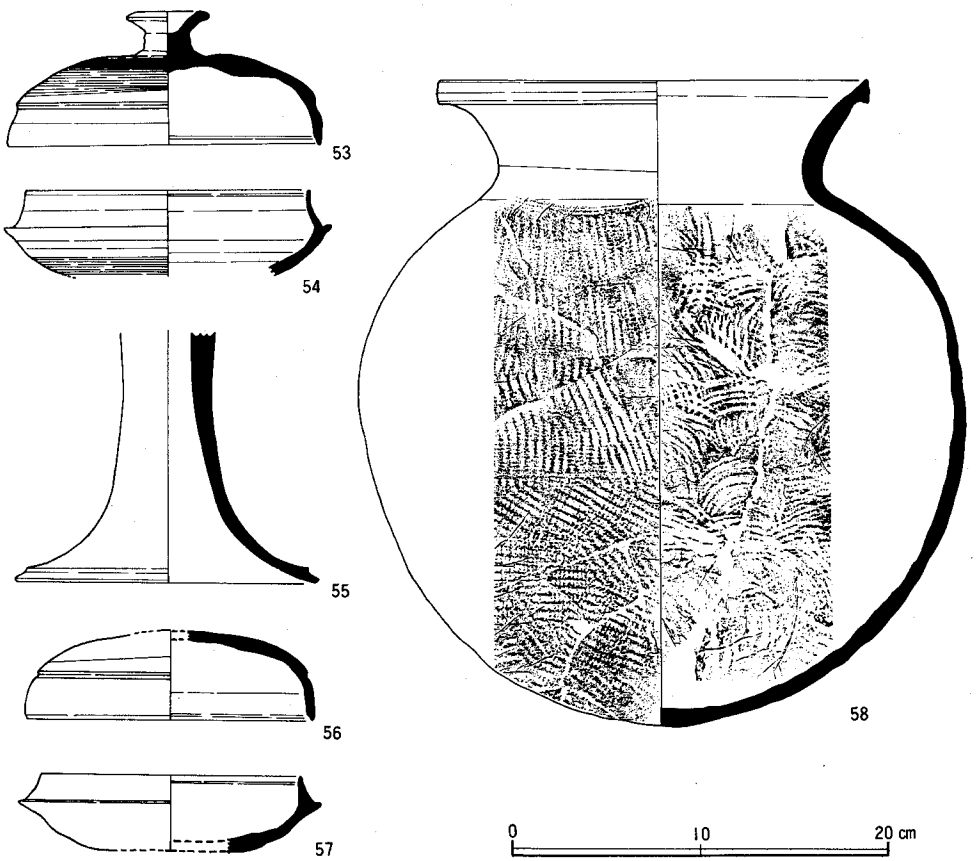


Fig. 8　　2 号墳出土遺物実測図（1/4）

やや大振りの礫を垂直に近い角度で積み上げる。袖石は縦長の石を立て、その上にさらに１石乗せて楣石を架構する。玄門部には梱石が置かれ、板石２枚と礫による閉塞が行なわれる。羨道は短かく、端部は外護列石に接続する。

外護列石は、墳丘中位をほぼ全周し、列石の基底部は東西8.5m、南北7.5mのやや楕円形を呈する。石積みは東側及び北側は特に丁寧で、北側は列石が二重に積み重ねられている。南側から西側にかけての石積みは簡略化されている。

墳丘の形成過程は、墳丘上半部が破壊されているのではっきりしないが、３～４層群の土層堆積を示している。第１段階は腰石を埋めて安定させる工程で、第２、第３段階が側壁を積みあげ、外護列石を設けて盛土を積み上げる工程である。第４段階は、天井石を被覆し、次の段階で、外護列石も埋め込んで墳形を整えたものと推察される。しかし、外護列石の埋め込みはあまり深くなく、早い段階で流失していたものとみられる。１号墳も同様であったが、外護列

石の直ぐ上に黒色土が堆積し、その上に墳丘の崩れた土壌が堆積していた。

遺物は石室内で須恵器坏身・蓋、壷、鉄鏃、墳丘で須恵器などが出土している。石室内は本来の敷石が殆ど残らないほど撹乱を受けており、遺物も現位置を留めるものはなかった。西側墳丘には、須恵器甕と横瓶が供献されていた。

Fig.8－53～55 はセットと考えられる有蓋高坏である。口縁端部には段を有し、外面はカキ目が施される。56・57は坏蓋と身で、57は蓋受けの立ち上がりが短くなっている。58は古墳築造以前の竪穴住居址から出土した須恵器甕である。

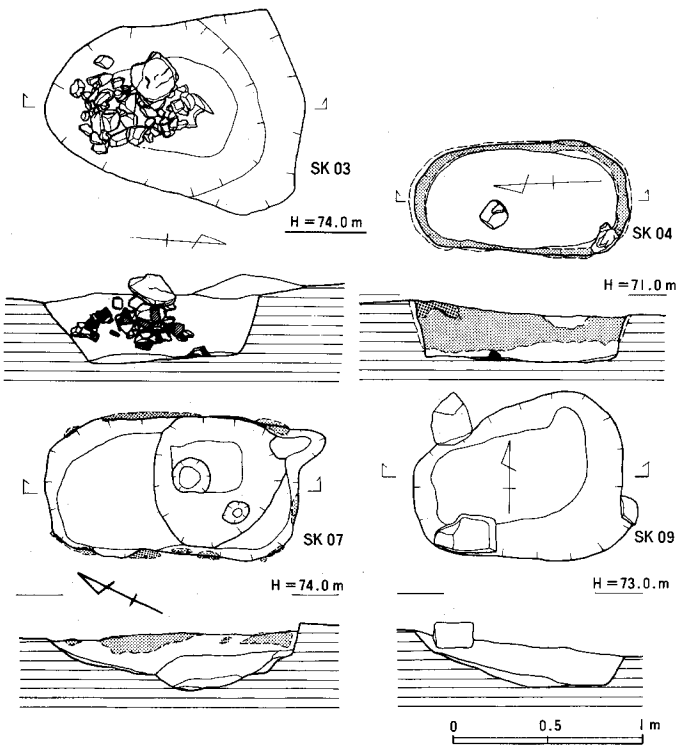


Fig. 9　調査区出土土壙実測図（1/40）

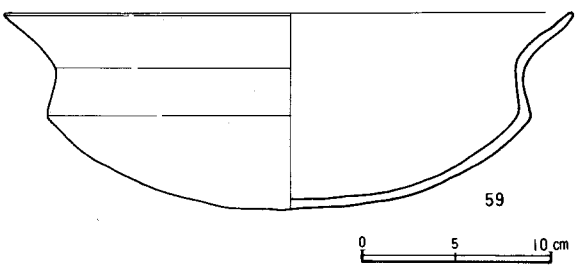


Fig. 10　SK09 土壙出土遺物実測図（1/4）

2号墳は、1号墳に次いで築造されたと考えられるが、出土遺物は須恵II～IIIbに属し時期的にはさほど隔たりはないものと考えられる。

2　土　壙

古墳の周辺や基底面から7基の土壙が出土した。その内、6基はいわゆる焼壁土壙で、楕円形を呈するものが多く、周壁は赤く焼けている。壙内には黒色の灰や炭が詰まり、壙底は全く焼けていない。時期は出土遺物が乏しいためはっきりしないが、古墳時代から中世以降まで考えられる。1号墳の基底面から出土した土壙は古墳時代に属する。Fig.9 は出土土壙の代表例を図示した。SK09 は2号墳の基底面で検出した縄文時代の土壙である。これは焼壁土壙ではない。Fig.10 は、SK09 から出土した黒色磨研の浅鉢である。晩期II式か。

(1)　野方古墳群Ｄ群出土状況（北から）

(2)　Ｉ号墳墳丘・外護列石出土状況（東から）

(3)　Ｉ号墳玄門部（北から）

(4)　Ｉ号墳奥壁（南から）

(5)　Ｉ号墳墳丘土層堆積状況（西側）（南から）

(6)　Ｉ号墳墳丘土層堆積状況（東側）（南から）

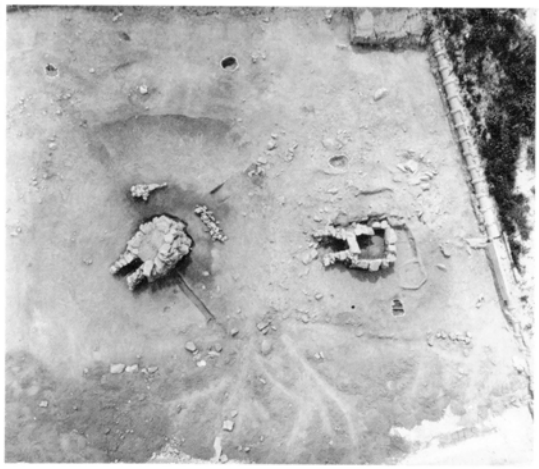
(7)　2号墳墳丘・外護列石出土状況（南から）

(8)　2号墳石室出土状況（南から）

(9)　2号墳玄門部（北から）

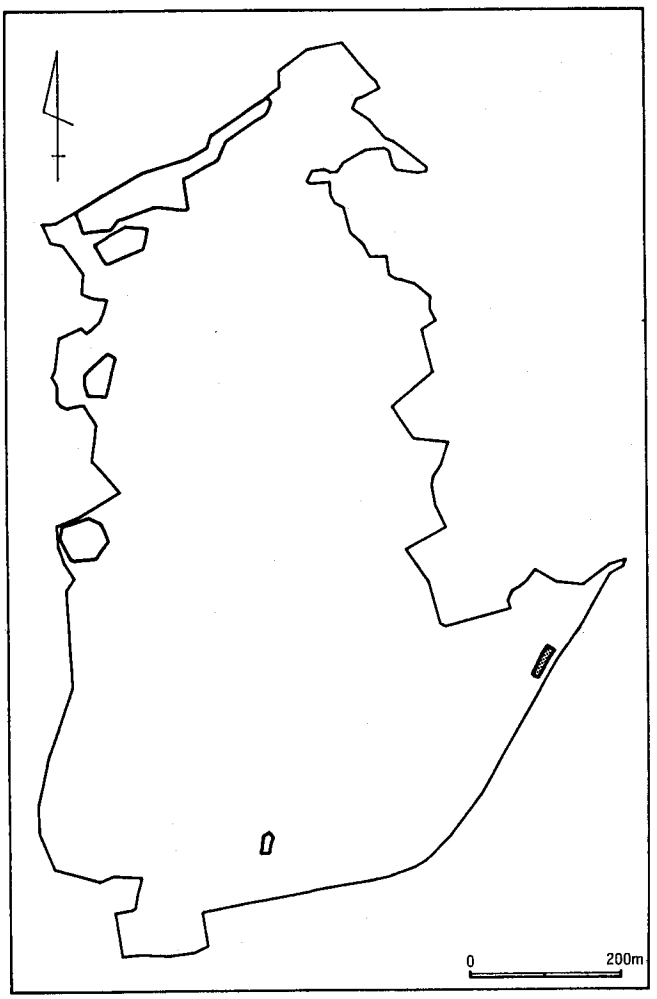
(10)　2号墳奥壁（南から）

(11)　2号墳羨道西側墳丘出土供献土器（南から）



(12)　野方古墳群D群調査状況（東から）

6．大 音 遺 跡
（第６地点）



遺跡調査番号	８６３２		遺跡略号	ＯＯＴ	
調査地地籍	西区大字野方字大音890-61		分布地図番号	１０５	
開発面積	60ha	調査対象面積	730m²	調査実施面積	730m²
調査期間	1987年８月６日～1987年８月30日		事前審査番号	58－１－170	

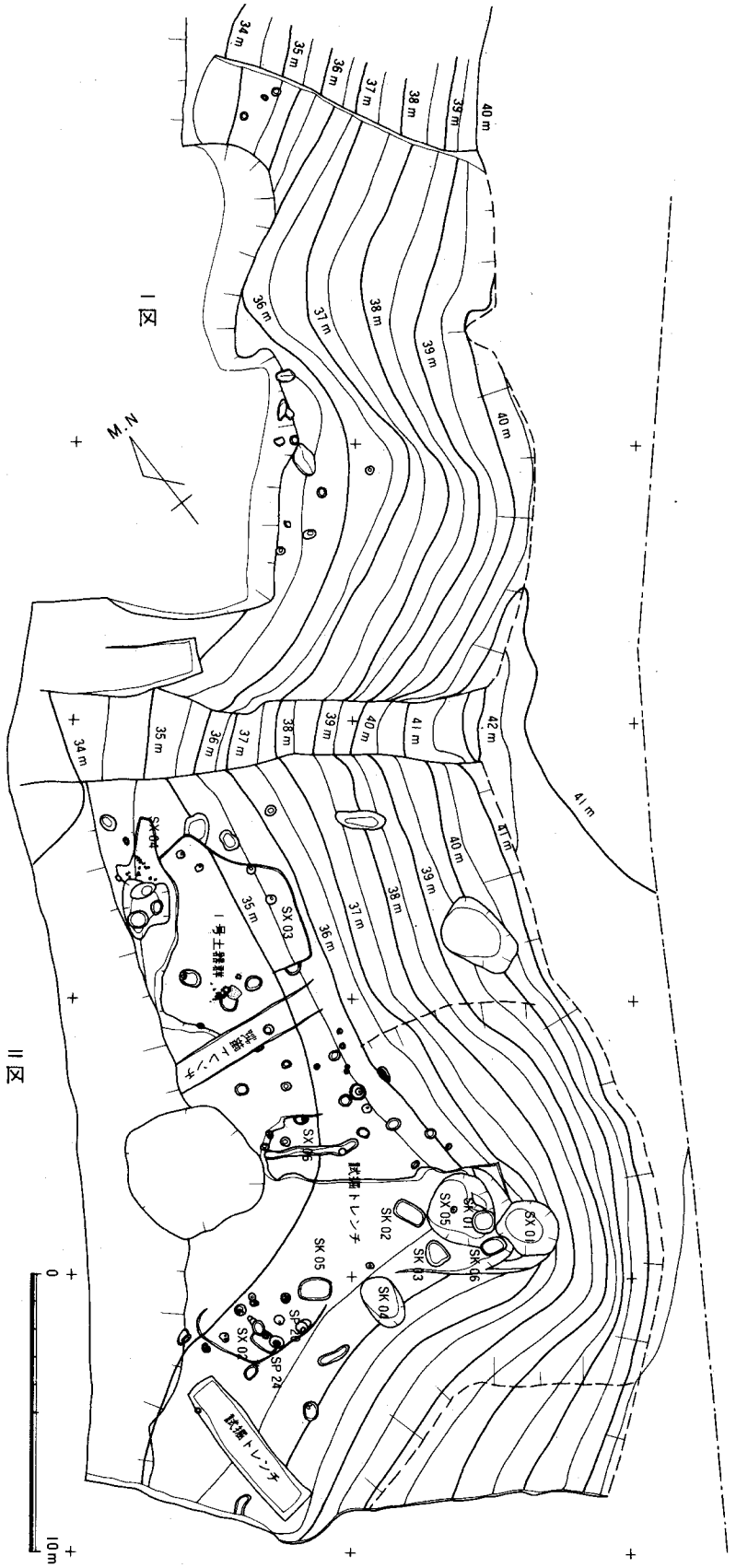


Fig. 1　第6地点遺構配置図（1/250）（調査区基準線は国土座標系より31°44′26″東偏している）

6　大音遺跡

第6地点（野方大音遺跡第1次調査）

(1)　立地と調査の概要

第6地点の野方大音遺跡は、生松台区画整理事業地内の南東部、地番が西区大字野方890-61地内にある。ちょうど生の松原団地との境界地の斜面にあり、斜面の上部は生の松原団地造成時、斜面から谷部にかけては、ゴルフ場造成や土取工事によって、大規模な破壊を受けている。

第6地点は工事に伴う排水管建設の為に、他地点より先行して昭和61年8月6日から同月30日迄調査を行なった。調査実施面積は、730㎡である。調査は試掘成果を基に中央に土層ベルトを設定し、その北をⅠ区、南をⅡ区とし、調査を行なった。遺構が立地する斜面は標高35～42mの比高差7mを測るが、遺構はその斜面を人工的に削り込んだ凸部を中心とする平坦面にあり、標高35～36mを測る。基本層序は中央土層ベルトで、上面から盛土（40～150cm）、旧表土（25～50cm）、淡灰褐色土～淡暗褐色土（20～40cm）、淡黒灰色土（10～60cm）で、遺構面は2次堆積の黄褐色砂混土である。遺構はⅡ区を中心に検出した。Ⅰ区はピット数個のみ。Ⅱ区では焼土坑4基を含む土坑6基、不明土坑5基、溝1条、土器群1ケ所、ピットなどである。遺物は弥生式土器片、古墳時代土師器・須恵器・鉄滓や鞴羽口、砥石などが出土した。遺構のおおよその時期は出土須恵器などから、古墳時代後期末頃の6世紀末から7世紀代であろう。

(2)　遺構と遺物

1号土器群（Fig.2･3、PL.17）　SX03南側で検出した。土器片の分布範囲は東西方向に長辺1.35m、幅0.55mを測り、南側には直径50cmの範囲で焼土ブロック集中部がある。厚さは最大で8cmを測る。ここからは木目直交の叩きを持った土師器の甕や甑・高坏・須恵器の高坏などがややまとまって出土した。1は須恵器の高坏脚部片、2～5は土師器で2・3は甕。3は体外面に木目直交の斜め叩きを施す。4・5は甑で5の底部には半円形の蒸気孔が2ケ所入る。

土坑（SK）

SK01（Fig.2、PL.17）　平面形は不整円形、規模は0.9×0.8m、深さ42cmを測る。床面は北側が一段と低く、壁の北西と南西側一部以外は焼けており、床面も南半分が焼けていた。埋土は暗褐色土を主体とし炭化物、焼土ブロックを含む。遺物は土師器細片6点出土。

SK02(Fig.2、PL.17)　平面形は隅丸長方形、主軸を北西方向に取り、規模は1.22×0.64m、深さ20cmを測る。床面中央は一段深くなる。東西両壁の一部、床面の北側の一部が焼ける。埋土は上部が黄褐色土、下部が黒褐色灰混土である。遺物の出土はない。

SK03(Fig.2、PL.17)　平面形は隅丸三角形を呈し、規模は0.84×0.81m、深さ26cmを測る。床面はほぼ平坦であるが、直径15cm、深さ7cmの浅いピットが1つある。西壁が部分的に焼けていた。埋土は上層が黒色土、下層が暗灰褐色土で炭化物を混える。出土遺物は土師器片が2

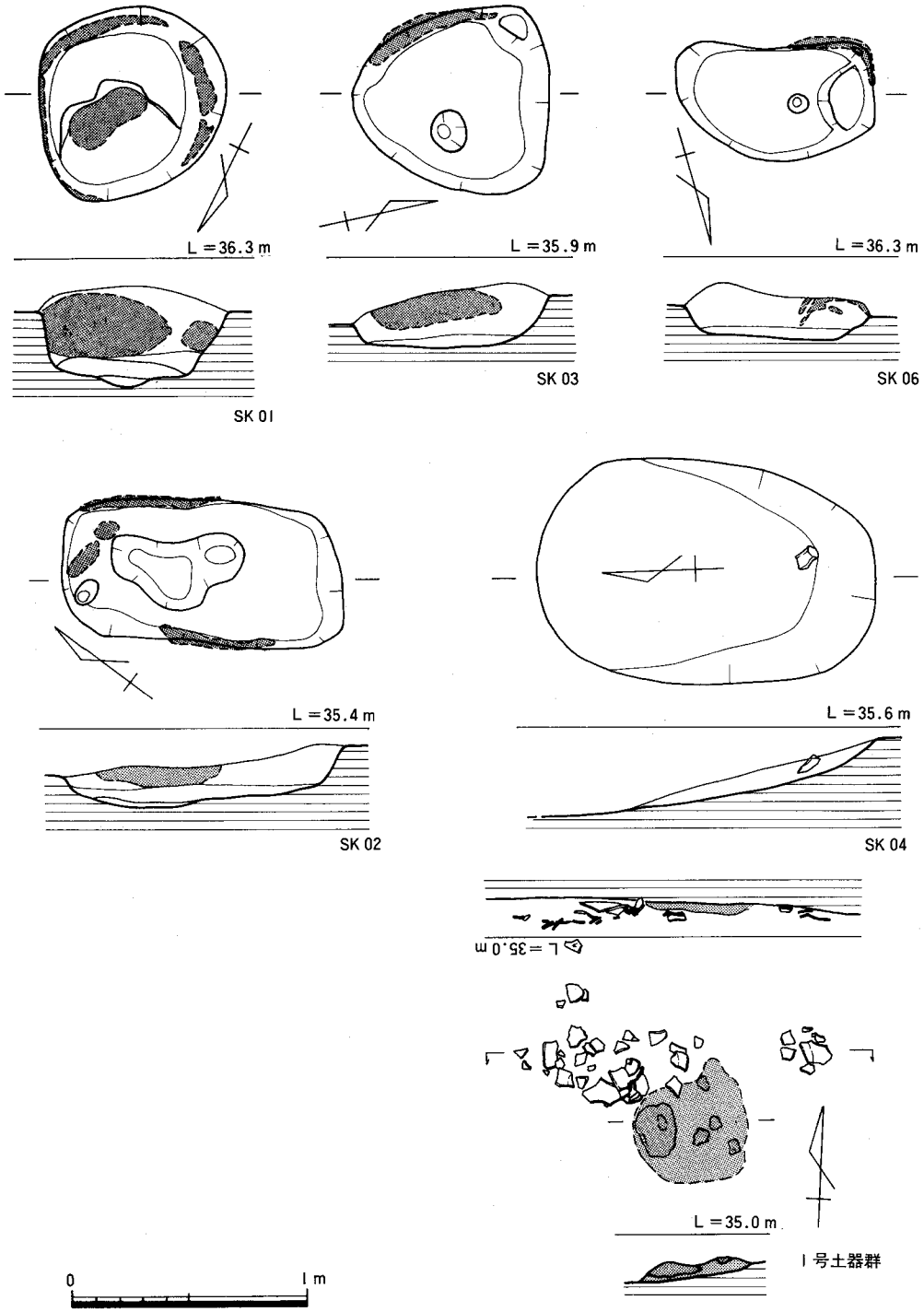


Fig. 2　SK01～04・06・I 号土器群（1/30）※方位は磁北

点、須恵のIV期頃と思われる坏蓋の細片が1点出土した。

SK04 (Fig.2)　平面形が楕円形を呈す土坑で、主軸を略北に取る。規模は1.96×1.32m、深さ10cmを測り、床面は北側に向って緩やかに傾斜する。埋土は黄褐色粘質土。遺物は土師器の甕片44点、須恵器の体部片など3点出土した。

SK05 (Fig.3)　平面形は隅丸長方形を呈し、規模は1.16×0.88m、深さ5cmを測り、全体に浅い。埋土は淡黄褐色土である。遺物は土師器片が少し出土した。7は土師器の高坏の脚部片で、脚端径は7.2cmを測る。

SK06 (Fig.2)　SX06と切り合い、SK01より古い。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は0.85×0.5m、深さは22cmを測る。床面は北側がやや深くなる。南壁が赤く焼けていた。北側床面には炭化物が散布する。埋土は黄褐色土で、炭化物を混入する。出土遺物はない。

不明土坑 (SX)

SX01 (Fig.3、PL.17)　斜面を削り込んだ先端部にあり、平面形が円形を呈し、規模は2.25×1.95m、深さ27cmを測る。床面は北へ傾斜する。埋土は褐色砂混土。遺物は土師器片少々の外。鉄滓2点出土。7は土師器の甕形土器でSX04のものと接合した。

SX02　平面形が不定形を呈し、規模が4.8×2.2m以上、深さは5cmを測り浅い。埋土は黒灰色土である。床面には11個のピットがあり、長さ30cm、厚さ6cmの板状の石が1つあった。出土遺物は弥生式土器や古墳時代の土師器、須恵器、鉄滓8点などがある。

SX03 (Fig.3)　平面形が不定形状の浅い落ち込みで、規模は6×4m以上を測る。床面は傾斜を持ち、埋土は黒褐色から暗褐色土である。出土遺物は古墳時代の土師器、須恵器片などがややまとまって出土した。8は土師器皿で器形的に見て中世後半代のものと思われる。底部は糸切りか。9は弥生時代後期中頃の壷形土器の口縁部片と思われる。

SX04 (Fig.3)　調査区北側で検出した不定形状の浅い土坑で、規模は長さ2.2m以上、最大幅2.2mを測る。埋土は黄灰褐色砂混土である。南半床面から古墳時代の土師器や須恵器片が出土した。10は須恵器の坏蓋で、V期のものである。

SX05 (Fig.3)　SX01と相接し、平面形が不整円形を呈し、中央がやや深くなる。規模は2.55×2.45m、深さは中央で40cm位である。中央に直径20cm、深さ9cmの小ピットがある。埋土は上層が灰褐色粘質土、下層が黒灰褐色粘質土である。出土遺物は古墳時代の土師器甕・甑・須恵器の坏片などが若干出土した。11は上層より出土の須恵器の坏身でIV a期位であろう。

ピット・遺構面出土遺物 (Fig.3)　12はSP20出土。須恵器の小型壷の体部片で、焼成はややあまい。13はSP24出土で、土師器の高坏脚部片。14は鞴羽口片で、II区表採。15は小型の手持砥石で砂岩製。II区遺構面出土。

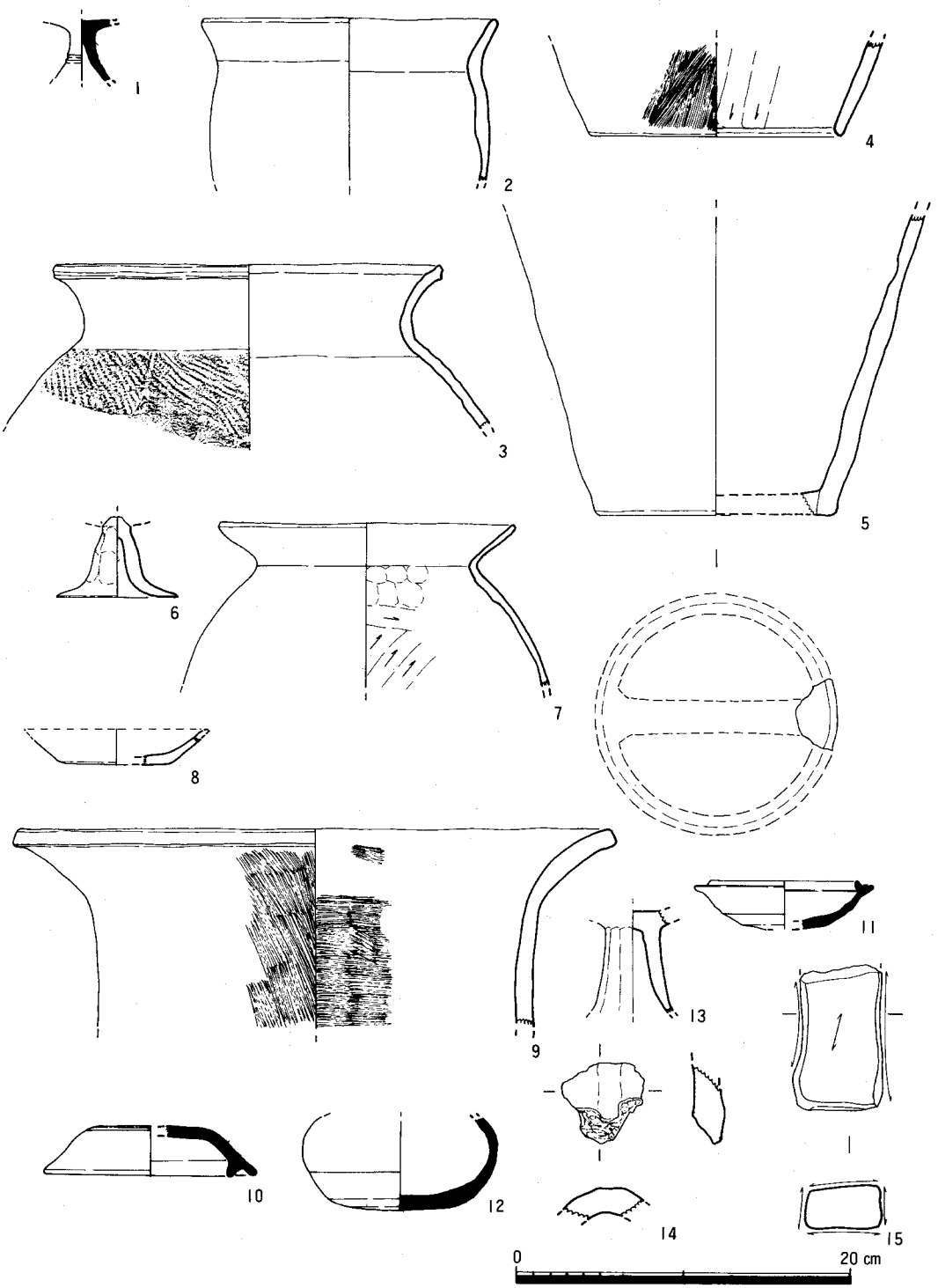
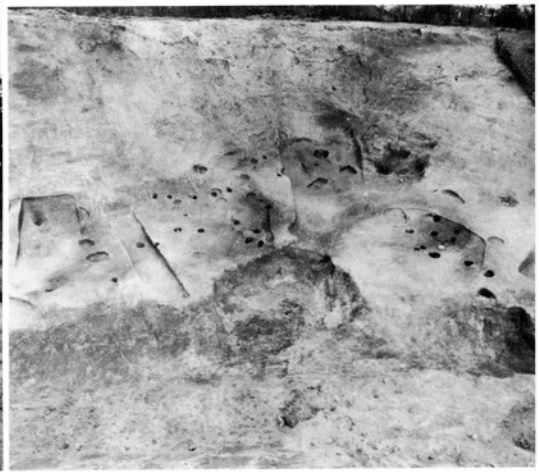


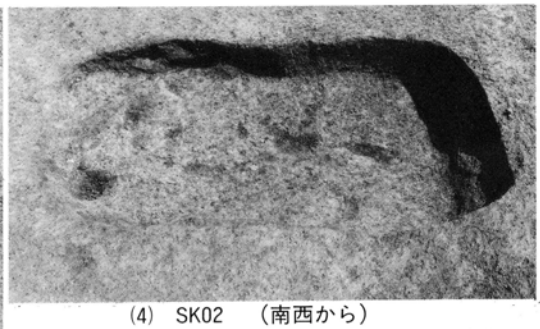
Fig. 3　第6地点出土遺物(1/4)（1～5は1号土器群、6はSK05、7はSX01、8・9はSX03、10はSX04、11はSX05、12～15はピット・遺構面出土）

(1) 調査区全景（西から）



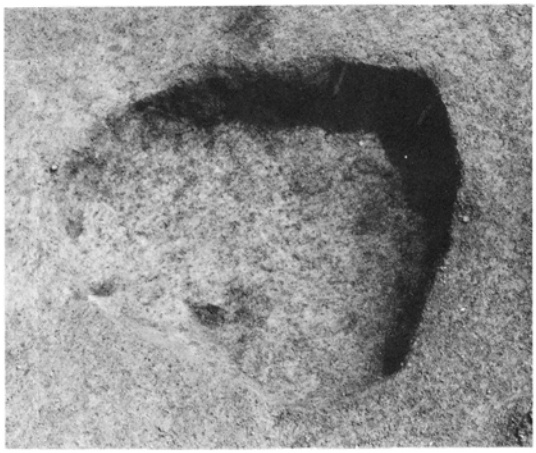
(2) 遺構検出状況（西から）

(3) SK01 （西から）



(4) SK02 （南西から）

(6) SX01 （西から）



(5) SK03 （東から）

(7) 土器群出土状況（南から）

生　松　台

福岡市埋蔵文化財調査報告書第226集

1990年（平成２年）３月31日

発　行　　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1-8-1

印　刷　　有限会社　松古堂印刷